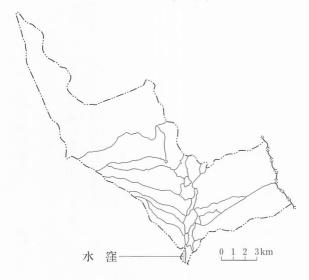
図表 3 - 53 水窪の位置



第

節

地

理的概要

第

水

窪

街道の中継地 < 小さな集落であ カン つての街道 りな 筋 に寺 が や共同 中

井戸、 -央を貫

と御殿場を結ぶ旧道沿 印 通によって主 共同墓地、 たとい 家を受けるのが水窪である。県道沼津・小山線 われ 石塔群などがきちんと揃 一要道路ではなくなってしまったが、 5 で、 中継ぎ場の役割を担 つ 7 いる、 沼 0 2 開 7 津 j

1

る。

堰 通う古くからの 1 \$ うか 水窪 をかかえてお かし、 がえる。 0 4 黄瀬川に最も近く、また大堰という重要な ラにとっ り、 重要な橋である。 また黄瀬川に架かる橋は、 て 水害と水争いに苦労してきた様子 Щ 資源を得るために愛鷹山 Щ 「を持

たな

位

水窪

は

裾

野

市

0

南西端

15

位置

南

北

約

が

あ

る。 置 北と 東は久保田川を境にして伊豆島田 東西最大幅約四六〇以 ٤ 0 広 南

地地

利

用

北形と土

水

窪

0

基

盤

は

富

士

Ш

0

溶岩

流

で、

そ

0

は 長 長が 泉 泉ずる 町 町上土 南かなみい 色に 工狩と納 対して 米の 不里に接、 1 L 西は 黄 瀬 川 を隔 T

0

KE に よる そ 堆 0 容岩 積物 が厚く 流 部 0 が 上 黄 覆 に 瀬 富士 いい Ш 0 L Ш 河 かも全体 0 床 土石 15 露 流 出 ic L 北 黄 T 瀬 カン 1 3 Ш る。 南 0 に向 さら 氾 濫

に 祖 0

まつら

ń

T

る。

れ 自 は 1 か [然河 浸 T る 久保 食崖 5 緩 る。 Ш で、 田 が く傾斜する台状 ほ Ш 連 は ぼ 続 西 全域 側 L T に カン が水田 お 小 0 り、 規模な棚 T 黄 地 で、 瀬 ま 形となっ た伊 Ш 黄瀬 状 0 分 0 豆 河岸 T Ш 流 島 い カン 田 0) 3 段丘 る。 0 境とな 取 0 水され 黄 が で 瀬 形 あ 成 Ш 2 0 た た T 畔

3 KE 黄 沿 集 瀬 て形 落 15 架か 成され 集落 岸 0 沼 る新愛鷹橋を渡っ は県道 てい 津 カン らたむ る。 沼 津 現在、 柄 • 峠 1 を Ш 県道沼 T 越 線 玉 え 0 道二 た 西 津 側 カコ 四六 0 T 小 黄 一号に Щ 0 瀬 線 街 JII 抜 道 東 か

> 高か 小山

線

建

設

J

け

る

道が、

集落を二つに分断した形になって

い

る。

ح

須 器

恵器

は形態から見て七世紀代後半

のも

0

であ

る。

遺

建ち、 道 宗教 道 神 0 ٤ 南 から北には公民館や庚申塔、 新愛鷹 地 施 に 蔵 は 設 が、 から Ш 橋 あ 0 脇に 神 西 る。 が 端 ま 0 ま は 黄 共 た 0 瀬 3 同 集落 Ш れ 墓 地 沿 長さ 1 0 \$ 唯いたれ 東端 に 教寺じ あ 馬 る。 頭 0 の名号碑 県道 観 水 そ 音 窪 0 向 が 沿 神 対 社 などが カン 称的 に など い 道 側

節 歴 史概要

水 1 窪 中 世 以 前

大堰

用

水

に

よっ

て灌

漑

3

れ

T

1

る。

高 田遺 跡 九 五. 三 昭 和 十 富る 士也 特 設

0 た め 道 路 米 R 玉 御 殿 軍 用 場 道 線 路 水 窪 現在 踏 切 県道 東 側 沼 0 津 字

田だ の高台付 で土 取工 長 頸壺 事中、 個 表土下の 体 ٤ 同 破片、 7 サ 層 木炭 (堆積 が 層 発見さ か 3

当

地

5

堂を建

ててて

長教寺

を興したと

田

0

臣

ح

11 15

地 落

理

的 0

に び

2

ると三島と沼

津

^

往来する分岐

点 3

ば、

郎次郎兼は 渡辺 た と長 たとす 教蔵 盛 る。 は 中 る 紀 兀 世 が 前半 伊 五. 国 八(長禄 駿 熊 までは 河 野 記 那 智 資料 等 年 社 12 15 が よ 願 な 水 る 文を奉 窪 い ٤ 0 0 佐 住 で 野。 納 不 八渡部 五 郷 明 L T で で Ŧi. あ 1 あ

構

は不明

のだが、

古墳で

あっ

たと考えら

れ

る

人佐は 氏 る。 が退 文書 Ŧi. 去 に 水 七 窪 Ö 0 よると、)(元亀) あ で とは北条家領 八貫文の 元)年、 水窪 は 北 葛がずら 知 条家 山岩 行分を与えら (直轄地)となっ 氏が支配し 朱 印 状 に よる n てい たことが T 7 たが、 1 渡れなべ る。 口 わ 2 蔵

ば とし 盛 条家朱印 0 開 て 基 族 る は 状 で (「静 は 渡辺蔵人とい は な 岡 長 15 県史料』 教 カコ 寺先 とす 1 祖 る。 から 輔)。 武 所 ٢ 0 持 長 水窪 家 L 教 T 家 寺 長教. 5 由 た で家来 来 寺 \$ 神 0 所 に で 蔵 t あ 0 族 北 n る

か

る。

ま

た

渡辺

蔵

人佐

は葛山

先方衆

で、

前

記

0

渡

部

兼

る。 八

と徳 世 力 を で 以 4 持 が ΪΪ ある。 来 あ 0 2 氏支配となっ T 1 水 たことや、 渡部 窪 1= 13 から 8 兼 X で 馬 盛 北 て近世を迎える。 あ から つろう。 熊 物資 条家 野 が 0 願文を奉納する 水 継 直 窪 轄 ぎ 領に は 場 争 後 継 北 たこと 地 条支 的 だ 配 け な 性 0 0 あ 格 中 財

2 沂 世

領、 六 支配 (安永七)年 村高 五. 記と村高 七一六(享保元)年 石 余、 は -以降 天明 IE 葆 支配 原 沼津 藩 高 郷 帳 は 帳 領 藩 で C 以降 領 は は ٤ 七〇 六三二(寛 なり明 八 六 再 U 几 四四 八(宝永 小 石 石 治 余 余 田 永 原 維 Æ. 九 天保郷 藩 新 元 禄郷 年 年 領 を 迎 以 以 帳 え 路 路 帳 では T 七 幕 小 で は V 七 府 \mathbb{H}

八 戸 数と寺社 Ŧi. 石 合のであ 御厨小泉 る。 七 四五 庄 (延享二) 水窪 村

年

駿

州

験は

東

郡

書

上 0

銘

細

帳

に

よ

n

家数三〇 軒 と比 較 的 小 村 で は あ る から そ 0 内 訳 は

693

真宗浄(常)水山長教寺(除地六斗五升)と蔵王権現社(除的要素も見える(『市史』三-五一号)。村内には、浄土名主一・組頭二・本百姓五・無田一六・地借六と町場

四斗二升) 継ぎ場と十 が ある(『駿河 水窪 村 は 記 = 島 下巻)。 宿 . 沼 津 宿 カン 3 甲 州 •

一役所

州

向

かう通路

0

要

衝に当たり、

御

用

た。伊

相

豆

島

田

0

役

人

から

毎

月

小

田

原

まで

出

向

1

T

納入して

水窪

尺 を輸 置 た。 P あ 商 余の庇をそなえた二間 る。 カン 送 また、 n 人の諸荷物を継ぎ送りする継ぎ場(中 居宅は一 た。 販売する際、 ここに れ 軒で、 は は 伊豆 Щ + 長さ五間 方 島 分 0 • 九尺の 村 田 0 村 カン 3 0 とともに十 横二 税を徴収するも 沼 「曲ケ座 津 一間半、 竹 継地) 敷 木 分 三方に二 薪 役 で が など あ 0 所 あ り で が

ため、 n てい 2 る。 村高 + 分 なお、 のうちから六二石余を諸役を勤 役所に関する人足を水窪村が勤 居宅は当初東西二軒であっ 8 たが、 め る際引か てい る

歩

0

高

地

で

あ

る

が

「御拾分

銭

御改

所

で

あ

0

た。

敷

地

は

畝

役所において徴収された十分の一役(税)は、一軒のみとなった。

III 大堰 ち、 15 に三本の水路に分けら 利 下郷として 0 一西 水窪村 大堰 崩 から取水された用 掘)と呼ばれる水路 してい (堰原大堰) 水窪村 で あ から る。 れる。 水は、 は 取水する下郷 から 井 深良用· 組 取 その下 水窪村 水し、 郷 とい 水掛 は 流 田 の に 3 かりの村 水利 地 属 このうち 一俣堰 用 水と飲 組 T でさら の一つ のう 水 西

根 で 水 あ 湖 田 七 水 は 0 地 0 刀口 た(『市史』三-水掛 掛 五. カン (延享二) り高 カコ りが は 年 の村明 五. 石 七 〇石余で 号)。 斗 細 余 帳に このため、 反別 あ よれ る 0 反四 に ば 対 水窪 畝 して、 七〇七 余の 村 箱 2 0

写真 3 - 56 大堰

どに に際 (宝永四)年に始 は かし、 しても ほとんど参加し 七七〇 水窪 なまる上郷 村 は (明和七)年とその翌年の早害によ な 井 中郷の 組 カュ 15 属 た 下 な 郷 が 3 0 大規 寄 合や 模 水 な 水 論 な 論

反別 配人は地水・湖水に カン ることになっ よって、 ように つ 七二石 り T 同様 が著しく増 起こった水 なる。 E 0) 斗余 諸 郷 負担 た。 村 七七六(加 論 反別 この した。 から 0 をきっ 課せら カコ 特 後 権 かわらずすべ (安永 カュ 的な用水慣行は 町 れ 地 け 五年 水掛 ることとな に 八反六畝余と水掛 だ下 かか 水 窪村 り ての用 ż 0 り 8 田 否定さ れ 深く関 水を管 た に 裁 水 \$ 石 窪 湖 許 高 村 水 理 状 わ 掛 す 水

たも た穴堰 に 六六江)の隧道を、 に 用 間(約三・六半)ほど長さ一二間 堰 と水論 田の穴 0 高さ五尺五寸 水を引く重要な堰となってい で は あ 納米里 15 よっ 六七三(延宝 (約一・六五以)、長さ 水窪村 て水窪 上 狩 から納米里村 中なかと 村の 元)年に、 野の 狩り (約二一・六) る。 田だ 下土狩り 掘り抜 この穴堰 5 う所 くと掘 兀 八間 き に 0) 0 元締 0 は 掘 几 割 抜 カコ 3 堀 横 村 8 れ

行 が 制 度 対 的 立 に が は 目 確 立. 立 0 L たが、 てくる。 近世 下郷でい 後 期 は に なると井 三俣堰 組 0 取 各

水 四 をめぐる水上・ (文化十一)年に、 水下の 水上 村々の 0 水 対立 窪 伊 が 豆 頻発する。 島 田 ほ か 八

米 里 上土 狩 (以上長 泉町)の 村 次 は 水 下 0 中 土 狩 納

下 0) 村 土 々 狩 に訴 (以上長泉町)、 えられる。 竹原 また一八五二(嘉永五)年に 伏見·新 宿は 以上 一清水町) は

俣堰 け 水 上村 T い を 破 々が る。 壊 水下 穴 堰 は 関 村 カへ 係 水 者 下 0 から 沼津 分水を阻 村 々 ٤ 役 納米 所 止 カン 里 ら手 するため穴堰と三 • 上 鎖 土 0 狩村と 処分を受 0

は

伊

豆

島

田

村

のままであっ

たの

で、

水窪

村

が村名変更

村名 月に

3 近 現 掛

合堰

な

0

であ

0 行政単位 が めまぐるしく変わ 水 施 行 窪 まで \$ 12 八 は 八 九 市 (明 域 治 0 三十 他 0 村 年 々 0 ٤ 町 百 様 村 制

七

長 15

が

よっ

て廃

止

3

れ

再び近世

以来の

水窪村

に民

選

0

戸

八七二(明治五)年の大区小区制の導入によって第

15

市

0

てきた。

そ

0

所

属

水町 11 大区 X 域 制 0 <u>ー</u>の 0 一二か村とともに第一大区二小区 再 小区 編 に より、 と編入され、 現 在 0 長泉町 七 几 域 (明治 の 一 七 に編入され 年 カン 0 村 大区

とに た。 なる。 市 域 では、 その 1: 水窪村 め 水窪 だけ が別 村 は 伊 0 小 豆 区に 島 田 編入され 村

٤

0

併

を

たこ

願 前 0 年 十二 通 0 聞 月県に 言き届 願 け るとの指 1 出 た。 そし 令が おりる。 て、 八七 L カン 几 年

は を 願 伊 1 豆 出 たが 島 田 許 村 可 内 3 元水窪 れ ず、 村 大区 とし 小 区 制 て三小 0 時 X 期 内に 水 定村 あ

区小 た 区制も、一 0 ちにこ 0 合併自体が解消され 八七八 (明治十一)年の郡 た。 X そしてこ 町 村 編 制 0 大 法

年 置 15 カン は戸 れ ることに 長 公選制を廃され、 なる。 L カン 戸 L 長 0 官 八 選と 八 四 明 長役 治 +

場管轄 域は東西に二分され、 X |域の改定がなされ 水窪は た その 「佐野村ほ ため、 谐 瀬 カン 一二か Ш を境

後

水

窪

は

小泉村

の一大字となる。

世帯、

四

1 Ŧ.

÷

涥

K

県

認

可

を得

て泉

村

が分立する。

九

七

松。

荷の六大字

0 0

分離が

決議され、

一八九一(明治

三人となっている(『市

史

行後初め

ての村会で、

茶畑・久根・公文名・麦塚

.

平

施 が 0

村 根ね 波な は は・公文名 の 一 石に \equiv 脇き X か 域に組み入れられた。「 るいなり 村で、 佐 野 戸 . 伊 茶畑はたけ 長役場 豆 島 田 麦塚が は 佐 水 野 • 佐 平松新田 窪 村 野 • → ふ た 12 村ほか一二か村」 置 一ツ^kっ 屋^{*} カコ れ • 新に 深 ることに 良 田人 。久 岩が <

併

戦

後

九

Ŧi.

二(昭

和

二十

七)年

に

小

泉

村

٤

村

が

合

な

っつ

た。

え 良 캦 重 広大な林 0 0 一要な意味を持 た 八九年 . 0 岩波 行政 八八八(明治二十二)年、 村 一二か村で小泉村となった。 間 村 の二 野 に 0 須山 確 に が 関係 執 一村で深浪村、 誕 生 村 は容易に解消 · 富岡村 する た。 L た。 その 村落で 佐 ため、 ほ 野 市制 深かなみ せず、 は 村 カン 13 町 しか 村 小泉村で カン 財 村 か村に富沢村を加 産 ことに . 二か Ľ 制 1 0 0 泉村、 所 行政村· 公布に は 茶 村 有 とい 畑 では、 町 所 村 利 より、 内部 3 制 用 在

深 加

寺

軒

人口

四七人(男七五人・女七二人)となっ

T

1

る。一八八九(明治二十二)年頃の「分合見込町村

調

六年 村 i と富 T に 年 裾 市 K 岡 は 野 制 深 町 村 が 良村 施行され、 から が 裾 誕 野 が、 生 町 す K る。 現在 合併 九 Ŧi. 2 七 の裾野市となる。 L 3 昭 に 和 九七一(昭 一 十 三 九 Ŧi. 六 年 E 丽 は 几 和 須 +

Ш +

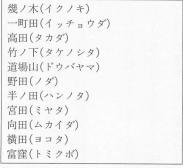
戸数と人口 査」に 一八七五(明治 よれ ば (八)年 家持三〇 . О 「小区 戸 社 表 編 座 立

女九〇人) である(『市史』 書(新小泉村)」では、三五戸、一九〇人(男一〇〇人・ る。一九三六(昭和十一)年に 三人、一九二三(大正十二)年には三〇五人となってい 人口 .動向」 に よれ ば 几 五一七 - 三四七号)。 九一三(大正二)年に は戸数四五 九六号)。 芦、 また 人 П は 泉村

四四 韶 人である。 和 五. 十)年 これ 0 玉 勢 は 調 查 八 によると、 七五年 0 統

図表3-55 水窪の字一覧

図表 3-54 水窪の字





島

田

•

堰

原

新

"

屋

新

田

ととも

に

洗光

日常

舎

を

創

立

す

ĩ

7

を

比べ 帯 数 ると から Ŧi. 世 帯 約 倍 六 倍 九 0 人 八 增 人と 加 口 で から な あ り る。 几 =倍 ま 0 た 增 车 九 前 で あ 九 に 比 Ŧī. ~ 年 に る と世 は

4 業 職分表 八七 Ŧi. では、 明 治 八)年 農 0 0) 五人、 小 区 僧 表 編 人と 立 調

查

見込町 町 兀 反 村 調 Ш 林 書 原 新 野 小泉 雜 種 村)」 地 に 町 t 七 れ 反となっ ば 水 T 窪 0 1 耕 る。 宅 そ 地 0 九

T

お

り、

農業主体

であること

が

わ

カコ

る。

ま

た

分 な

合

宅 訳 反 地 九反 步、 八畝二一 雜 種 歩、 地 反 Ш 林二 匹 畝 町 六 四 歩 反 六畝 で あ 几 步、 原 野

内

は

田

几

町

畝

几

歩、

畑

四

町

=

反

四

畝

七

歩、

在

0

裾

野

市

7

西

小学校となる

(第

○章佐野参

を

て

現

あ た な るため、 お 水窪 駄賃 から 御 殿 0 け 場 7 などを副 沼 津 を 業に 結 3 す 街 る 道 家 筋 \$ 0 中 あ 継 2 た。 地 15

学 校

八七二(明

治

Ŧi.

年

に

学

制

が

頒

布

3

れ

水

映 雪 舎 窪 は 開 八七三 校 L た が、 明 治 七 六年に Ŧi. 明 治 富 沢 年 村 に な どと は 伊 協 $\overline{\nabla}$

> 潤し る。 身館と 翌 七 統 六 合 明 L 治 して温が 九)年には、 知 館 ٤ な 茶 る。 畑 . 麦塚 八 八 六(明 平 松 治十 新

田

0)

年 ことに 県 なり、 0 布達を受けて県内 貫信に 舎 岩 波 . の学区 深良 • 久根)、 から 大幅 15 甘が 統 静い 合さ 舎は (公文 野の れ る

小学校とな

名、

温

知

館

誠な

求き

舎し

宕

脇

•

佐

野

が

統

合

L

T

佐さ

原は

そ 0 後 1 < 度 カン 0 制 度変 更 名称変更

第 社会と生活

節 地 域

戦

後

0

水

窪

0

農業

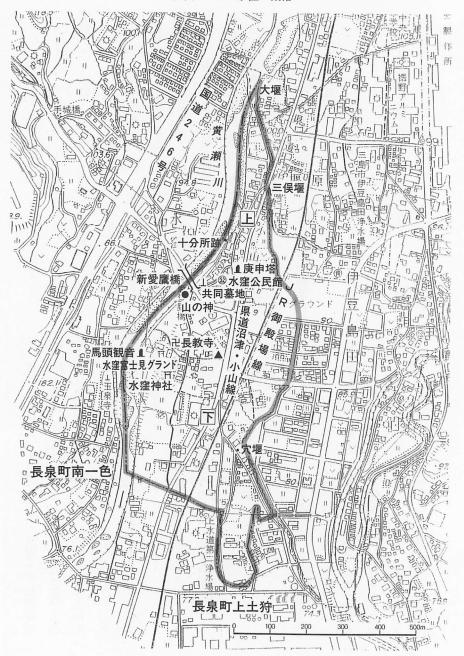
は

セ

ン

サ

ず、 2 は 六〇年と三〇年: 農業 n Ŧi. は 総 の変化 農 カコ 都 家 らニニーと 数 市 計 は 後 画 几 K 0 よると次 15 Ŧī. 四 よ カン 九 倍 0 3 九〇 T \$ 一七と半 住 激 0 年 ように 宅 增 を比 が L 増え、 数 T なってい 近 較 1 する る 農家 减 に 少 \$ る。 が Ĺ か 减 総 カン わ 戸 つ た 九 数 3



班

カン

T

寄

あ

1=

几

•

Ŧi.

班

は

下

3 寄

n

7 あ

る る は

に

1=

六 0

七 0

班 上

は 最

新 K

たに

転 り

入

ĺ

た家々で

構

成 最

六。六 K n が 三 増 四・七分にとあまり変わらない。 る。 之 か カン ら四四・七かった、 3 施 か 几 設園 ら一・六ハハクタ は 逆 芸 Ŧī. に、 から **ー**ヘクタ 盛 É 牛 h É 増 15 . 減 花き え 豚 な り 1= 0 • 類 0 T に い が に 5 わ \$ 0 また、 比 ٤ る 類 様 カン ~ 0 が 3 子 を 野 麦 が 餇 五二 菜類 七五五 うか 類 育 す 雜 る が から カコ ーヘクタ 農 穀 3 わ

いめと

思

わ

れ

る。

ま

た

作

物

類

别

収

穫

面

積

は

稲

が

内部区 F 区 0 最 没職 寄)とシ 分と タ 近 0 モ 世 た 水 末 \exists 窪 期 IJ 〒 村 に三〇 だが、 -最寄) 戸 E ほ そ に どの 0 分 内 部 カン 戸 れ 数 は T ウ L カン 15 ワ た。 七 な カン \exists

家

は

ま

0

たくなくなっ

T

る。

別 に、 や葬 れ を 現 式 在 組 F.3 村的 0 0 単 ・下村 水 窪 位 とも 区 に と呼 なる区 は 七 び分けることも 0 分であ 0 班 が る。 あ る。 あ 現 り 0 最寄 在 0) とは 0 神

> 長 で計七名ずつ、 名 X 防 . 0 災 副 役 : 土 X 員 末 長二名 は 不衛生 次の 部農会は を 兼 会計 ような 任 . 7 \$ 名 体 が 0 五班まで各 育 あ が 委員は たる。 ある。 各 協 名の 班 一役 議 委員 は、 名 計 区 Ŧī. 名 0 班 長

神社 年増 た T . 会計 5 えてきた 委員二名、 る。 一役と協議 各 各種 名で計 7 寸 ン 委員で各 水窪神社 体 シ に 3 名 は ン 種 袮 • 体 |委員 水配 T 宜 大会。 パ 三名 1 長を分掌し 人 1 老人会 一名などが 財 0 連 産 絡 X てい X. 員 子 長 \$ あ 供 区 る。 . 副 会 0 決 近 ま X

長

消 防 寸 など から あ る。

8

苫 その に れ 0 1 は T 組 水 湖 X ため、 窪 織 水 カン は る。 0 利 3 \$ 理 深 下 لح 組 合 良 郷 15 事 用 先 K 0) 名 水 0 \$ 水 水 0 元 代 水 総代三名を選出 配 で 利 あ 表者 人が 組 る大堰を有する区 お が 織 の 一 り 名 出 つ、 用 水 L T てい 大堰 1 0 管 る。 る。 理 水 で を 利 任 ま 組 れ 3 た 合

0 行 事に は 春 夏の河 Щ 清 掃、 グランド - 整備 0

X

日

12

わ

れ

事業報告。

決算報告

.

子

算

案

事

業計

画 曜

案

新役員挨拶などが

あ

る。

水 式 ほ か、 集 天王さんと納 会などが あ る。 凉 祭 総集会(総会)は、 X 民体育祭と 風 \equiv 納 月 め 最 年 終

七四四 五(延享二) 年 0 「水窪」 村 書上 銘 細

れ 会をして馬草 てい 色 村(長泉町)。 また、 ・刈敷・茅・薪などを取 大岩の野 富沢 に よると、 原時 村 12 (裾野 も同様 村内に 市 0 の入会 西 は Ш ってい Щ 愛 地が 内 鷹 林 あっ ると記さ Ш が 筋 な た。 < に 入

のような入会の

0

\$

き、

ため、 15 入 L 3 八八九(明治二十二)年には愛鷹 た際にも、 八七五 れ 原時 一(明治 町ま 払下げを目的 Ŧi. 沼 水窪村も名を連ねることになる。 津 八)年に か村 市 関 ほ 係は 0 愛鷹 カュ 村 に 愛鷹牧 々 明 0 が 治 Ш カン が 期 民有引き戻し 町 だに入 畜会社 等官 Ш 村 組 官林 合 林 て から 15 設 が ic から 富沢 御 立 運 編 料 され 動を 入さ とと さらに、 地 続 起こ た際 に れ 編 \$ た

> よそ三〇〇 町 歩に つい ては、 八九 九(明 治

始 日

お

年に払下げ 3 n

に奔走したという。 組 合会議員の渡辺 2 のとき水窪では、 (まごさぶ のほ 愛鷹. 郎き が 肥 Щ か、 沃 組 富沢: な土 合開 地籍 墾地 地 を獲得すること 何の字内野・ 貸与に

あたり、

林三十 れ らの 区有林 余 町歩 は の美林 水窪 0 :を所有することとなる。 財産区 で管理し T る。 現 在

\$

九七

町

歩の

入会権を

獲得

L

植

林

事業を行

X

有 に

山首

ح

現在 であ ま 三日 が (長泉町)。 長泉 0 まつられ は、 る た 0 祭日 が、 \$ 町八分平には、 富沢が 0 上土 てい 馬 に で ある。 は 頭 狩 抜けて る。 観音 近 (同)の 隣 ح から カュ は富 手城の 四区の輪 0 つてそこに Ŧi. 場所 草競馬 区が 沢 は、 観音と呼ばれ 水 共 番 に 同 窪 制 は 長泉 参 でま . でまつっ 加 馬 南 場が 町 す 0 南 る 0 色 る馬 馬 あ てい 7 色 り が 納 多 0 頭 米 地 数 四 観 月 集

に

参加

L

てい

る。

この愛鷹牧畜会社に貸与され

てい

た

現

在

\$

几

X

0

共

有

地

0

あ



写真 3-57 水窪神社の祭り (谷井洋行氏所蔵)

七

明

治

+

年

以

降

0

で(「蔵王社

宅

寄付

取

勘定簿

は

八 な

七

おそらく神仏分離令に

権

現名か

ら神

名とな

0

であろう。

祭日

+

月十 より

九日

で

2

0

前 社

は

祭 た

などに 造られたものである(『水窪 寄 5 付 3 \$ n 募 た区 利 た 0 用 \$ て資金を捻出 3 有 を移 地 れ を T 転 利 15 して 用 る。 あ さら る 0 n 1 あゆ 12 X は 3 民 広く 売 0) ,みし, 施設 0 却 共 L 同 は 作業 区 3 宮み に に 田だ 0 よ 体 個 P 下も 育 窪は T 0

1: X

が

あ

る。

公民 原

身

共 同 0 青年

作業所

伊 館

豆 0

島田 前

· 二 ツ は 水窪

屋

0 グ ラ 俱 楽 1

黄 瀬

JII \$

0 河 用 堰

III

敷 れ

12 T

あ

る た

が、

もとは児童遊園

地とし

て設 1: 部 南

水窪

富

1 見

は ٤ 地

T 水

利

禄 は 儿 祭神 あ 年に る。 字 が 再 蔵王 宮 建され、 保 食 田 現在、 権 教寺 命 K 現 ま から が 創 0 水 水窪に あ 3 立 窪神 七 年 れ Ŧi. 月 T は 社 水 (明治 は 水窪神 と改 窪神 不 る。 詳 八年 称 社 だ 神 は 社 が 一に村社 社 た 明 0 Ш

六九一 細 蔵

完

帳 \pm

権

現

0

神

長

神 \$ 社 神 輿 天王社 から 出 る。 などが な お ま 境 0 内 3 15 れ た は 箱 而 から 根 あ 芦 る 湖 神 社 稲 0

から

あ

る。

現

在

は

2 は

0

日

K

近

1

H

曜

日

15

行

わ 日

れ 12

子 宵

تغ

荷

新

愛鷹

橋際にまつられている。

祭りは

月十

七

日 沿 窪

社 山 0 神 祀 は 0 許 前 書に 可 が 下りたとされるが、 よ n ば 一九一六(大正五)年、 現在黄河 瀬 水 Ш

だ T れ Ш が、 0 0 な 講 神 を 講と 現 在 行 は 15 0 その近くの日 た 0 が て 前 夜 九七 の十 曜日 八 -六日に 昭 に行わ 和 五十三 上 村 n 下 る。 年 以 村そ カュ 降 0 T や れ は ぞ つ

踊

り

などが

ある。

P 富 わ

盆

士 せ

帳 家 ま L あ た平 て僧となり、 0 る。 長 家臣 公教寺 に 松の字供養塚に よ 水 窪 は 渡辺蔵人佐が、 n 神 ば 浄土真宗大谷派で、 社 2 常念と号してこの寺を建立したとある。 0 と同じく字宮田 由 緒 は は 本 境外所有 願寺第十二 六一〇 に 本尊は阿弥陀如 あ 地二反余を持 る (慶長 世 が、「寺 僧 + 教如 五年 院 に 帰 来 つ。 武 明 で 依 \mathbf{H} 細

申 は 塔近くの田 H 4) お と行事 最寄と下最寄とで別 to に 道 3 祖 下最寄は道祖神近くの田にオンベ れ 神 T は 2 県 道沼 々に行 る が、 津 0 1 • てい Ě 小 月 Ш た。 線沿 0 F. 上 い 一最寄 1: に 基 は t を 庚 ま 丰

> り、 富士見グランド 子ども達 は 互 い にオ カン 所で行 ンベ 竹 0 で盗 T み合 る。 た。 現 在

作

だが、 見グランド は てまつる。 水窪神社にまつられる天王社 現在は七月に で納涼 日 中 祭となる。 祠 0 行われる区主催 前 で念仏 納 をあ 涼 は、 祭に 七 げ 0 月十五 は 納涼祭に 夜 模 は 擬 水 日 合 店 窪 が

在 共同作業で補修し、 た。 和 昭 五十 は、 X 和 翌年、 民 四十六)年に 区民体育祭の 一)年十月十 体育祭は、 水害でグランドが 水窪グランド 九月第二日曜日に行う。 H あと 以後体育祭を毎年行 に 第 風納めを行うようにしてい П 冠 が X 水したも 完成 民 体育祭が ってい 0 の 一九七 九 開 七六 X 催 民 3 昭 る。 現 れ 0

水 角が 窪 馬 馬継ぎ場 富 ある。 士見 観音 グ Ő ここは、 ランド 水窪 馬 頭 0 観 は 黄瀬川沿 音 北 側 水 が に ま 田 らつら 地 帯で い 馬 0 頭 れ 旧道 観 T あ 5 音 い ながら多くの から る 基 あ 地 0 を X 集 たとこ で あ 8 た る。

祭日

0



写真 3-58 手城の観音

手 ま 0 カン 古 城 0 ほ 0 1 る 0 カン T 観 馬 長 七 0 音 頭 泉 入 Ŧ. と呼 観 会 町 音 地 覚 ば が 色 0 延 あ れ あ 四四 る。 る T 年 納 長 1 草 0 泉町 る。 米 記 競 里 銘 馬 . を 同 色 0 催 上 \$ 0 0 分平 t= 狩 が 馬 0 あ 場 几 に 15 X は あ 共 た 同 水 で 窪

0 に

中 る が 15

> は 0

礼 申

養塔 が

P ま

音 3 た。

石 造 あ

物

ま

n

頭 ス

音

が

る り

0

公民

館 8

庚 順 馬 7

塔 供 観 テ バ

建

0 T 観 0

る な れ

付 E T 0 ま

近 0 1

に

0 た が あ 0

\$ 0 0

を 3

移

転

ろで、

ウ

で

あっ

馬 で

供

養

0

た

L

た

٤

15

う。

0

中

に

馬

頭

観

T

は

水

最

生業に 田た 窪 n 行 氏 T あ から つも た 0 街 れ 近 た金沢 道 る。 ほ 0 富沢 が 0 + T 世 0 多く 人達 分所 中 江 相 0 戸 に 0 当 た家 馬 継 女 時 П 多 継 0 が 地 0 性 9 木 ぎ 馬 代 カン 記 々 で 場 道 炭 が が 0 あ 頭 通 を を に あ で 観 0 馬 あ 行税 して 水窪 音 よ ٤ に たと 9 から n 行っ を徴収 積 を通ると銭をとら あ ま ば 近 る。 いり h 0 代以 たとい 「富 無関 で沼 3 わ す 口 n れ 降 る役 尚 係 津 書 T T う話も 方 村 5 15 \$ で 金が 所 は る。 駄 は る 面 沢さ 賃 0 な 0 売 名 載 れ 炭 は る 売 け 残 せ り C ケザ 3 た 15 慎な あ 水

T

屋敷

跡

0

様

子

が

記

3

れ

現

在

\$

そ

0

礎

石

が

あ

る

土地

改良区によって、

前者は一九八四

昭

和五十九)年

いう伝承が残る。

もう一つは穴堰隧道改修記念碑である。どちらも大堰用水関係の記念碑がある。一つは大堰樋門竣功記念碑、水窪という土地柄をよく表している石造物に、深良

に、後者は一九九三年に建てられた。

橋であったが、水害のたびに流出するので、一九〇九碑文によれば、もとは水窪橋と称した岩盤に渡した板るが、そのかたわらに愛鷹橋復興記念碑が建っている。新愛鷹橋は一九八〇(昭和五十五)年に架けられてい

ったからである。

り、

参考文献

『水窪のあゆみ』 水窪区 一九八七年

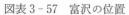
れだけ熱意を持って橋を架けてきたのは、黄瀬川を渡年コンクリート製の永久橋を架け復興したという。こついに通行不能となったため、一九五九(昭和三十四)し改修を重ねたが、一九五六(昭和三十一)年の洪水で十三)年、一九四一(昭和十六)年の洪水でたびたび流出

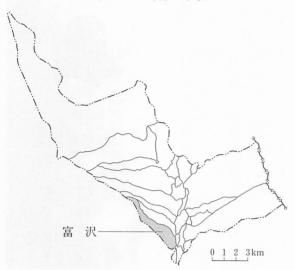
いて木橋を渡し、愛鷹橋と改称した。一九二四(大正

(明治四十二)年に高さ一二尺(約三•六㍍)のピーヤを築

って左岸の富沢や長泉町南一色と行き来するためであ

水窪の入会地である愛鷹山へ向かう重要な橋であ





第 節 地 理的概要

第

四章

富

沢

田 集 落 水 富沢という地名は、 村内にとびとびにあったので、 愛鷹山の沢(谷間)が 最初 飛

沢」(とぶさわ・とびさわ)といわれた。それが、

村が

豊

田

号が る。 灰 宅が建ち並び、 たびに村中総出 ともなってい り添うように連なっていた集落にも運ばれ、 も畑も格段に増えていった。 かになるようにと「富沢」に変えられたという。 が堰に詰まって用 富沢は、 通ったことによって姿を消し、 こうして支えられてきた田畑は、 穴はませぎ た。 富沢はその農村景観を急速に変えて で土砂を取り除 から深良用水を引くことによって、 L 水 か Ļ 0 水が使えなくなるため、 大雨が降ると富士山 この水は、 かなけ 集落に 近年国道二 ればならなか 愛鷹山麓に寄 \$ 新 生活用水 0 L その 火山 兀 5

住 六



写真 3 - 59 穴堰の清掃

瀬 は 黄 位 Ш 川の支流梅 瀬 Ш 置 を隔 富 西 てて二ツ屋、 沢 側 木沢川を境として、 は 地 区 裾野 0 南端 市 南 に 0 位 ほ は 置 ぼ 愛鷹山 する。 中 一央を流 長なが から流れ出る黄 泉がずる 北 町南一色と は れ る黄瀬 桃 園での 東 Ш

地点を基にして、 地利用と土 富 南 東に 沢 それより南東に向 0 延 X 域 びる尾根上 は 愛 鷹 0 Ш カン 0 主 って約五・八キロメ 海 峰位 抜 Ŧi. 牌岳 五. トメ カン 0 3

T

る。

黄瀬 川となっ T る。

最

大幅

約

トトルメの

狭長

な三

角

形

をな

す。

そ

0

南

東

端

微高地 水路に は 形 が 中 斜 1 0 た氾 をな 水 併 央を 河岸 成された、 富沢 る河岸段丘 田 列してい 濫原 段丘 7 南 す。 の多くは 合流し の集落は、 畑 北 地に利用されて、 生活 に てい 勢い る。 長さ約一・三キロメ、 面 に 大小 より、 南 用 あ る。 北 よく この愛鷹山 Ш 水 り の河原石 地 は 15 集落 は穴 約五~ 貫流して、 北 旧 富沢穴堰より 河道 から 堰 の東側 より その で 七以 南に が集積 尾根端の舌状丘陵裾部 幅 あ 南端 他 引 低 は 向 約 2 して 水し S 引 0 た か 部 集落 一〇〇ぱの黄 ПП 0 水 0 分は おり、 黄瀬 て緩や た水田となり、 地 水 0 田 れ 草 川 立 0 灌 地 微 0 地 集 カン 部 瀬 高 形 落 L 漑 な 分 地 成 7 用 傾 JII に

両

木

林

墓地などとなっ

T

1

た。

ح

0

中

央部

九

八

坦

部

を

X

切

る

尾

根

は

ス

Ł

丰

7

る。など

植

林

地

薪

炭

材

に斜

利面

用

す

る

雑ギ

木林

とな

0

T

いッツ

を消

旧

集落

内に

\$

新

L

1

住

宅

P

T

パ

1

1

が

で

き

頭 開 トメー 12 け 近 5 沢 奥 水 行 水 田 を 灌 は 深か 漑 田だ 用 ーキロルメ ٤ 水と 5 0 う L 平. 棚 坦 た 田 水 で 状 田 不 から 整 0 湿 展 形 田 開 な 袋 で L あ 状 T り 0 る。 入谷 集 落 谷 が

集落

0

西

側

0

Ш

麓

カュ

3

南

側

15

カン

け

T

は

最

大幅

が 端 15 え T あ は 接 きた水 2 L た。 た て カン 水 0 田 2 南 T 田 で 天ん 0) は あ 入 色 神 谷 毛 ٤ Ш 遮 0 作 Ł 水 3 0 15 田 乾 れ う は 田 T 海 ٤ 1 抜 な 富 た 沢 が 2 0 T Ŧ. 土 人 る。 々 取 トメルト 0 9 入谷 生 0 0 活 た 独 を支 8 立 0 削 南 丘

亚. ま L カン カン た 3 n 3 坩 谷 T 地 2 南 面 とな 15 形 3 東 0 に る。 で れ 水 あ る 放 つ 田 亚 り 射 T を 状 坦 カン 1 囲 部 尾 0 15 る。 む 愛 は 根 T 派 は 0 出 鷹 更に 円 墾 L 0 Ш 平. 3 錐 た 尾 多く 尾 れ 形 坦 根 火 根 部 T 末 端 畑 0 Ш 0 は 浸 地 体 海 0 食谷 ٤ 抜 愛 丘 0 な 旧 鷹 陵 Ŧi. つ 15 斜 0 山 は ょ T 0 0 が付け お 0 位 台 0 り T 残 牌 状 刻 存 近 岳 0

な 近 0 年、 1= 平 坦 部 を 利 用 L T ゴ ル フ 場 が 造 成 3 れ るように

御ご 集落 は 添 と景 用 15 殿場 水 水 は い に 田 屋 観 0 0 存 線 敷 細 形 裾 沿 Щ 在 長 く連 野 を が た 富 よく を深ら 駅 登 85 沢 IC なる集 平 る は 近 に わ 地 用 愛 1 0 か が 位 少 鷹 れ る。 水 村 置 な T が 的 Ш 愛鷹 < 15 畑 形 لح لح 態をな あ が お 黄 古く 0 0 Ш り 瀬 くら な 15 Ш 入 生 L が カン 15 り込 活 T 挟 5 れ 3 用 1 T 0 ま 水と 比 る。 h 集 れ だ浸 較 落 T 的 旧 は い J 食 長 集 る T

落

麓

0

R 谷

15

間

農村

0

景

観

を

留

め

T

た。

T 通 n ろを企 7 た。 富 1 2 L る。 T 沢 ッ 業に 1 お 15 3 て 2 お 0 2 売 < 0 よ タ そ黄 3 却 後 南 ウ L 市 町 n ン 瀬 富 街 は た そ 初 ح 化 Ш 沢 が 0 0 0 8 は 企 7 進 西 玉 \$ 道 業 み 側 0 ٤ 15 から 新 を \$ 近 は 沿 撤 興 Ł 退 年 3 住 田 T は h L 字 畑 多 た で 玉 地 道 で < 南 跡 で あ 0 地 あ 水 色 几 15 る لح 田 六 0 た 南なる 号 < 接 が 町も 姿 が 3 L

急 速 に農村の景観をか えつつ ある。

開

墾

3

れ

て畑

となり、

生

産

力を高

めるた

8

7

サ

抜

歴史概要

1 中 世 以前

の愛 I遺跡をはじめとし、 坦地福 刺突具である尖頭器二点が発見された平 富沢には、 旧石器時 縄文時代の遺跡が一三か 代の 黒曜 石製の小形 所

カン 所ずつ 鎌 倉 時 代 0 銅 鏡 面 が出 土 L た場 所 が、 それ ぞ れ 弥生時

代終

わり頃

の遺

跡

が

か所、

古墳

時

代の

須恵器

鷹 Ш そのうち、 I 尾根· 末端 弥生時 の平 坦 部 代の富沢原遺 に あ る。 富沢 跡以外は、 0 人 々 0 生活 すべて愛 は

数 よ 万年前 カン n らの遺跡のある平坦部はもとは山林であったが、 愛鷹山 尾 根 末端 0 平 ·坦部 カン 3 始 ま 2 たとして

師

須恵器片、

中世の陶磁器片、

中国産青白磁片など

Ш |灰層を除去することで、それによってこの を サ抜きとは、 表土下 15 堆 積 して 下 部 5 る 0 層 火

跡 で あることがわかるようになっ たの で

に含ま

れ

T

5

た旧

石器、

縄文土器や石器が出土

遺

内

野

Ш

I

遺

跡で

は

方形竪穴住居址

など二つ

0

住

居

器は 頃と中 刃器 片 址 石皿、 品などが 市 + 坑 頃 内でも出土した遺 磨石、 焼土址 出土した。 及び後期の 石鏃、 などが検出 土 出土の土器は、 それ 一器片で 跡が少なく、 3 以外のところから石斧、 あ れ っ た。 て 縄 注 住 特に 文時 居 址 後 代 れ カコ 期 0 3 初 1 0 る 土 8

発掘後、 土取 工事 で遺跡は消滅した。

目

3

T

濫原 集石址、 完形土 富沢原遺跡は、 0 器が 微 柱穴、 高 出 地 + i 字原的 焼 土 集落の東約二〇〇以 竪穴住 が に 検 あ 出され る弥生時代終 居址、 た。 積 そ 0 わ 0) 土 坑 ほ 0 黄瀬 頃 カン 古 円 0 形 壺 JII 溝状 の氾 0) 形 土 0

n

T

5

る。

人 が 出 々 0 ± 断 L 片 T 的 お な り 生 活 弥 0 生 痕 時 跡 代終 から 認 わ 8 0 5 頃 カン 3 中 世 ま

大岡 古代 中 世 に 0 い T は でない。 ほ とんど文献 や古

文書

が

な

1

0

で

明

カン

ただ、

黄

瀬

III

富沢

西 岸 0 大畑なおおはた から 南 0 地 域 は 平安時代 代 カン ら大岡 荘 に 属

L

7

7

る。

帯 愛鷹 から 奈良 Ш 南 たとさ 時 麓 代に 0 沼ま れ 設置さ 津 5 市 根和 れ 方常 大岡 た官牧 カン 3 荘 東 であ 麓 は 初 0) 大畑ま 0 8 大岡 で 牧 Ш 15 麓 1

れ 牧橋尾という畑から一 径 九・ニュンチメの円 その 九一 下 に 明 波文を 治 四 鏡 十三) で 鋳 出 面 鏡背に二 年ころ、 L 0 た 銅 菊 鏡 花双 が発見され 愛鷹 羽 0 雀 雀 Ш 文鏡 尾 から 根 菊 た。 で 末 0 花 鏡 端 縁 帯 は لح 0) 字 から 戯 直

丘

陵平

坦

一部を手代とい

う。

で 直 ٤ 中 あ 角 ること に カン 15 立 5 埋 E 納 が 出 から L 判 た る 土 L 経 明 形 た 塚 L 態と文様 場 T かる 所 3 V る。 は 出 経 土 カン この 塚 す 5 0 ることが = あ 鏡 は 0 1: 多い \$ 仏 ĮП 教 世 のと考えら とさ 0 紀 経 0 文を れ 銅 る 鏡

> 0 15

徳

Ш

家

0

軍

事

行

動

を

記

録

L

た

武

徳

編

年

集

成

0

大岡 世: 時 代に 牧 紀 は 後 半 は 官牧 に 執 権 な 北 か る 条時 3 ٤ 平 葛ず 政 頼 から 盛 山紫 ح 0 氏 0 領 0 荘 有 南 0 す 進 地じ る に 大岡 頭き ٤ 職 \$ を 荘 とな な 持 つ た T

鎌

倉

Ŧi.

もその 天神 領 域となっ は 海 たと考えられ 抜 五・三次に T

る。

長さ約

八

架けら る。 天神 T 5 た れ 頂 Ш 1: 部 天神 橋 は トメー を手 人為的 Ш 幅約 城 0) 橋と 尾 K 削 根 末端を 苹 5 され、 V 橋 切 0 数 斜 カン 断 段 3 す 面 Ш る 0 0 急な 地 梅 亚 15 場 木 カン から 独 沢 構 立 か 0 JII 成 丘 た に 0

れ あ

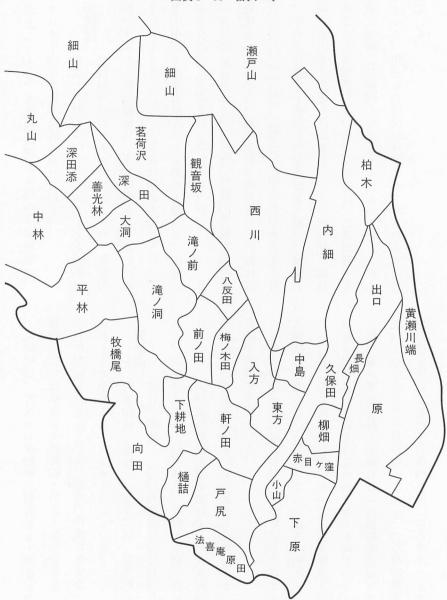
久保 あ Ŧi. る出 城 0 天神 トメー カン 城 3 ま 北 0 Ш たは 等距 と手 ^ Ŧi. 代(手 岩 離 0 トメリ 7 0 は 位 城 置 な 0 は 5 12 ところ カン あ 長 と考えられ 0 て、 に 泉 あ 町 下。 長 る 長なが 久保 T 色 窪は 城と関 5 城 に る。 あ る 長が 更 連

八二(天正 塁 を築い + て稲 年 垣 六 JZ. 月 右 0 項 衛門長茂に守らせ に よ ると、 足 たし 高 Ш لح 麓 天神 あ

Ш Ŧi.

旧

図表 3-58 富沢の字



図表 3-59 富沢の字一覧

赤目ケ窪(アカメガクボ) 入方(イリカタ) 内野山(ウチノサン) 内畑(ウチバタ) 梅ノ木田(ウメノキダ) 大洞(オオボラ) 柏木(カシワギ) 観音坂(カンノンザカ) 黄瀬川端(キセガワバタ) 久保田(クボタ) 小山(コヤマ) 坂ノ下(サカノシタ) 下耕地(シモゴウチ) 下原(シモハラ) 瀬戸山(セトヤマ) 善光林(ゼンコウバヤシ) 滝ノ洞(タキノホラ) 滝ノ前(タキノマエ) 出口(デグチ) 樋狩(トイガリ) 桶詰(トイヅメ) 藤内林(トウナイバヤシ)

戸尻(トジリ) 中島(ナカジマ) 長畑(ナガバタ) 中林(ナカバヤシ) 西川(ニシカワ) 軒ノ田(ノキノダ) 八反田(ハッタンダ) 原(ハラ) 東方(ヒガシカタ) 平林(ヒラバヤシ) 深田(フカダ) 深田添(フカダゾエ) 法喜庵原田(ホウキアンハラダ) 細山(ホソヤマ) 前ノ田(マエノタ) 牧橋尾(マキバシオ) 丸山(マルヤマ) 茗荷沢(ミョウガザワ) 向田(ムカイダ) 柳畑(ヤナギハタ) 山畑(ヤマバタ)

神

Ш

0

ことで

は

な

カン

かっ

天

2 0 沂 世:

富沢

は

六

0

慶

長

九

年

の支配とな 0 て近 世 を迎え

Ш 天正

JΪ

武

田

とめ 0

まぐるしく変

わ

り 葛

士

年

に

武

 \mathbb{H}

氏

から

滅亡

した後

は

臣 Ŧī. 北

徳

六世

紀

後半、

富沢 ろう

の支配

は

Щ

こと 稲 長 斌 垣 久保 田 が 長 軍 茂 を追 あ 城を占領 0 る 項)、 0 0 7 で 天神 駿 改 河 撰 jіі に 諸 0) 進 旧 家譜 塁と 稻% 攻 垣長茂い してき あ る 寛政 に守 1= 0 徳 は 重 備 JII 修家 ح 家 3 康 せ 0

12

は

津 富 支配 沢 藩 0 T 村 から お 0 支配 変遷 り 六

沼

藩

領 3

> た 沼

لح 0

> る。 帳

実

施 村

3 で 1

れ

t=

津

藩 四

検

地 カン

が

図 津

表

60 あ

0 2

لح

お

で が 0

あ b

る。

沼

田 713

徳と

川がわ

頼り

宣ぶ

忠長

の支配を受け

たり、

稲葉家

小

=は

慶

長十

八)年

15

廃

3

れ

T

以

降

は

	第 14 章 富 派
そ 家後 六原 れ 村 沼 、九藩	図表 3-60 富沢村の支配の変遷
原藩領であった、九八(元禄十六九八(元禄十六九八(元禄十の次)) 村高と村の次	天正11年(1583)
が一六七二(寛文十二)年の検地では一七二石三九 に満年が成立するとその領地となって幕末にいたる 慶長九年検地によると、富沢村の村 慶長九年検地によると、富沢村の村 のであったりするがいずれも一○年は続かず、一	天正 18年 (1590) 松 平 周 防 守(康親·康重)
秋山家 立 次山家 立 次山家	中 村 一 氏
(第十一)年までおいていまするとその成立するとその成立するとその 成立するとその の姿	慶長6年(1601) 大久保治右衛門忠佐
見されるとなってある。	慶長14年 (1609) (沼 津 藩 領)
大十二 長 と そ り まで る が	元和5年 (1619) 徳 川 頼 宣
三三八年前の領がいず	寛永元年 (1624) 天 領
年の始後地地ですれ	徳 川 忠 長
検地による一となるとなる。	寛永 10 年(1633)
地よるなって領して、	
では 九升五 ると、 カイ では 一 こって幕 ると、 カー こって幕	天額
一五、幕がした。続	
七二石 合であず	延宝8年 (1680)
石三九	天和 3 年 (1683) 稲 葉 正 則(小田原藩領)
九。村る野の一	天
THE STATE OF THE S	元禄 11 年(1698)
降し十ち年(寛永一	
一富年村一个合	The desired of the true
合となって合となって 合となって 村高一三八 常 村高一三八 常	秋山重右衛門
七十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	(旗 本 領)
一 八石 一 六四 一 六	
一六七三(延宝元)年は一. 合となっている。一六二 信敦十一)年の一六七一(寛文十一)年の一六七一(寛文十一)年の一六七一(寛文十一)年の間で村高が急に増える。一六一	安永 7 年 (1778)
一十二) 二(寛 一 十二)	
一六二一(元 (寛永十九)年、 一九升五合とあ 心に増えている が引かれたた	
六二一(元和七)年、 六二一(元和七)年、 十五合とある。寛古 増えているのは、 増えているのは、 りかれたためである。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。	水野出羽守
一 (元和 一 (元和 一 (元和 一 (元和 一 (元和 一 (元和 一 (元和	(沼 津 藩 領)
石三九和七	VIII II III III III III III III III III
九升一である。寛立である。	
	明治元年 (1868)
合をこれでは一一六	明治 4 年 (1871) 徳川家達(駿府藩→静岡藩領)
- 六三三 (明暦元) (明暦元) - 一年と - 二年と これ以	静 岡 県
持以成とと元三	

第2節 歴史概要

図表3-61 駿河国駿東郡富沢村の戸数と人口

年 代	西暦	戸数	堂	非人	人数	男	女	非人	馬	牛
慶長 8年	1603	10 軒								
寛文12	1672	21								
元禄13	1700	23								
安永 5	76	28			145 人	73 人	72人		6疋	
6	77	28	2 軒		139	70	69		10	0 疋
天明 3	83	36			176	84	92		8	
享和 2	1802	35	2		137	76	61			
文政 7	24	38	2		153	76	77		7	
8	25	38	2		157	81	76		7	
9	26	38	2 2		159	77	82		7	
11	28				159	76	83		7	
12	29	38	2	1軒	156	75	81		7	
天保元	30	39	2	1	161	75	86		7	
2	31	39	2	1	162	78	84		7	
3	32	39	2	1	162	77	85		7	
4	33	39	2	1	163	78	85	7人	7	
弘化 2	45				176	86	90			
3	46	37	2	1	169	81	88	5	8	
嘉永 2	49	37	2		166	77	89		7	
3	50	37	2	1	167	81	86	6	8	
4	51	36	2	1	173	83	90	6	8	
5	52	36	2	1	168	82	86	6	8	
6	53	36	2	1	164	80	84	6	8	
安政元	54	37	2	1	172	81	91	6	8	
2	55	35	2	1	176	86	90	6	8	
3	56	35			176	87	89		8	
4	57	36	2 2	1	172	85	87	7	8	
5	58	35	2	1	178	89	89	7	8	
6	59	35	2	1	176	86	90	6	8	1
万延元	60	35	2	1	166	84	82	6	8	
文久元	61	36	2	1	169	85	84	6	8	
2	62	35	2	1	169	83	86	5	8	1
3	63	35		1	163	79	84	6	8	
元治元	64	35	2	1	167	81	86	5	8	
慶応元	65	35			175	90	85		8]
2	66	36	2	1	188	94	94	5	8]
3	67	36	2	1	194	94	100	6	8]
明治元	68	37	2		192	94	98	1	10	0
2	69	37	2	1	195	95	100	6		1
3	70	37	1		228	114	114	1		1

※慶長8年・寛文12年は検地帳の屋敷数,元禄13年は名寄帳の戸数,安永5年・慶応4年 は村明細帳,それ以外は各年の宗門人別帳より作成

る。

加していく。屋敷数も一六七二年には二一軒に増えて

一六八〇(延宝八)年には一八〇石八斗三一升と増

その後は一八七〇(明治三)年まで三九軒 くが、一八○二(享和二)年にいったん三五軒まで減り、 と人口 (天明三)年に三六軒になるまでわずかずつ増加してい 図表3 の推移をまとめたものである。 61 は慶長検地 から明治 にい 戸 たるまでの から三五 数は一七八三 一軒と、 戸数

ことが目に付く。も大きく減少して、特に女の人口が三一人減っているも大きく減少して、特に女の人口が三一人減っているぼ同じような経過をたどっている。一八〇二年に人口ぼ同じような経過をたどっている。一八〇二年に人口

堂 神 人は名主一名、 は 軒のうち一六軒は小百姓、 愛鷹 軒と村支配の浄土宗地蔵堂一 七七七(安永六)年の「村明細 明 神で、 組頭二名、 寺はない が、 百姓代一名である。戸 一二軒は水吞である。 定輪寺末庵の禅宗庚申 帳」 軒がある。 に よると、 医者、 数二 村役 大 氏

一〇疋ほど飼われていたが、牛を持った記録はない。俗」付録一)。馬は近世を通して富沢全体で六疋から工、木挽、桶屋などはおらず、酒屋もない(「富沢の民工、木挽、桶屋などはおらず、酒屋もない(「富沢の民工

水路の一つは、富沢村の渡辺家(現渡辺武彦家)の 輪寺村を貫くトンネルを抜けて地上 二(寛文十二)年に完成した。 輪寺村、 量に乏しかった。そのため、 六七一(寛文十一)年穴堰の工事に着工し、翌一六七 穴 堰 一色村の三か村に深良用水を引くことになり、 ず、 富沢村は、 愛鷹山 黄瀬川の から流れ 穴堰か 同様 流 る沢水だけ れが 0 ら取水した水は に 事 出 情 低くて利 る。 を では か そこ カン 灌 える定 用でき 屋 カコ 漑 敷 3 定 水

シミ)であった。 ルの長さは二五○間(約四五○シミ)、高さ八尺(約二・四内を通り村内に用水として導かれていく。このトンネ

され、田畑の収穫高が大きく増えた。図表3‐62は富ほとんど利用できなかった下田や下畑、下々畑が開発富沢村に深良用水が引かれたことにより、それまで

図表3-62 富沢村高の変化

		1633 (寛永 10)			1655 (明暦元)			1671 (寛文 11)				1672 (寛文 12)				1673 (延宝元)					
総	高	138.	5.	9.	5	138.	5.	9.	5	138.	5.	9.	5	172.	0.	9.	1	172.	0.	9.	1
田	方	104.	2.	5.	1	104.	2.	5.	1	104.	2.	5.	1	116.	7.	1.	2	116.	7.	1.	2
畑	方	31.	2.	6.	8	34.	3.	4.	4	34.	3.	4.	4	55.	3.	7.	9	55.	3.	7.	9
屋	敷	3.	0.	7.	6																

単位:石. 斗. 升. 合/138. 5. 9. 5は138石5斗9升5合 渡辺家・富沢村年貢割付状より

戸

3 近 現 沢村

年

責

割

付

より

作

成

L

た

村

高

と田

畑

屋

敷反

別

0) 変

化

を示

したも

0 状

で

あ

の変遷 子政区分 富沢 (明治: は 三七)年 大区

小 静

区

制 見県第

K

ょ

0

て、

刀口

八七八(明治十二)年

郡

X 制

町

村 は

編

制

法

てで

郡

町

村

が

復活

各村に

戸長

が

置

カン

れ

る。

富沢は一

再

び戸長役場

を

年

12 15

戸 は た。

明治

期

前半

0

地

方

度

めまぐるしく変

わ X 八

る。 15 七

K

岡

大区三·

小

属

下も和か 長役場管 つ富沢村 長の公選を廃 . 千福さ 田だ 村 轄区 村 に . 今里で たなる。 大畑村 域 村 L 0 拡 さらに、 . 金沢かれざわ 官選戸 大 • 定輪寺 が 村 义 長に 3 葛山 村ととも れ 八八四(明治十 切り 1:0 村 富沢村 替わるととも • 上がケゲ 15 田t 御 は 七 須り 宿 村

カン 八 れ 八八(明治二十 た。 一)年 12 町 村

置

0

カュ

村

に

属することに

なり、

御

宿

村

15

戸

長役

場

から カン

村

13

•

御礼 村

宿り

村

制 が 公布 3 れ ると、

沢村 南端 結局、 9 佐野村の方がよい、 までを一つにした方がいいなどの案が出された。 の富沢は交通の便などから御宿村ほか一〇か村よ 富沢は佐野村を中心とした一二か村とともに翌 ある 1 は地 形的に金沢村から富

村 畑なけなけ として存続 などが 生業の違いなどから、一八九一(明治二十四)年 伊い 5日島田村 泉ず 村として分かれた。 ・水窪村・二ツ屋新田とともに小泉村 富沢 は 石脇村·佐野 -に 茶^ち

大字となった。しかし、小泉村内でも入会地の

九

(明治二十二)年小泉村となった。

富沢は

小

泉

相 村

違 0

して裾野町となり、 丽 その後、一九五二(昭和二十七)年に再び泉村と合併 和 四 -六)年 一に市 政をしき、 以後周辺の村を併せて一九七一 裾 野 市 とな 0 た。 現在、

八三人にとどまっている。

核家族化や独居世帯の増加

などにより人口

は

立 調 戸数と人口 査」では、家持三七戸、人口二二五人(男一一五 い。一八七五 富沢の戸数は近世から大きく変わらな (明治八)年の「小区表編

富沢は

裾

野

市の

西

地

区

一に属

i

してい

進み、 が、 の増加は著しく、 人口は一〇〇九人にまで増えている。 九七五(昭和五十)年の国勢調査では、 は四七戸で村の組織をつくっていた。 四 二〇人・女一一六人)である。また、一九二五 誌取調草案」では戸数三八戸、人口は二三六人(男 人・女一一〇人)であり、一八八六(明治 七九人) である。)年の国勢調査では、 アパート、 7 その後一九三二(昭和七)年ころま 九九 ン シ 人口三七五人(男一九六人•女 ョン 元年に なども建てら は三 Ŧi. 世帯数は一一六、 その後宅地 少し下って、 几 十九)年の 111 帯 ñ て世 に (大正 な 一帯数 0 化 1: 0 地

とで米麦をつくっていた。 味も穀物に適すと記されてい を一二 生 業 頭 餇 ってい には、 八八六(明治十九)年 る。 田 黄 六 瀬 町 步余、 Ш る。 に沿 の「地誌 こうした好立地のも 畑 0 て良 田 町 取 が多く、 歩 調 余で、 馬 地

分校

通

2

続

け

る

ことに

八 VI

八六

(明治十

九年

-に学区 なる。

が

大幅

15

統合され

るこ

取

合

学 校 11 八七二(明 学校 が 創 治 立 五 3 年学! れ るよう 制

から 頒 K 布 な 3 る。 れ 富 各 沢 村 地

上土狩り は当 初、 村 元長窪村、 政 X 外だが近 下長窪村、 世以 来結 南 W 0 色村と小学校 き 0) 深 い 水窪 村 を

設立しようとしてい

る。

一八七三(明治六)年に水窪

村

く行餘 \$ などと協力 15 行餘舎 などと洗旧 舎に んして 0 統 分校 合され、 映雪 を定輪 舎を開校したが、 富沢. 寺 村に設 村 は 定 置 輪 す 寺 る。 映雪舎は 村 大畑 水 窪 まも 村 村 は 5 伊 な

> 5 常

五.

\$ 築することに 連 御 合して、 宿 0 在は 園寺を仮校舎にしていた行餘 な 一八八二(明治十五)年 り 行餘舎 0 分校 K 通学 K 本校舎 舎の i 7 1 が 校舎を新 獄が た 富 南なん

沢

1

現

在

0

裾

野

市

立

西

小学校となった

第

○章佐

野参照)。

て

六年二

月

 $\overline{\Box}$

島

田

舎を創立

する。

学校と改名して落成する。 0 れ ず、 た。 その 新築された初等科教室を売却 ため、 富沢の子ども しか L たちは 新築費 して補うこととな 定 輪寺に 用 から 集め あ 0 た 3

> とに 0 子 な ども り 定 た 5 輪 は 寺 御 の分校 宿 0 嶽 は線 南 小 南 学 小学校 校に 通 に 統 うことに 合され、 な

富

た

沢

富沢は小泉村となり、 小学校 \$ 年に組合規定 八八九(明治二十二)年に施行され 通 2 の生徒に T 5 た。 を設け、 なる。 泉村と小 子どもたちは小 この学校には 小学校 泉 村 は は 組 八 た町村 合 泉村 泉村 九 立 二(明 佐 の佐さ 0 制 野 子 原 ども 12 治 野の より、 尋常 原は + 1:

設置して、 小学校となり、一 佐野原尋常高等小学校となる。 九〇三(明治三十六)年に は 高 等 科

を

その 後 5 < 度 \$ 0 制 度的 変更、 名称変更を経

小 小作争議 昭 和恐慌下の一九三一(昭和

り上 り上 静 出 県連 げ げ な撤回 に対 合会(全農県連)と労農党 L 富沢で小作争議が発生した。 され 小作人が たが、 反発し、 暴力行為が それ が あ 支援し を全国 0 地 たとされ 主 農民 0 土 士. 組 地 地

取

719

がほ

ぼ七割と高いことや、小泉村内で佐野駅

現

裾

野

とい

われる。

軒

駅

周

辺だけ

が急速に商工業が発達して地域秩序が流

直接の記録はないが、 二〇円とい 同年七月に小作人側の二名が懲役四か月、 う結末を迎えた。 その背景には、 この争議 富沢の小作 の原 因に 八名が罰金 ついい 地率 T

動化したことなどがあると思われる。

第三節 地域社会と生活

続 五十五)年に 村内区分 ているのは富沢区である。 らなっている。 富沢は現在富沢区と南町区 南 『町(フレッシュタウン富沢)が造成され そのうち、 南町区は一九八〇(昭 近世の村か の二つの 区 3 カン

な 和 0 T 村落になっている。 か 旧 に 村 しく行政区となり、 0 0 単 位 0 集落しかなく、 で見ると、 富沢の内部は一九三三(昭和七) 富沢は 独立区として自治組織を持つ。 そのひとつの 市 域では珍しく大字の 集落で一つ

> 年ころまでは七 は 不動尊をまつる家の数で、 組 四七 軒で組 織 共有財産を持 され てい た。 この ち 几 旧 七 戸

う一つの集落内の区分組織である。 産 別個にド 神 代で当番をつとめている。三つの最寄はそれぞれ になってカミ、下最寄はシモと二つに分かれ、 上最寄と中最寄が一 い も愛鷹神社や不動尊の祭礼には上最寄と中最寄 旧戸 一や共同施設を持つことはなく、 て、 やサイ 全体で民俗を伝承する組織となってい は、 ンド ノカミを持ち、 上最寄、 ヤキを行う。 0 中最寄、 で上最寄になっ 最寄単位で山 しかし、 下最寄の三つに分か あくまでも富沢とい 最寄ごとに共有 てい の神講を組 た る。 一年交 は 現 元は れて Щ 在 財 0 0

農家数の変化

富沢の主な生業は農業

であ

っった。

水

数六九のうち、 で行われていて、 農家は五九戸であった。 H 耕作 九六〇(昭 と畑作 和 が 三十五)年 ほぼ 同 じような割合 農家 に は が 世 八 五.



沢 パーセを占め カン 5 ていたことになる。 車 ・兼業別農家数は専業が一 この年 の「農業 九戸、 第 セ 種 ン サ 兼

業農家が二七戸であり、 全農家 た。 総世 専業農家が三〇シニャを占め、 の半数を占めていた。 帯 数 四 八に対して農家は 第二種兼業農家は しか L 第一 兀 種兼業農家 一四戸で、 九九〇年 一三戸 に であ な \$

とめ

る。

第 シニャにまで減少している。 0 て、 九 九 九年 第二種兼業農家の占める割合が大きくなった。 兼業農家が三戸、 現在では、 専業農家は 第二種兼業農家が三五戸とな その内訳は専業農家が六戸、 戸となっ てしまっ

自治組織 富沢の内部は、 先にも述べたように一九 た。

組 織 ± 地 され と家を持つ家持ちで一 ていた。 三二(昭和七)年ころまでは七 九八七(昭和六十二)年までは 班 から七 班と九班 組四七軒 カン 自 3 分 で

され

た委員は、

盆踊

9.

夏祭りなど行事のときの

まと

8

降 \equiv 0

は

アパ

1 借

ができるたびに一棟で一つの班を形成

す

X

の組織ではないが、

部農会の会長も区の総会で決

班

班 1

は

家

までつくっ

T

い

たが、

九九

年

以

長を回り持ちでつとめ、 現在自治会では新旧住民を分けずに持ち家 る るようになっ が 四 班 た。 カコ 5 四 九九九年に 班 アパ までは 1 すべ は二五 は持ち主が T アパ 班 に の世 增 1 班長 加 1 C L あ T が 0 班

公民館、 名となっている。 納税組合長が各一名、 自治会の 体育、 組織は、 交通。 協議委員は、 防犯· 協議委員が七名、 九九九年現在、 保健、 会計、 自主: 総務、 区長、 防災 会計 堰 副区 に 監 わ • 査 土木、 が三 カン 長 れ

民館館 う委員が置 わ 会計と総務以外は各班 がば事 務 長は区 局長 カン れ の役割をはたし、 長が兼任 ている。 L から一名ずつ委員が 各班から公民館の委員 公民館 ほ 担当 かに公民館会計とい 0 協 加 議 委員 に選出 は 1

わ

る。

公

年で 役として働く。 ある。 X 長は選挙によって選ばれ、 任 期 は

荷をし ることであっ してい たため、 た。 現 在 部農会は 11 家 並 区民 2 順 の生活に大きく関 0 持ち П りで あ る わ

地

れ

めた。

つて富沢

は

専

業農家が大部分を占めて

共同

出

が

ミッ カセギ 富沢 まで 毎 で 年 は Ŧ. 九 月 中 七 八 旬 に 留 和 ? Ŧi. ッ + 三年 力 セ ギ ころ

H

堰)とい

って三日間

一穴堰

カン

3

0

取水

かを 止

め

て用

水

0

運

カン 全て全戸が \$ 内 掃 0 用 0 除 作業に参加する。 だ 水 と補 路 から 修を行っ 出るというの 全戸 耕 地 総 0 灌 た。 出 漑 0 穴堰 年 用 T 中 水路 なく、 0 行 事と 取水 を日 なっ を分け 各戸必ず一 口 T 1 5 て三日 ネル た 日 は \equiv で行う 内 どこ 日 間 X.

水窪

村や上

上狩

村

と分割

した。

れ

てい

る。

ح

0

ほ

か富沢

地籍の入会地も払下げ

を受け、

P 共有地 富 沢区 0 グランド 現 1 在 IJ 富 沢 1 四 などを残して分割 7 ラブ 七戸 に 0 貸 愛鷹 L T Ш あ 共 る 有 地 町 は 東名 反 六畝 力

鷹 Ш Ш 近 が 世 P 大数 等官林 カン 野の 3 原 の入会地 に などで 編入されたため、 あ は 明治 る。 以降 八 七 \$ 継 五. 一駅 承されてい 明 Ŧ. 治 二か 八 年 村 た 0 K 村 愛 愛 鷹 々

た

さら 三〇〇〇町 動 に 民有引き戻し た際に、 編 に をした。 入さ 八八 れ、 富沢 歩 愛鷹 は 九 村 払下げ 運動を起こし、 (明治二十二)年に Щ は 八九九(明治三十二) 牧畜会社に貸与さ 原 村 を目的 ほ カコ に愛鷹 \bigcirc 富沢村も参加 は カン 愛鷹 牧畜 町 れ 村 年に 7 会社 Щ 組 官 い 合 払 た 林 15 が L 下げ て お 入 設 が よそ 御 1 つ 立 3 T 料

橋と道 富沢に C 橋 が なく、 は 九 黄 九二年 瀬 ЛÏ を渡 に 富 いるに 二平 は 橋 橋 から 0 できるま あ る 桃

最 バ 寄ごとに 袁 わ 0 まで行 れ 寄 浅 タ 瀬を は 2 サ 中 クラバ 最 利 か れはま あ なけ 寄 用 り は L タと呼 た最寄ごとの れ ナ 上 て対岸に渡ることは 最寄 カ ばならなかっ + ば カ は れた。 イド ウ ヮ ガ 水遊びの 1 た。 主に子 ワ ラ、 ま た できた。 ただし は ども 縄 ま 張 ナ た りでも 0 ガ は 日 通 浅 1 常 ヌ 学 口 ス 瀬 に あ 15 は ッ は 下

使

最

Ш

1

T 道 脇 か っての面影をしのばせてい 15 0 は て富沢を縦 甲州 石塔 が 街道 建 ち、 は古い道で、 15 貫く道は、 班 0 南町 る。 地 甲 州街 域 年配の人はここを E に残る甲 道と根 は 細 い 方街 道 州 が 街 あ 道 道 0 0 で

道



写真 3-60 旧甲州街道(庚申塚)



富二平橋の渡り初め 写真 3-61

根方街

道は、

江之

原表

カン

瀬川 りで

0

西 岸

袁

向

根方街道と合

流

あ

士也

郡

の古

原ら

0

が

整備

たと

わ カコ ら愛鷹 まで

れ

Ш

[麓を通

5

桃園 境

0

集落の東縁を通っ

7 旧

道をいう。

富沢では

戸

道であっ をして、 路 幅 富沢の三か村共有組 は 組合道 た。 狭く、 歩く 路 か荷車がやっと通ることのできる 新道などと呼ばれるように 合 が道路 工夫をやとって修理 そ 0 後、 水窪、 なった。 上土

狩

馬 話 街道は富 を記 力が通ってい 憶 沢上 て のバ 5 る。 たとい ス停 甲 う 州

たとい

う。

を利 それ く道 行く道 用 以外 ĵ は は あ まり 根 識 方街 から 意識 強 道 < また することは 富 沢 は 新 カン 道 3 北 Ł な 呼 カュ を甲 び つ た 州 とい 街 そちら 道 う。 ٤ 呼 0 U 方 南

彦とほ

明

甲

州

街

道とい

つ

ても富沢

0

住

民

にとっては

桃

園

12

行

集

落

0

中

は

F.

最寄と中

-最寄を南北

に貫く道をナ

カ

__ 暦

例 は

8

寄 とい ま あ 3 から山 た 0 と呼 わ た古くか 各最寄 れ る。 0 Si o 神 に 古 からはそれ 3 行く七 最 0 寄内 家 道 だ が 分家 曲 0 が、 ぞれ 村智 0 نے 道 2 を 呼 Щ 出 れ に ば はとくに す は 行く道 れ た かつて る急 8 に 呼 坂 が 0 カミとシ が あ 称 くっ る。 あ は た道 0 な 下最 た モ が だ に

わ

n

る。

道 0 官 は ま た 地 払下 上 庵んでら 土 狩道 げ で 跡 と呼 得 0 た土 脇 ば カコ 地 n 3 る。 を 切 開 0 墾しに通っ 上土狩 通 L で 観為 0 音坂 人 ハびとが たことか に 0 な らつ 明治 から る

九

 \equiv

年代

に

現

在

0)

迂

П

路

K

整

備

3

n

13

寺社と祭り

富沢 定 輪 15 寺 は 寺 の檀 は なく、 家で あ 旧 戸 の

が

桃

園

後は 富沢 の 大祭は + 瓊に 九六八(昭 四 月十 瓊に 年 0 復杵尊で、 で、 П + 氏 分 月の 神 あ \equiv 治 る場 日 0 和四 元 未 愛 に • 境内 應 な 合 0 十三)年に 神社 り は 日 六五: 中 で、 0 近 0 は 八 未の 年 未 (年)の 愛鷹神社 下最寄に 改築したと記 は 0 そ 日 日 建 15 れ から 立 に 行 改 あ で 築記 近 П 0 T 1 あ され 現 き る 念碑」 祭神 日 場合 在 曜 T 0 は \exists に そ い 建 に 天ま は 行 0 初 は 津っ

子ども 男衆 几 交代で当 とし に 角 あ 不 ·動尊 5 が て、 る。 薦 才 0 寝 フ 上 を 一番をつとめる。 富 は 愛鷹 あ ル 最 沢 1 便が げ マイをする。 寄 0 旧 る。 Щ 治 中 0 戸 最寄、 全体 テ Ш るよう 裾 ル 不 = でまつ に 寝小 あり、 IC 動堂 下 ユ 最寄 願 1 を 便 り 0 バ 湧 懸 0 中 0 イ 神様 水と け 東 で 日 月二十 女 照 る衆が とも 願 下 滝 (り)の 最 は が 経 た 1 H あ る上 わ を を 0 れ き あ 西 方 げ から



愛鷹神社の子ども神輿 写真 3-62

懸け、 また、 15 雨 きゃ 乞いをした。 病 かに、 公民館で不動講の念仏をしてもらったという。 人が出たときにはその家の人が 富沢全体で雨乞いをしていたこともある。 一九四〇年代ころには露店 不動堂で願を が出るほど

釈迦、 どさまざまな像が安置されてい 公民館はかつてお堂であった。 阿弥陀、 薬師、 弘法大師、 る。 観音、 現在は子安さんほか、 ガキ婆さんな

やっ 勾 れ の火の粉が落ちて火事になり、 五十九)年ころまで庵寺が 配だっ 石仏が並んでいるだけである。 ていた。 愛 てい る。 鷹 神 内 たため、 社 それ以前は毎月十日と十七日 部 の北 に 庵寺は定輪寺の隠居寺だったとも あ 0 年配者には登り 小高 2 た仏像は早 い 丘 あ の上に 0 た。 現在は跡地 5 降 時期に 庵寺までの石段が急 は、 茅葺 りが き 公民 きつい 0 九 屋 K 夜に念仏を 八 根 館 いくつ 四 という 12 に移 花 留 わ 火 3 れ カン 和

あげる。 子安さんは三月十日に念仏講の女衆が 館で行われている。 講 自分の娘や嫁にお産のある人は、 カン 富沢全体で行う講は、 に お弘法さん、 お弘法さんは二月二十一日に行う。 子安さんで、 先述した不 あ 0 願をか まっ ともに 動 T 講 ける。 公民 経 0 ほ を

基 頭 (観音 馬 伝 庵寺 える石造物 ح の 0 くらし 跡 15 0 基 を で 基 あ 富沢 る。 は 庚 順 礼 申 ま 0 供 石造物 塚 た 養塔 に 石 造 0 C 基 物 \$ などと は 0 基 とも 公民 多 1 館 次 うよう 15 5 で \$ 几 馬 0

蔵などが

並

h

で

15

る

地

写真 3-63 観音坂上の馬頭観音

> 数 カン 所 に に カン た まっ 1 T 建てら まで れ 0 T 古 5 順 礼

公民 沢で 集 愛 基 15 \$ 茶落 應 $\stackrel{\circ}{=}$ 庵 建 公民 館 に 牧 基 \$ て 館 跡 15 接 0 あ 0 3 野の る とも 15 は L れ には、 が、 T 馬ま は T 供 古 1 0 15 た富 順 13 養 る。 順 世 礼 0 六 カン 供 観 沢 八〇(延宝八)年建立 礼 紀 ためにたてられ 半 供 養塔 音 七 0 養塔 元 近 ば 〇〇(元禄十三) 世 基 Ŧi. 一を伝 基 である。 庚 馬 えて 申 塔 T 頭 (観音二 また、 い お 年 基 T 0 り 注 馬 0 などが 供 愛鷹 基 頭 養塔 目 馬 \$ 3 観 頭 0 音 れ 牧 観 は あ が

は 音 富 几

が

П 講 る。 無

0 は

持

ちする。

事

15 生

ま

れ

ると、

赤

飯 H

寸

子を供えてオ

ハ

タシ

をす

子安さ

んは 寄

月

+

つとめ

をする。

れ

3

1

最

中 毎.

最寄、

下 に P

最 お

寄

0

順

で

戸

ず

0

丛

番

を 0

前半 塔 묽 申 0 碑 塔 甲 لح などが 西 カン 州 0 1 3 13 街 玉 t= 0 道 カン \$ 新 脇 坂 建 0 東 L つ 順 0 T 礼 な V 庚 供 E 申 秩 \$ 15 市 養塔 父の 0 る。 塚 で 域 に で あ ここの は 札 基 る は 所 が、 珍 をあ 順 馬 L 七 馬 礼 5 頭 八七 わ 頭 供 観 \$ せ 観音 0 養塔 音 天 T から 明 基 を は あ 七 百 る カン 番 唯常 ね 力, 年 供 世 た 0) \$ 紀 庚 養

愛鷹

Ш

麓

に

は

八

几

Ŧi.

弘

化

年

建

立

0

馬

頭

観

音

像

所でもあった。現在は富沢区のグランドになっている。 観音のある場所は馬つくろい場で、馬に灸を据えた場 また、富沢では各最寄ごとに山の神とサイノカミを

がある。集落からそこへの道は観音坂と呼ばれ、馬頭

まつっている。

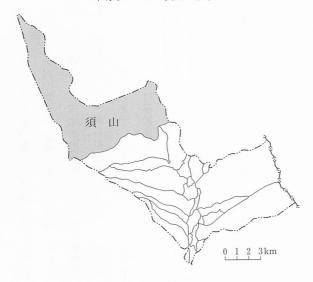
参考文献

五年

『富沢の民俗』(調査報告書五)

裾野市史編さん室 一九九

図表 3-64 須山の位置



第一 節 地 理 的概要

第

一五章

須

Щ

生々

しく口を開けた宝永噴火口が間近に望める富士山

その裾野に雄大な大野原の茅原が広

が

る。

迫

り、

わ か が

れてしまう。

度天候が崩れれ

ば

集落

は はすっ

ぽりと濃霧に

覆

高地の集落

所に位置する須山地区が見えてくる。 広々とした芝畑の中に、 市街から自動車で上ること約二〇分。 晴れて 市内で最も高 い れ ば

珠山など様々に表記されているが、 は領主側への提出文書に記した文字の誤りで「須」 用例が多く、 ことから須山という村名になったという伝承などがあ 一深」になったという伝承や、 さて、文書に記された須山の村名は、 近世の公的文書によくあらわ 富士山 とくに深山 の砂(須)が多い 巣山 n 深み山地 る。 村 深山 0

が

使

る。

須

Ш

は

裾

野

市

0

最も

北

西

端

に位

置

T

てい

る。

深

沢

位 置

付 トトロメ 近 を 最 西 北 端 端と 富 0 士: +10 Ш 里清 南 木 東 南 カン 端 の宝 3 0 東西 愛 永山 鷹 約 Ш 直 呼子 八・二キロメ 下 0 岳だけ 海 まで 拔二一 あ り 距 Ŧi. 離 トメー 市 約 内

田だ 南 0 は T 最 東南 お \$ 子 り 広 しつ は 岳 東と北 地 富 カン 王 ら東方 域 を占め Ш 麓 は 地 御ご 一般場 X 派 T で今里と接 出する 1 市 る。 尾根 西 地 は 域 筋 首 L は 大き T 線 を境として 的 る。 な 15 富る L 王也 字 下 市 形 和わ を

地地 利形 تخ 用 主 地 須 区 Ш は 北 大きく愛鷹 0 富 王 Ш 地 Ш 区とに 地 区 分け 東 0 ることが 富 ±: 麓

るとも

1

わ

れ

T

る。

0 な トメルー 前

できる。

n P 食 よ P 愛 0 開 て深 膻 H けて Ш 流 2 地 は 谷 谷 X 底 深 を ~ 形 に は 渓谷とな 佐さ は 成 大小 野の L 川 0 海 カン り、 河 抜 3 原 七 分 源 岐 Ŧi. 石 一〇以付 流域 から Ū た大沢 堆 は 積 近 障 L 壁とな 7 カン が 3 大きく 下 る。 0 流 T は 浸

越れ

位い

牌は

岳湖

0

根

となっ

T

2

とくに呼

子

岳

足と位

牌岳 呼子

を

結ぶ尾根

は、 尾

鋭く刻まれ

た稜 る。

線

で

ってぎりだけ

るとす を形 と呼 部 Щ 0 岳 は 5 分だけ 形 塊状をした黒岳 愛鷹 カン 成 切 ば をし した れ 3 る れ 東方 災山 (吉原・ 目 黒 て \$ 大沢 は 割おいる 岳溶岩と 1 0 0 市 る。 派 で、 爆裂火口で、 側と富 教 出 峠と称され 育 する 前 が 大沢の 委員 L 出 あ 士 り、 T 尾 0 会 市 あ 根 源 須す 『愛 愛鷹 愛鷹 火口 津と り 0 流 T 先端 上の熊ケ谷・ 域 いっ 鷹 富 の — Ш Ш Щ 0 る。 士: で に 両 は 角 2 0 側 九 ここだ 0 地 海 は が ٤ 0 六二 質 側 火 浸 抜 熊 0) 食され 火 义 口 間 年)。 では け 0 Ш 壁 に 特異 八六 で で あ あ 越 あ る

るとい す 付 近 る 上 ま 近 須 7 方 で は Ш う。 スギ は シ 原 周 辺 9 # ブナを主木 カ 林 . 0 とな 愛鷹 " Ł " 1 ジ 丰 0 Ш は T 0 0 とした落葉広葉樹 植 植 15 生は、 高 る。 林 地 3 となっ から また越前 全体に ○どを越す てい 林とな 海 岳 るが、 拔 を 中 \$ 心 それ 0 分布 \$ Ш あ 頂 t

愛鷹 山の北麓を埋没させている富士山一 帯は、 北に

な

地

形 1

لح

な

0 場

る。

東富

演習

侧 7

は

P

p

傾

斜

から

急

で

起

伏

に

富

h

だ

複

雜

0 る。

草

原

15

は

Ш

から

あ

る

が、

力

ワラ

٤

い

0

T

砂

礫

0

+

皙

0

た た

が

展

開

L

た

と考

えら

n

T

い

る

(『須山

0

民

俗』)。

海

抜

成 火 塚 ٤ 袁 3 ح 山 遊 腰音 3 れ から T 袁 連 切前 カン 塚が 15 地 3 続 る。 L 浅 方 丰 T 黄 ヤ 15 塚か 平点 n ン る。 プ 以 な 塚が 外 場 ど . 近 鑵丸 のとこ • 年 無名 子 Ш ル ح 3 フ 0 . 0 黒 は 場 Ш 地 を含 塚 帯 下 别 . K 東が 荘 8 か は 白 地 T 3 野 な 八 塚す ス 外 . 1 ギ E 個 から 動 西 0 . E 造 物 側 黒

向

カコ

つ

T

高

さと

傾

斜

を

増

L

T

き

海

抜

0

0

間

用沢され 富 林 斜 及 地 士: 愛 鷹 Ш 0 75 ٤ な 13 畑 麓 Ш 地 大 t カン 0 野 9 T 0 東方 原 混 お り 地 在 は 0 X 洞 た 草 で 沢 地 原 火 南 から 帯 入 で 雜 砂 東 0 木 礫 あ ~ 込み、 と岩 る。 林 向 カン 屑 ح ス 0 とく T 0 ギ 0 厚く 地 起 帯 に 伏 Ł 堆 御 15 1 0 井い 殿 丰 あ 積 戸と 場 0 る L 沢き 傾 た 市 植

Ł 高

な

T F 植

る。

丰

0

ほ

落葉広

葉樹

林

灌

木

林

٤

続

+ 1

度

を

げ 林

る 地

15 0

L

t= カン

が

2

T

ブ

ナ

樹

林 .

力

ラ

7

"

樹

林 き

帯

カン

差

するところ

に

位

置

L

T

5

る。

集 落 須 き Ш 0 集落 た た は 富 3 + 0 Ш 0) 裾 用 沢 野 が 佐 愛 鷹 野 JII Ш ٤ 塊

る。 て下 3 る。 ٤ 0 里 ま 舌 0 御 木 鞍 た 状 る 須 殿 道 根方 部 場 台 Щ 国 地 須 は 道 道 海抜 Ш 上 道 国 四 2 0 (県道· 六 道 約 枝 海 九号)と、 0 四四 + 九〇 郷である十 抜 六 富士 約 里 九号)、 六〇 木 ○以付 0 裾 北 ○以付 集 野 愛 東 落 近 里 線 鷹 0 木 カン に F Ш 御 は 3 1 近 い 0 殿 富 集 15 東 場 落 愛 う三叉 形 士: 側 市 鷹 成 市 を 3 Щ 板だ 形 Ш 路 と富 麓 妻は 向 成 n T が 15 カン 交 沿 向 3 T 士 0

原)と呼 る 富 砂 礫 士 地 Ш 33 帯 0 C 裾 2 あ 野 0 り KE 原 広 野 そ から は 0 る 影 原 富 影響で広 野 士 を Щ 大な草 0 才 唶 才 出 1 物 原 ッ 0 ٤ ハ な 風 ラ(大 化 0 T 15 野 よ

め 8 15 愛 水 鷹 から Ш 地 下 カン 3 に 0 浸 透 わ す L カン T L な まう水 L ぼ 0 無 水 を III 頼 C 0 あ KE る。 そ

久保・

と呼ばれる須山浅間神社の前を流

れる用

沢川

流域

内

ス

t 和

7

٤ 8

えば カュ

上

村をさすことが多い

F

村 た。

は

5

国道四六九号(十里木道)に沿

って広が

るのはら

と呼

れ

地

域

までの広い

集落で、

富士信仰に

よっ 向

T

4

ラ

末

カン

3

昭

初

12 い

かけて上

一村と田向これ ない

村とい

つ

T

○○よいとい 二つの集落に分かれてい 須 Ш 生活 本村 用 う高 は 水 の確 愛鷹 地 保 に Ш に あ 麓 永年苦しんできた村落 0 る。 なが に 流 れる佐 5 この二つの集落は、 通常 野 川を境に大きく 0 山 で

大正



写真 3-64 街道のムラ十里木

と佐 発

野

Л

15

挟 緯

ま

た洞 が

窪

地)に る。

立地し

た 田

Щ

村 は

0

景

展 る

した経

が

うか れ

わ

れ

また、

村

愛鷹

観 Щ が ば か

を持つ集落である。

一村とは あ る。 異 な

譲され、 0 キロメ離 ク 発生しやすく、 じる十里木道沿 IJ つある。 ため、 材を用 方 れてい 街 十里木 道 い 家屋の根太(土台となる木材) る。 たとい から離れた地 旧 は愛鷹山北麓の富士 いに立 富士山と 来の戸数は一 う。 地 現 愛鷹 してい 在 域に新 + ○軒であっ Ш る。 -里木に 0 鞍 1 本 住宅 部 富さ は 村 は に 腐り 宮両 别 あ カン 地 3 が 荘 0 広 12 湿 地 T は 市 < 約 が が 気 霧 に

9 分 1 から が 六 通 ろ

12

あ

り

市

内

0

縄文時

代遺

跡

は

最高

点に あ

あ

たる。

とも

あ れ

約

五千年以前に、

人 ٤

々 L T

の生活

が

0

Ш

第二節 歴 史概要

1 中 世 以前

の縄文遺跡市内最高地上

点

九

七

Ŧi.

昭

和

五十)年、

県道

+

里

木

L

品 n

で T

柄

下

央

+

0

人が 全身、

陸

稲

中

に

「わらび手刀」を発見して

3

びに の耕作

覆わ

1 たが、

ま 緒

は

保存

処 部

理

F:

は を い

銀製 施 る。 地

である。 てある。

わ ほ ぼ完形

3

W

手刀は・

七~

九 頭

世

紀 げ 5

に

カコ 鐶

1+ 0

て、 中

東

に C お 地 地点付 表 地 下 約 土 元 は 0 人の どのところから縄文式土器が発見され 約二以 近で縄文式土器が発見されたという。 話によると、 ほど削平されたとする 須 Ш 線 0 一九五 側 溝 工事 Ŧi. 中 (昭和三十)年、 か 3 須 Ш 新 この しく発 た。 野 Щ 時 同 な で

は 文時代の な たということに 1 カン とさ 前 期 後半 れ T なる。 1 か る。 または 2 発見され 0 遺 同 時 跡 以は、 代中 た土 器 海 期 抜 前 0 六 半 時 期 Ŧi. 0 トメリ は \$ 0 縄 で 0

見され

た土

器

は

地下約三片

0

深

V

ところに

埋

一没して

たことを示 してい る。

(野原遺跡・) 2 沢さ 0 九 杉 Ŧi. 六 アラク」というところで、 (昭和三十

一)年、

須山

気候 大橋付 北 j. 2 活 け Ш で内容は明らかでない。 カン 0 地 0 3 地 富士 方を中心 痕 0 厳 近 御 域との交流を示す貴重な文化財である。 跡 殿場 L Щ で、 が 原始 麓 1 芾 土 12 ところで の古代遺跡として注目され 中部 時 一師器と 板妻 代 地方まで分布する古代の刀剣 ^ カン ある 通じ 思 3 わ 示 が、 須山 3 る国道 れ る土 n 以上 は T 市 器 匹 1六九号 る。 0 内で最も高冷地で、 が 発見され ように るが、 0 人 須 たと ま 々 ± Щ 山白るの た須 器 0 4 だ

塁 な 一跡 お 駿 が 河 あるとし、 記 に は 源 頼 九一八(大正七)年の 朝 10 カン 0 0 SII 野 時 『静 元 0 岡 県

駿東郡 る が 詳細 に も深 は 不 明で Щ .城 跡が寺 あ Щ とい う所にあるとして

一の須山 須山 (大永四)年にはすでに浅間神社 浅間神社棟札によると、一五二四

が建立

とは明らかでない。

多くの導者(登山者)が富士山登山道に集まってきてい ರ 書 れ カン 兀 ており、「諸邑(村)の安全、 海安穏 れてい を、 る(『市史』ニー 年々歳々参詣して祈願 四一 諸人の 一号)。 この 快楽、 い たします」 頃には、 天下泰

たと考えられ

年に、 Ŧ. 1+ を旅行した折、 を詠 至りて、雪をかき分けて」とあって、次のような和 分け 京都聖護院門跡の道興 んでいる。 これ 82 心 より 「すはま口といふ所より富士のふもと のミちを神にまかせて」(『市史』二-三 修験の天台系本 すなわち、「よそにみし富士 四 ○年ほど前 が、 0 Щ 裾野 派 四八六(文明十八) 市 本 や沼津市周辺 拠で 一の白雪 る聖

認できる。

士 山 信 のように、 仰 0 拠 中世 点で あっ 0 須山 たと考えられるが、 「は浅間 神社を中

2 近 世

支配と村高 北は富・ 王山 の宝永山に、 東は駒 南 は 下和

村

接する。近世における須山の支配関係は、 (寛永九)年以降小田原藩領、 西は富士郡 一七〇八(宝永五)年 村 (御殿場市)と 一六三二 以

帳八五石余、 幕領、一 て明治維新を迎えている。 七一 六(享保元)年以降 村高 再 は、 び小 正 保郷 田 原藩 帳 領 とな 元禄

天保郷帳一七四石余である。

須山村の概要 一六八六(貞享三)年村明

細

帳

に

よれ

三島・沼津に付けだしている。 (屋敷 七石余を含む)であ ば、 高 る。 四 九 百 家数 石 姓 余 0 農間 は すべ 余業 軒 T 内訳は 12 薪 畑 方

護院の僧が、須山口から富士山の麓に至ったことが確

0

あ

734

心に

した富

詳し

人数は 名 送 数 使 几 [○疋、 七〇五 用され 組 頭二。 牛は三○疋と多い。 た 本 男三八七・女三一 0) 百 と思わ 1姓六四 れ . る。 村 ح 足 神 六。 れ 軽 社 は は 出 主 . 浅 に 家二で、 無 間 物 田 高 資 几 0 0 六 馬 輸 4

に

\$

四

社

権

現(高二斗

应

升

が

あ

る。

寺

は

高

などが

あ

る

記 石 郡 0 から 境争 **浄土宗芝増上寺末、** あ る。 論 で は 六 六九(寛文九)年 須 Ш 村 青雲山は 0 主 張 が 三天嶽寺(0) 認め 富 士 3 郡 (天岳 れ 六 T 郡 七 寺 境 カン ٤ 村 \$ が 決 表 Ł

+

·里木

は、

寛文年

間

0)

富

士:

郡

村

々

٤

須

Ш

村

との

境

論

0

8

3

れ

た

仰 富士 登 道 須 Ш 山山 口 口登 集 落 Ш で、 当 南 村 須 口 は Ш . 浅 東 富 間 口 士 神 表 Ш 社 П 登 神 ٤ Ш 主 も)と 道 渡 辺 0 称 ŝ 氏 5 3 (除 須 れ 地 る Ш 信 反 \Box

0

とも

伝

える(『須山

村郷

土

誌

第

巻)。

+

申 仰 畝 0 0 年 中 歩)ととも 心をな を御縁年とい してい に 祝 1 た。 人 (渡辺氏) その 六〇年に一 年に 御 は 多くの 度めぐってくる 師 導者で 人 が 富 賑 士 庚 わ 信

(うち女一八人)、一八六○(万延元) 八〇〇 (寛政十二) 年 0 御 縁 年 年 0 で 御 は 縁 Ŧī. 年 で 九 は 八 人

> 堂 四 年 神 -の宝 明 宮 永噴 が 火前 噴 火後 0 登 0 Ш 登 道 Ш 沿 道 沿 道 15 道 は に は 観音 天 嶽 堂 P 薬 1 祠 師

Ŧ.

九七人で

あっ

たとい

う。

0)

ほ

か、

七〇七

宝

永

木 道を + 0 单 概 行く 葽 木 村 ٤ 須山 Ш 富士 村 村 本 郡 村 0 技郷 ٤ カン 0 3 愛鷹 で十 境 12 单 + Ш 木 里 0 新 Щ 木 裾 田 0 とも をたどる十 集 落 から い う。 あ る

須

野 過 原 程 0 で 春は 勝訴 (榛)木沢を開 した須 墾し 村 が T 郡 境 た須山 えを守 るた 新 めに、 田 を移 当 L 初 た 大

足柄 は て、 p 市 + 吉原 里 そこ 末 里木 道 と抜 (富士市) カコ は ら御 即為 け 瀬世 野の る 古 殿 足 御 、 と 向 場 富士 柄 殿 を 路 場 通 市 かう道であ 市)・ぐみ沢 勢子辻) 2 あ T る 相 1 州)を経 は 関業 る。 4 本是 同 T 2 大岩なな 神 市 富 沢 茱 奈 士 カン 萸 Ш 方 3 富 沢 須ば 面 士 南雪 を 宮 カュ

経 3 市

小山

[町)を

通

0

T

籠がなか

峠

を

越

える甲

州

路

に

\$

0

な

が

図表 3-65 須山の字 内野ノ内用沢 オロ窪 大 オイ平 柳 野 内野ノ内甚五作 沢 久保 新井 ツドヒ 淵 長 平 上石窪 坂 原 垣 滝ノ沢 萩塚 中石窪 二本木 田向 向 Щ

0

村

方三

一役

を

置

15

T

1

た

名

主

組

百

烨 年

代

は L

市 L

域

0

他 八

0 1

村 九

々

口

様

2

0

属

8

まぐる

六

八

六 頭

負 村 異

(字三) 総

Ti

カン

明

治

年

0 所

町

村 から

制

施

行

ま

C

15

図表3-66 須山の字一覧

数 郷 付 で \$ は 帳 1+ あ だ で 0 軒 薪 た L だ 7 ٤ 石 は が 15 瀬 15 る。 斗 古 本 九 . 支 村 吉 合 配 ٤ 原 0) 0 よう は は 方 あ 别 須 面 る。 な 111 K

と本 村

は

る は

圳

域

15

口 村

U

高 な

元

15 木

店 2 0 た め 沂 世 0 + 里 木 に 11 問 地 屋 理 から 的 位 軒 置 置 カン カン 5 n て + 茶 里

3 沂

現

代

行 政区 0 変遷

町 須 村 Ш 制 は 0 村 近 # 0 L 村 T 引 から き そ 継 0 ま から れ ま 7 明 き 治

0

変 わ 0 T 15 八 た。 七 二(明 治 Ŧi. 年 15 は 大区 1

浅木塚ノ内(アサギヅカノウチ) 新井(アライ) 内野ノ内大塚(ウチノウチオオツカ) 内野ノ内桑木畑(ウチノウチクワギバタケ) 内野ノ内甚五作(ウチノウチジンゴツクリ) 内野ノ内高萩(ウチノウチタカハギ) 内野ノ内チャガザウリ(ウチノウチチャガゾウリ) 内野ノ内平垣畑(ウチノウチヘイガキバタケ) 内野ノ内用沢(ウチノウチョウサワ) 内野ノ内入道(ウチノノウチニュウドウ) オイ平(オイタイラ) 追出し(オイダシ) 大坂(オオサカ) 大沢入ノ内堂ケ尾五本地沢入 (オオサワイリノウチドウガオゴホンチサワイリ) 大野(オオノ) オロ窪(オロクボ) 上石窪(カミイシクボ) 久保(クボ) 小物成山(コモノナリヤマ)

下二本木(シモニホンギ) 十里木(ジュウリギ) 滝ノ沢(タキノサワ) 竹ノ後(タケノウシロ) 棚台(タナダイ) 田向(タムキ) ツドヒ(ツドイ) 中石窪(ナカイシクボ) 長坂(ナガサカ) 二本木(ニホンギ) ヌカリヤ(ヌカリヤ)

萩塚(ハギツカ) ハシリヤウト(ハシリヤウト) 原(ハラ)

富士山(フジサン) 藤原(フジワラ) 淵(フチ) 平垣(ヘイガキ) 向山(ムカイヤマ)

柳沢(ヤナギサワ) 六左衛門作(ロクザエモンツクリ)

X

制

0

導

入

この大区小区制も、

一八七八(明治十二)年の郡

区

町

村

政村となった。

よっ

T

第

大区

Ŧi.

0

小区

へと編入され、

八七四

(明

須

の村々とともに第一大区三小区に編入された。そして治七)年の大区小区制の再編により、市域の水窪以外

JII 選 戸長役場管轄区域の改定がなされた。そのため、 編 0 を境に市域は 制 0 治十 戸 カコ 法によって廃止され、 村 長 -七)年には戸長公選制を廃され、 から 0 置 X カン 東西 域 れることに に 組 に二分され、 み入れ 再び近世以来の須山村 なる。 られ、 須山 L 戸 長役場は御 カン は L 戸長の官選と 御宿村 八 黄* 宿 ほ 八 15 民 四 村 か

村 が 0 と町 八九年に 0 村で 行政 八八八(明治二十一)年、 村 明治 村 組 合を設けて、 が 須山村 町 誕生した。 村 · 富岡村 制 0 行政村 須山 市 域 . 深浪村 市制町 では唯 となっ 村富岡 村 村組 た須 ・小泉村という四 制の公布に 近世以 合村とし 山 一村は、 来 富岡 より、 て出 0 村

合併

問

題と大きく関

わ

0

てい

たか

らであ

15

置

か

れ

ることになった。

発

した。

組合村役場は富岡村に置かれ、

組合村長も富

岡村 須 やく町村組合を解消し、 山 出身者 村 0 悲願となり、 から 務めた。 その後、 富岡村と須山村は独立 八九九(明治三十二)年に 組合 村 の解消、 独 した行 よう 立 から

など、 とな 併し 糾したといい、 富士演習場問題や高冷地農業経営、 御殿場との合併 七一(昭和四十六)年に市制が施行され、 山村と富岡村が裾野町に合併して裾野町となり、一 十一)年には深良村が、 戦後、 2 T た。 裾 一九五二(昭和二十 村がこれまで抱えていた多くの課 野町 しか が そのしこりは長く続いた。 L 派による反対が激しく 誕 生し 須山 一九五七(昭和三十二)年に た。 村が合併 七)年に小泉村と泉 さらに、 する 旧村有財 、村内 に 九 現 あ これ Ŧi. 在 題 は た 六 産 0) か 0 裾 村 なり 解 0 は T 丽 野 は が 決 処 は 和 理 東 合 紛 九 須 から 市

戸数と人口 「小区表編立調査」では、家持一二二戸数と人口 戸数と人口は、一八七五(明治八)年の

村

C

あ

る

が

そ

0

近

お

生

力

增

大

や

特

産

品 Ш

0

開

発に見合っ

て、

人 代

П 15

が

順 1+

調 る

に

獑 産

增

L 0

たとみるこ

戸、 ○人であ カュ 15 村 X 自 口 る。『市 六 治 八 X 八 八 造 八 五. 史 成に 明 人(男三五 治二十 四 関 す 三四二号)。 る諸表」 一年 七人·女三二八 頃 0 で 大正 御 は 宿 期 Ŧi. 人と 村 及び ほ 戸 な カュ 昭 つ 八 和 几 0 T

は

さら 前 ○年ごと 最 に一 後 0 _ O 統計 九三六 0 车 値 数 後 値 丽 を見 の 一 0 和 れ あ + 九二 る ば -一)年は 六 九四 九 昭 兀 和 九一三人であ 六(大正 昭 元年 和 + は 九)年 Ŧi. 七 年 は り は 六 戦 人 几

> 数 業

村 戦

X 前

口

統

計

に T

ほ は、

ぼ

連

年

0

数値

が

0

0

T

15

る。

便 域

宜

上 ケ

٤

里

期

に

0

2

-

市

史

第

五

卷

0

裾

野

市

Ŧi.

九

七

人であ

八七五

年

نے

九

刀口

四

年とを比べ

ると

約

=

倍

增

\$

0

3

0

と比べ で あ 增 る 加 T L て 高 ح 1 5 0 る。 値 カン は 基 0 裾 各年 本 野 的 市 を 15 域 取 畑 作 2 兀 ٤ てみて カン 林 村 業 0) 収 \$ 平. 入に 均 年々 値 依 小 拠 す しず 兀

> とが できよう。

七一人と、 が、 の — 自治会とは れ は が 木 同 てい 開 人口は 四四 九九五年でも K 様 九 九 発 は 九 七 0 る。 九 L 别 傾 Ŧī. た 人 Ŧī. 向 人 荘 むしろ減 留 ح 別 车 口 分 地 で 和 であ 0 現 譲 は 0 あ Ŧī. 約 在 世 五. ると 地 ほ 十)年 区を含め る 帯 少 七三八 一二七 から カン が、 数 0 あ K い 0 り が三六三、 傾 える(五区を除く)。 倍 玉 行政単 であ 、人と世 向 九 勢 ると、 にあ そこに 六 增 る。 調 五. 加 位とし る。 帯 査 昭 となる。 几 人口 ح 入居 15 数 和 ح 九 0 よると、 は 四 は T 地 增 L 1+) れ # 須 X T は 加 六七 は 年 帯 Ш い な L お 世 Ŧi. る カン T 帯 IH # X 3 年 い 九 ٤ 来 带 人 後 企 る 数

0 夏 0 条件と生業 p は 0 すく農業 凉 町 歩 L 1 余 が \$ 冬 15 あ は 业 0 る 展 厳 寒 開 村 Ш L 3 林 す は は 1 原 る 富 土 厳 野 王 Щ 村 地 Ш L で で、 東南 柄 いっ あ である。 る。 麓及 2 面 0 積 ま た標 び愛 上 0 こうし 大部 天気 鷹 高 分 Ш が た 従三 高 \$ 北 地 変 麓 兀

ま

で

田

は

まっ

たく無く、

耕地はすべて畑である。

気象条件に加え、 水利に恵まれないため一九五〇 年代

では、 八八六 八七五(明治八)年の「小区表編 農四一八人、 (明治十九)年の 僧二人、 「地誌 雑業四人と記され 取調草案」 立調 査」の職 では てい 民 分表 業 る。

た後 炭 カン 0 生育によいとされており、 畑 なりあっ の資料では愛鷹山 材木を産 で は 麦、 たと推定され、 玉蜀黍、 養蚕 Щ に 茶などを生産 励 麓は植林に適し、 少なくとも明治 h でいい Щ 林の材木や炭の たと考えられ L 山 ことに杉樹 期 からは 0 村財 収入は る。 椏 政 ま

15 材

地味に適し北海道産に譲らず」と特筆し

農業及び茶、

蚕

炭

٤

あり、

物産として茶、

な

カン

0

た

炭

繭、

玉蜀黍を挙げた上、

「玉蜀黍の如き実

てい

る。

里 た わ 木道(十里木越え、 ま けでは た Ш 村 とい なかった。 0 ても、 十里木街道)があって、 交通 外 0 部 面ではすでに古代 カン らまっ たく孤立 須山 してい カン の集 ら十

は

む

しろゆ

とり

が

あ

0

たようである。

富士 落を通って富士 南の葛山 後半には富士山 登山道も [や佐野に下る道が通じていた。 開 郡 カン れ 浅間信仰が盛んとなり、 へ通じており、 てい たため、 須山 単 に Ш の集落 間 後に その 0 僻 カン 須 上 らはま 地 では Ш 中 口

世

た

培も増 が 品 として玉蜀黍、 カン 合である。 としている。 として養蚕の発展を記し、 二二(大正十 連年並んでい として伸びてきているとい に、 大正期の事務報告はほとんど判で押したような文言 大正 加しつつある、 こうしてみると、 期に入っ 一)年からは甘藷 林業では杉、 大小麦を栽培するが、 て、耕地はすべて畑であり、 て、 と記され 繭 竹行李、 檜の植林をなす、 える。 0 竹行李、 明治期以 名も挙げ、 てい 木炭の生産 る。 近年 来の 甘 そし 諸 さら -は陸稲 玉 などが という具 そこに主 蜀 黍 \$ 特 あ 副 0 のほ 栽 九 産 る

当時 L の 一 カン し主食は陸稲と麦を合わせても四〇〇 四〇〇人余の人口からみるとかなり不足して 石 程度、



写真 3-65 須山小学校

現 関係を深めてい ったようであ お

主として御殿場に玉蜀黍を売って白米を買

ハって

カン

に

次第に裾野駅を中心とした裾野地域との経済的

1

た。 り

竹行李、

炭

材木などか

らの

金収入は

肥料 0 13

P か

日常品 繭

0

購入代金として貴重

であ

つ

こうした交易のなかで、

従来

からの御殿場や大宮の

ほ た

学 校 山村にも字原に求放舎が創立 八七二(明治五)年に学 制 から され 頒 布

る。

創

ż

れ

須 立

となっ 名も須山学校と改められ開校式が行 明らかでは 翌八七(明治二十)年に須山学校は嶽南小学校第一分校 年代は一八七三か七四(明治六か七)年であろうとされ (明治十九)年、 七八か七 (明治十四 ない。 九(明治十一か十二)年に火災に 年に 県布達によって学区 当初 あらため から新築の校舎であ て現在 が大幅に統合され 地 わ れ 15 た。 新 築さ 遭 0 八 た れ が、 八六 校 八

村 Ш 年に富岡村と組合村を設立したのをうけて、 行政村としての須山 村組 が 解消されたため 八 合立須山尋常小学校と改称した。 八九(明治二十二)年の 村が誕生、 八九九(明治三十二)年に 市 制町村制 一八九〇(明治二十三) その 0 施 富岡 行に 後 須 Ш 村 ょ 組 村 合 須

等科が認可され、須山尋常高等小学校と称したが、一立須山尋常小学校となる。一九〇二(明治三十五)年高

令 学校令の 新 15 0 裾 和三十二)年 わ 3 尋常小学校と改められた。 九〇八(明治四十一)年に高等科を廃して須山 野 市 6の廃止にともない須山村立須山小学校と改称 れ 校舎を落成 至 せ たが、 制 町 て須山 施 立 行に 施行にともない駿東郡須山村 戦後 [村立須山中学校を開校した。 Ш に より、 心してい 小学校となり、 須 の一九四七 Ш 村 裾野市立須山小学校となって現在 る。 から 裾 野 九四 一九一〇(明治四十三) (昭和二十二)年、 一町と合併したのをうけ、 一九七一(昭 (昭和十六)年、 国民学校と改 一九五七 和四十六)年 国民学校 村立須 玉 车 留 称 山 あ 民 に

聯合村会の 明だが、 六(明治十九)年に認可を受けてい な お + + 諮問 里 单 木に十 木分校につい が 一八八五(明治十八)年に出され、 里木教場を設置する旨の ての資料 る。 が乏しく詳 その後、 臨時教 細 十里 は 翌 育 不

> 木分校として正式に認可されるのは、 (昭和二十三)年であ る。 p が て、 九六六 戦 後後 の一 昭 九四 和 四 + 八

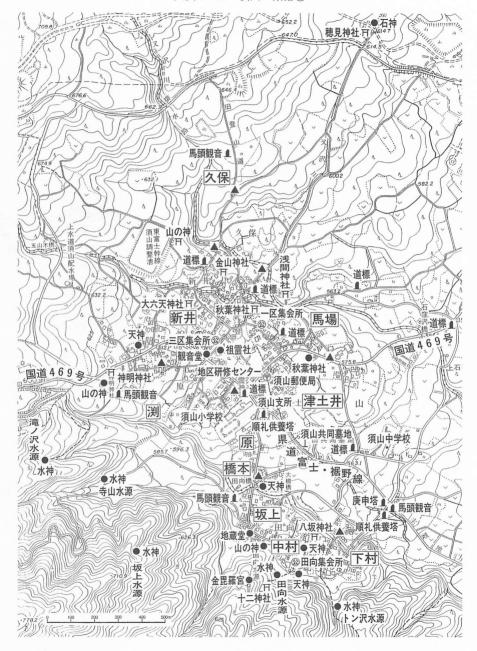
数二四 よれ 後 であり、それは一九一五(大正四)年に一〇〇次でとな 童数二二五人、 って以降、 一)年に十里木分校は本校へと統合される。 の一九五〇(昭和二十 『裾野市立須山小学校創立百周年記念誌 ば 八人、 変わらない就学率であった。 九〇七(明治四十)年には学級数二、 二〇年後の一九七〇(昭和四 就学率は九六・九八ジュとかなりの 五)年には学級数六、 ちなみに、 + すや 五. 就学 就学 まり 年 高 児 に 戦 12 児 は 童

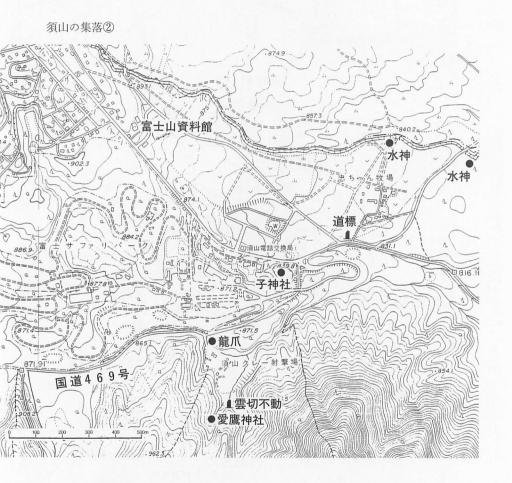
九(明 での農閑期で、 てたという。 材の一部を村からうけて、 る。 夜学は、一九一〇年代頃から盛んになっ 当初は個人の家を借りて行わ 治四 十二)年小学校新校舎建築 夜学の期間 小学校の教師が交代で指導した。小学 は 上村では観音堂の 秋彼岸過ぎから春彼岸 れて が 始 5 ま たが、一 0 たとい 側 た が頃、 へと建 九〇 われ 用 ま

学級数六、

就学児童数二〇二人となってい

図表 3-67 須山の集落(1)





図表 3-67



裾

野

地

域には

あまり影響を及ぼさなか

2

たと思われる。

激減

している。

まれ 校の先生は、 ていたという。 青年たちに「村の先生」と呼ばれて親し

米騒動と須山 0 一九一八(大正七)年、米価暴騰をき かけに全国的に発生した米騒動は、

当局 9 に 接 価 L して、騒動の波及をしのいだ。 分配された下賜金六三円四一銭を一一三人に配った 郡役所から購入したりして村民に配給した。 暴騰は響いた。 か は、 し田が無く米がほとんどとれない須山村には、 外米を須山農会に購入させたり、 村民の間に不穏の空気も生じた。 あるいは直 また村 村 米

第 三節 地域社会と生活

(昭和三十五)年と一九九〇年とを比較 **-**農業センサス」によれば、一九六○

すると次のようになる。一九六○年に総戸数二六四の

から刈ってきては売る零細なものだった。しかし、

戦

戸数二九四のうち総農家数が一七四、 が一〇 二種兼業が七八であった。しかし、一 うち総農家数が一九二、うち第 第二種兼業が一五八戸と、 種兼業が一一 農業主体の農家が うち第一 九九〇年に 種兼業 四、第 は総総

て、工芸作物が七・七から一三・二いりに、 2 が三九・三から四・六いかっに、 「かっに、麦類・雑穀が八三·八から四·八いっに、 作物類別収穫面積では、 稲以外はいずれも大きく減っている。 豆類が三・七から〇ピッに 稲が二九・六から二四・二 野 それに対し 菜類 いも類 が

で栽培されている芝は、 ことと無関係ではあるまい。 を専業にする農家 よっては急増しているものもある。 炒々、飼育用作物が五・○から五九・○☆々にと、作物に 一・八から一四・九分に、花き類が〇から一一五〇・五 から 九九〇年には かつては野芝といって大野原 ことに、 これは、 四戸となって 現在多くの農家 施設園芸 る

位.

は

神

社

を

ま 駿

0 東

る単

位

٤

\$

な

T

5

る。

九

刀口

大正

年

0

郡

須

Ш

村 3

誌

に 0

n

内

は

村

郷

下

村

15

ò

言

方

\$

あ

る

ま

た

X

Ĭ

 $\overline{\mathbb{X}}$

に

分

カン

れ

行

政

上

3

15

几

小 よ

字

15 ば

X

割 村

0

3

n

\$ 中

原

郷

淵

郷 郷

久保郷

٤

う各字を単

位とした呼

芝生 水 お つ 0 た \mathbb{H} 畑 15 芝を \$ は ح n 減 0 から 植 反 政 地 須 え 域 T 策 Ш ば 0 富 VI 景 よ カコ 観 \pm る 9 芝 米作 で 0 なく 部 لح 転 とも 富 L 用 T 出 で な 地 出 ___ 2 X 荷 九 T 六 す に ま る い Fi. で広 よう る。 年 谊 ま に カン り な 3

井い

後

0

ゴ

ル

フ

場

開

発

P

道

路

工

事

15

よ

る

需

要

が

急

速

に

伸

U

7

لح に から 言 ほ は 0 戸 ٤ ま 農家 ٤ 2 h たく ど 0 無 0 家 行 養 KC 等 蚕 わ C 餇 n が なく 行 いい わ わ れ な れ ま T 0 T た 1 た。 た 5 たも が 九 六〇 0 九 0) 年 九 現 0 车 九 在 に 九 で O は は 年 兀 4

> 15 が、

す

る字のことをさ

4

豚

とも

15 を

 \equiv

かる

3

Ł

0

言

弱

15

わ

とり

は

_ 年

六

戸

3

Ł

な 常 あ あ

お

家

畜

家

禽

餇

育

L

てい

る

農家

は

九

六

0

に

は

る。 T

ま 区内 n る字 部 の 役区 放ける 郷 E 組 n 現 0 在 T 関 5 係 る。 須 を表 Ш 図 0 L 表 自 た 治 3 \$ 会 1 0 68 は だ は 匹 が 0 2 0 ح 0 X れ 中 15 3 分 に 含 カン 0

> 坂かした 3 5 X . ると 現 新き n から 中村なかむら る 井 在 原 上刻 あ 0 が、 で 組 る。 あ 新らい 下もむら は 戸 る。 数 1 下た П 0 ま な . + 近 覧 増 . た わ 淵ま ち 隣 板 加 里 木 を に 几 0 横丁・ 組 よ で 小 あ 字 X す 0 単 T る。 は が 原上され 久 組 位 保 機 現 数 久 保 能 から 在 原になった て 增 0 馬場ばんば X T え 組 ま た に . から 1 坂かうえ る。 組 ほ 田 た H \$ ぼ 向

生活 Z 0 中 0 近 で X. 助 隣 で 0 1+ は こと 合 組 を 0 モ とをさ \exists 1) 最 して L 寄 7 呼 向 Si で は E 水 から 源 を あ る

所 有 る。 X. 林 有 須 共 Ш 0 E す 3 \mathbb{H} 同 有 15 単 は 向 義 地 で 位 で 0 は ٤ 場 合 郷 郷 L 0 ほ は T は 各字 郷 X お カン 共 に 0 \$ をさすこと ことをさ に 有 J' 使 P ウ 郷 わ 郷 れ 林 7 L T 呼 4 T 1 1 ば あ 1 る。 3 る。 れ り 共 郷 る 百 坂 L 共 C X F. 有 Ш 分 カン L は 林 から 郷 X を あ

図表3-68 須川の内部区分

凶衣 3 - 08 須田の内部区分				
区	旧区分	字 (郷)	組	サイトヤキ
須	上	久 保	久保上久保下	0
		馬場	馬場	
— 山	村	津土井	津土井上 津土井中 津土井下 津土井東	0
須	Ш	坂 上	橋 本 坂上上 坂上下	0
Щ	向	中 村	中村上中村下	0
=	村	下村	下村上 下村下	
須	上	淵	淵 横丁南 横丁北	0
Щ		新 井	新 井 上 新 井 中 新 井 下	0
Ξ	村	原	原通り原原下	0
須山四	十里木村	十里木	十里木	0
別荘町内会			1~5組	
富士急			1~2組	

市 区分だと考えられる。 あ るが、 域 では 現在の 須 Ш 0) ほ ような区になる以前の字を単位とした カン に下 和田でも使われている区分で

方

から

あ り、

その

郷名が石造物にも散見される。

郷 は 名、 の支部長各 各区一名。 体育指導員とスポー 婦人会が会長一名・副会長二名・一~三区 二名 • 四区の 班長 一名。 体育委員が各区二

副区 須山 長が各一名、 X の役職には、 各組から組長が一名。 次のようなものが 交通指導員が ある。 X 長

> 長と 長が一

班

長各一名。

消 防団

須山

分団

「が分団」

長

副

名。

火防隊が隊長

副隊長各

一名、

各区かり

ら部 分

ツ指導員が各二名。

青年会会

長

·部長各一名、

班長三名·本部部長一名。

このほか、

748

良区 子 話 供 人 など 氏 子 自 0 総代 役員 主 防 災会、 が 0) 役 1 職 る。 老人会、 が ま あ た る。 農業委員、 神 社 関 係 で 須 は 祖 Ш 霊 土 社 地 世 改

須

Ш

0

役

職

0

中

で

特筆

す

1º

きも

0

は

共

有

関

係

0

を

15

演 \$

委員 評 習 ± 監 は 0 場 演習場対策に で 議 員 理 須 あ 名 名 る。 事 Ш 六名、 地 (うち) 長 委員 す X な 対 副 は、 わ 巡 策委員 名 理 七 視 ち 事 が 委員 名 員四名となっ 代 長 会で 財 1 表 . 長 監 会計 る 団 が、 事)、 一名 あ 法 る。 人 須· 理 2 事 顧 てい 須山 n 副委員 Ш が 問 振 3 各 几 0 る。 興 振 名 長二名、 名 役員 会と東富 興 また、 会 参与 は 理 (後 事 四 述 東富 **₹** 会計 几 ±: 名 名

ほ か 名 が 選 出 3 n て、 そ 0 任 に あ た 2 T る。 ま

X

0

各

区

カン

3

X

長

0

ほ

カン

匹

名ず

つ、

几

X

カン

3

は

X

長

Ł

資

本

0)

積

いみ立て

などに当てたと

村

0

入り 5 理共運有 . 堂等 党方法 ケカ 明 尾 治 0 五さ 地 本地地 券交 カン 0 て、 0 付 て、 . 沢かり 須 0 愛 際 Ш ٤ 村 鷹 愛鷹 Ш 富 村 麓 と富 土 Ш 0) 入会地 Ш 麓 麓 0 士: 字 Ш 0 鳴るされ 字 が 麓 藤也 広 12 原 が 大おおされ た つ T が

> 木質 れ 塚が 八 た。 七 • 字 六(明治: 永なが 鳴 峰和 沢 0 Ŧ. 八 九年、 0 カン 町 所 歩と字 が 官林 七 名 藤 15 0 編 原 還 六〇 入 3 禄 町 士 n 族 歩 た。 で لح そ あ 払 0 下 官 ح げ 林 れ 3 から

三 この 現在 る管 全戸 て小学校 須 呼 との 数 共 共 \$ Ш 理 称 有 継続、 運 有 村 組 ٤ を表すと 建築資 営 合村 なっ とい は が買い を行うように L T うの 二千 てい を解消 戻し 金 同 1 る は 町 時 P る。 て 道 云百 に L 歩 を 1: 路 + 十三戸 一三戸 超 改 な 0 共 里 八 末 え を 有 良 2 九 機に、 たと 費 た。 九(明 財 を 共有」 産 除 0 共 う。 5 2 を い 治三十二) 総代 管 た 有 わ 税 れ 理 77 納 を れ 0 地 とし 基 運 時 T 原 入資 営 形 本 協 0 1 年 す 金 須 る。 0 た 議 財 る あ 産 員 Ш 富 組 村 る。 が 百 ٤ に 税 t 織 0 +

< \$ え 3 2 多 百 十三 止 カン れ 8 T 0 るため 戸 た。 1 る 共有のうち三分の一を十 が、 そ に 0 個 た 字 め 人所 藤 原 有 九 とし 0 九 \equiv 年 たたた 七 + 九 町 8 里 里 歩 K 木 木 余 K で 転 りを 売す 分け は 所 転 る た と伝 有 売 \$ 0



写真3-66 須山地区研修センター

その後植林の管理のために個人に分割するなどして、 代表者をたてて管理し保有することとなった。 しかし、

> のに、 有地も各所にある。 X 共 どという言い方で、 15 うのは百十三戸共有のことで、 が管理運営する共有地、 一十三戸共有をはじめとして、 地が錯綜してい 大共有・郷共有・組共有などが た共有 地である。 何 る。 人かの仲間と共同 その これらの 組共有というの ほ カン 郷共有というのは各 須山 共 に 有 ある。 地を呼 にはさまざま で管理する ○○人持ちな は 組 ZI が 分 単位 け 共 な る

おもな活動である(『須山の民俗』)。 十二月十七日の大沢入と堂ケ尾の 月二十日、 行造林にしている。 0 雜 百 九五 木林として活用され 十三戸共有 山回り八名の役員に任されている。 七(昭和三十二)年、 年三回の境界調査、 は、 その管理運営は、 九 てい 五〇年 須山 たが、 + 以前 村と富岡 Ш 月中 は植 現 0 神 総代一 在 旬 は 林 の祭りなどが 村とが 植林 地と炭 の下草刈 名 総会は 地 裾野 協 を県 焼 り 議

町と合併し、 村有財産は裾野町有となってしまった。

現 に

在 カン

では愛鷹山

日の海抜

〇〇〇といから一

四〇〇以付近

けて六五〇町歩ほど残っているのみだという。

C

あ

ることが

わ

大入会であっ

たところで、

秣

茅 須

芝の

採草

地

٤

ところで、

富

士: か

Ш る。

麓

0)

大野

原

は

Ш

村

ほ

カン

Ŧi.

カン

が 村 町 員 有 有財 長 発 財 の交替 足 産 産が L 返 た。 戸 還 処理 返還 0 返還さ もあってようやく須山 権 須山 利 運 委員会を作 者 れ 動をした。 振 だ 興 これ け 会は、 では を つ なく、 機 て、 カン 0 15 九六二(昭 T 財 須 0 願 須 0 团 百 Ш 法 い 選 十三戸 人須 が 出 地 和三十七)年 X. カコ 0 な Ш 町 12 議 共 振 会議

須 L

Ш カン

に

て重 後

葽 水ケ

な水

源 に

で 続

あ

0

た

た

め

須

Ш

で

は

村

その とっ

塚

く旧

村

有

地

 $\overline{\bigcirc}$

Ŏ

町

歩

は

0

雜

木

林

で

あ

つ

た。

八

九〇

(明治二十

年

に

御

つ 者とするも 上 た。 住 須 す Щ る ので、 須 振 興 Ш 会 ムは、 新戸 区 カン 教育 や十 3 四 里木 X 産 まで全戸 業 0 住民 文化 もその 0 世 0 帯 振 主 興 対象とな を権 を 図 る 利

七三六

反五畝

が接収

され

た。

このとき村内

の全農

ような

IH

年 有 興

以

は れ 会 旧

0

名に が あ 1: は 各区区 須 山 長 振 が、 興 会 評 議 が 須山 員 のうち四 自治会と一体化 名には 各区 た組 副 X 織 長

た

X

0

寄

付

行為を目

的

٤

L

T

2

る。

役

職

では、

参与

四

耕

家三九戸を数えた。

九

Ŧ.

二(昭

和二十

七)年

K

講

和

3 条

薪 村 和 約 T n 東富 三十二)年 るようにな から 士: 演 習 15 り 場 T 対 X 策 同 IJ 年 協 力 15 議 駐 演習! 会 留軍 から 場 発足 一が撤 地 域 L 退 \equiv た カン カン 町 九 わ 村 Ŧi. 0 七 T 用 よ

一省となったが、 とな は 借 富士 9 て草 つ 裾野 たため 刈 陸 りをし 草刈 帝室御 軍 -演習場となっ 9 てい はそのまま続け 料管理 た。 局 たためその 九 の管轄とな 一二(明 3 れ 治 所 几 轄 + は 御 Ŧī. 陸 料

年に

地 料 炭

を 地 用

軍

演習場 再 た が、 九 U 地 四 接収され 域 꽢 Ŧi. が 匹 昭 六 拡大され、 和 年 てしまっ 二十 15 は 年 T それ 敗 X た。 戦 IJ によって須山 K カ ょ 軍 九四 0 0) 7 進 九 陸 駐 昭 軍 に 和二十 村 よ か では 3 0 演 解 ·四)年 習場 放 地 3

数二 地 皆 四 無となる農家 戸 のうち、 影響を受ける農家 二〇戸、 農業経 営の 成 立 Ŧi. な うち 農

締結され、 H 米 行政協定のもとで演習 場 が 使

自 昭

習場

は

日

に

返還さ

れ

陸上自

衛隊が管理することと

な

2

た

大野 本

原

٤

い

う原

野

は

演習場として接収

3

れ

社

神社

付

近

0

田

向

水

源

を

村

から

1

ン沢

〒

村

水

を利

用

L

てきた。

ま

た上

村

C

は 下

原

久保

と馬

場

そ 源

年に 衛 隊 カン は n 0 新安保 た。 演 習 場となっ 九六八(昭 条約によって再 た \$ 和四十三)年になって東富 0 0 U 7 X 九六〇 IJ 力軍 昭 の管轄下 和三十 士: 五 演 に

げ 市 て以 2 をうけ、 闘 町 来 い 御 が 続 地 殿場 ひとまず 域 1 住 てきた 芾 民 裾野市 が が、 Ó 2 X 0 切 使 小山町) 九九一 5 用 をみ 権 を取 の五六〇 年三月二十· り戻すために、 町 步 九 0 日 払下 長

須

山

に

は

Ш

が

あ

0

な

が

5

火

Ш

0

砂

浸透し h C 0 ため、 あ 水源地 T 0 た井 て伏流水となってい た。 生活 の難設の確保 当 戸 の水とが 初 用 水の は 礫 愛鷹 確 土 頼り 保は 壌 Щ 0 で ることはすでに述べた。 1= 須 0 8 あ Ш L に ぼ 0 で たが、 水 0 0 水と、 必 が 要不 地 明 表を流 治以 可欠な わ ず 降 カン れ ず、 に 問 15 そ 水 題 掘

> 図表3 67

源 ま (当初 れ 須 てい Ш は橋本・ 0 る方で 中 では、 あ 坂 上下 2 田 た。 向 組 は愛鷹山 が 明 ナゴ 別治以 ヤマ 前 0 水源に カン 水源) 3 を 近く 坂 上 中 水 から 村 坂 に から は

上

水

恵

+

井 れ に津土 0 部が滝 井 0 ノ沢 部 水 が 寺山 源 や 小山 水源 田 を 土 水 淵 源を利 と新 井と 用し 原 て 津 1

水 カン 2 富 源 れ が 士 3 涸 は Ш れ 麓 すべて愛鷹 たた 0 Ш め上 口 に 流に移 久保 Ш 0 0 L 動 ぼ ウド は 0 水で 沢 L た 水 が 源 あ が 2 とも た あ り が、 に ح 水 下 神 流 0 を 0 ほ

なされ いつっ 不 源 5 足となるため、 0 てい ていたとい 水 近 量 隣 る。 は 0 必ず 家 また、 次 わ が L れ 利 水 \$ る(『須 源 豊富では 用してい 久保と馬場の 0 移 Ш 動 0 た。 なく、 P 民俗』)。 村 境に二つ 内 L 冬の カン 0 戸 L 渴 数 ح 水 0 0 井 調 期 n 整 3 に 戸 は から 0 から

n 源

は

水源地にまつられ

た数々の水神が物語

ってい

る

0

確

保

と水道

を敷設する努力を繰

り返り

してきた。

そ

水 水 あ ま



写真 3-67 水ケ塚水源の隧道

こに で、 冬は 村 始まっ 合に あ 歩 F. 水ケ塚黒塚 る。 水源碑を建立した。 流 水ケ塚に隧道を掘 水源 渴 0 加 ま た。 入す 水が 水 たこ 涵 ケ 塚 養林 こ る。 ひどく、 水 れ n カン 利 を機 及保 3 翌 が 組 完 引 合と改 に 水 0 成 水することとし、 九 て水源 の年に 施 碑 二七 した 設 飲 15 称さ は ヲ実 料 0 留 は久保 保存貯水溜 水 から 和 現 水ケ塚 れ 水 三年、 た 利 九 テ が 権 水 二町 飲 組 캎 でを造 弁当 料 合 车 礎 昭 歩黒 は ヲ カコ 水 和 水 場 須 古 3 七 塚三 利 I. 水 年 2 村 事 権

を引い

0

久保

を除く上

この各組

で 0

あ

り

町

め

れ

を買

取

T

水 藤 あ 0

源地

とその

涵 所

養林

0 で

保 0 あ

を 1= 2

L た

が 0 組 0

れ

3

0

源 水 Ш

が は 麓

あ

る字

原

は

村 0 源

0

有

地

あ

この て富

湧 水

境が

沢され 黒塚

り

そ 他

水が

ケカ

に

た れ

よ

土

0

麓

弁当場

に は

湧水

が 塚か

発見さ

た。

その後、

村をあげて水を引く工

事が

行

わ

れ 確

九

(明治四 た

[十三]

年に

水

路

が 村 カン

開

設され

た

ح

0

に K

村

部

織 から

た。

L

2

後戸

数

0 口

增 年 時

15 上 水

よ

0 水

て再 利

U が

水 組 が

不足 され

とくに一

九二六

(大正十

Ħ. 加

年

上 ٤

補助 東富士 脈 九 習場として 地六心の寄付を受け 八)年に 水ケ塚 を 昭 掘 を受けて配水 和 演習 0 当てて翌年 は 水源地 弁当 場 几 簡 地区 易 年 場 水 水 から 水 設 淵 道 開 接収 道 源 備 0 0 T 0 田 施 I 認 用 水 され 水道 設整備 事 可 沢 源 を Ш を受け れ 地 る は 行 流 事業の を 0 に S 須 域 確 戦 あ た。 山 地 保 た 後 下 つ 九 そして一 묽 環として て T 五. 并戸 八 X 三(昭 0 個 IJ ٤ 力 15 九 玉 軍 和 0) 水 Ŧi. 庫 + 演

T 水

1 に 終

止 市 和

符 0

打 水道

た n 須 山 た。

現 水 場 <

在

田 向 成 飲

0

留

四 上 が

十二)年、

同 配 U

淵

料

から 完 に

\$

各

水 水 用

源 との 深井 さら

0 水 長 戸 に

は 1 が

防 闘 掘 九 六七

火用水として小学校や公民館

など

0

貯



図表 3-70 須山口神主と御師の家

1	渡辺隼人(旧)	7	杉山三郎太夫
2	渡辺対馬正	8	杉山大官坊
3	杉山長太夫	9	土屋平太夫
4	杉山幸太夫	10	土屋半太夫
5	土屋新井太夫	11	渡辺隼人
6	渡辺善太夫	12	土屋仙太夫

山街登道 灌 溉 世帯道 用 水 P 簡易 県道· 差 点に 水道とし 富 あ 士 る道 裾 て活 野 標に 用さ 線 E は 玉 れ 道 「すその三 四

交

水槽 원 カン n T 活 か 3 れ 水 ケ 塚 弁当 [六九号] 場 水 源 里 0 0 平

水

3 すなわ 人里 道 + 雑穀を主とした畑作や養蚕、 古くから街道の交差点であることは今も変わりが \$ 里 離 末 印 街 ち 野 れた村であるという印 地 まで約 道 近 まで 富士 などで ハキロメ 約 登 和 四キロメ Ш 田 あ 0) 道 まででも る 距 『駿 離 御 御 殿場 に 東郡 象は あ 殿 林業や炭焼き、 四・四キロメ るということで 場まで 街 須 道 否めな Ш 村 + 約一一一十二十二八 :誌』)。 である。 里木道、 が、 農閑 人々 ここが 須 あ 駒門 余業 ない。 る。 は Ш

ごてんば二里八丁

じうりぎ一里半」とある。

須山

カン

り 市

れ

富 須 としての竹行李作りを専らの生業としてきた。し える。 山本村 士 登 山 道 も十里木も、 須 Ш 口 0 村として生活が成 むしろ街道筋 の村として、 り立ってきたと また かし

として整備され

た

木 15 0 至る古代 カン 道 ·里木道 3 に現現 須山 在でもよく使わ 本 0 あ 村に 東 る 海 1 道 抜 は十里木街道と呼ばれる道は、 けて 0 間 印 道 れ 野 で あ + 御 0 一般場を 里木 たと か 1 3 通 わ 西 り れ T は富士 足柄 1 十里 る。 峠

道筋

に

\$

々

な

施設

や

神仏

が

まつら

ń

てい

るこ

わ

カン

る。

馬 様

場は浅間

神社前に立

それ 至る。 へと至る富士信仰 山 T 勢子辻を通って愛鷹 富士 西 にとも 口 九九八年富士 ح • へと進め 須山 0) 市吉原に至る。 なっ 道 П は て富・ ば、 (南 富 の道であるともいえる。 口)をつなぎ、 富士宮市村 士 市 士: 山 Ш Ш に富士こども また、 周辺 登 Щ .麓の北 Ш の娯楽施設 口 勢子辻 0) 山* 「を経 側 さらに うち から 0 玉 大宮 カン T 西 を結ぶ交通 から 須 同 3 建設さ 愛鷹 現在この道 側 走 市 口 口 へとたど (表口)。 Щ 東 を離 П ٤

から

村

は、

火口 よって登山道がふさが に示したとおりで、 記述して に近世で述べ 富 を避ける登山道を開い 王 Щ おく。 登山 たが、 道にお 須山 村 1+ ここではその 内 る り、三二年間中絶 七〇七(宝永四) 須山 0 登 て再興した。 山 口 道 0 後 歴 0 経 史に 0 年 登 路 つい この登山 した後、 0 Щ は 宝永噴 道に 义 表 てはすで 0 3 宝永 火に い 道 1 69 7

をたどっ

う。

1

カン

一八八九(明治二十二)年には東海道線

(現御

間

には役行者が住んだと伝えられる火山

棚

から

あると記

浅間 ど馬 ここには競馬をした馬場や導者を乗せる馬の n ま 橋 にちなんだ地名も多く残る。 は で は _ 神社 九八三(昭和五十三)年 前 の又沢 Ш や用沢川を渡渉し に架けら また、 浅間 れ て登 神社 たもの 乗り場な Ш 前 道 で、 0

年 殿 前 L 恩場線) 車 15 だ に 馬 1 地 に 0 富士 0 元 便 廃 0 御 あ 有 れ Ш 殿場駅 り」という大標識を立てた。 T 志 登 が Ш < 0 旧道を修復 南表須山 開 そこで、一 業によって、 L 佐 九〇八(明 佐 野駅 須山 野 駅 よ 『静岡 前 0 口 治四 登 現 Ш Ш 頂 裾 新 + 道 野 報 七 は 駅

て、

完全に登山道は廃絶してしまった。

景がか 『市史』 師し K は 堂が 島ま 沿 道 74 尾科 屛び 0 - 三七五号)。 名 風き 神 所旧 社 岩岩 氷穴 跡として、 鈴 木 農 などを挙 地元須山でも、 場 . 佐野原神社 桃 げ 袁 た記 親 王 富士 事 0 を掲 佐さ 陵 野の • Щ 宗等 対爆気 載 強力」 祇 L た 法は

九一四(大正三)年の『駿東郡須山村 誌 には、 須

0

営業願

が数多く出されたという。

道 前

を抜けて富士

宮口登山道新六合に合流する。

また、

Ш う溶岩隧道 は二合八勺の地点)。 の三合目で御殿場 が 三丁、 から一合目までが二里五丁、 二合目から三合目までが三 が あ 2 て子安明神 口 その道筋には、 登山道と合流するとある(実際 から 一合目 ま 0 3 れ 合目 四 カン 丁とあ ら一合目まで に 胎 合 目 内 ٤ 0 1 に

三(大正十二)年の関 演習場の接収に されている。 しか よっ L 東大震災に T 登 山道が絶たれ、 九一二(明治四十 よっ て 御^お 胎な さら 五. 内ない 年 に が 崩 0 九二 壊 陸 軍

が、 は 戦後、 0 3 ことであ 登 水ケ塚、 水ケ塚 ようやく登山歩道として復活したの Щ 道を る。 まで 九五 カン ら御 お 四 およそたどる道筋が選ば 0 L 殿庭 X カン (昭和二十九)年に復興 間 L は自 を通り、 ح の登山 衛隊演習 宝 永火 歩 場を避け 道 П \$ 計 は 0 れ 須 西 た 画 Ш が 九 T 側 浅 あ 火 登 間 九 った 噴 七 口 Ш 神 火 壁 歩 社 年

か 0)



写真 3-68 須山浅間神社の祭り

郷

土

志

創

立

年 Ŧ.

月 を

は ま

不 0

詳

であ

る る。

が

富富

1

Ш

るとあ

ま

た

須

あ 口 村

るとしてい

八

七

Ŧi.

(明治 匹

年

郷 再

社 建

な

5 札

神

社

は

幡 る。 あ は、

神

社

となっ

てい

る。

な

お に 年

市

立

士

ノ下宮」

で

り

(大永四)

0

棟

から 南 Ш

資料 境内

館

は 札

大永年

間

棟

札 5

0

ほ

か

六

+ Ш

年

0

棟 に

が保管さ

れ 0

T

世

通

御

師

二人(うち

祝一

人

から る。

お

り、 近

名 を

主

を

は T

ľ 神 慶

8 主 長

主

開 八 0 8 大出まれたま 社 水ケ 間 登 神社 とその祭り Ш から 津っ 塚 相 道 ま 見ぬ 水 殿 0 から 神 参 命が 3 源 15 水 社 は 拝 神社 脈 れ 0 明 天津 天熊大人命 L をさ 1 T 細 T い 日 帳 たき火瓊 富 111 から富士登山 る n カン 士: た 0 チ カコ に 3 لح Щ ぼ (樋 ょ 々 で 1 登 つ 道 杵命、 れ T わ Ш あ ば を れ 道 5 る。 木る をする お < る 須 花はな 天津っ お 様 導者 0 Ш 開意 せ は 口 子 任彦火 耶次 0 ね が が 登 姫の が たどるも 早 L 々ほ Ш 命さ 習 < 0 者 をと 出で わ ば カン 田見命、 浅 は 3 れ ので、 間 で 開 る。 لح あ 浅 神 カン

勺

3

"

山

側 を て、

通 0

> 幕 場

御

胎 道

内

٤ が

九

九 カン

九年に

は 塚

下

Щ

歩道とし

御殿

合

カコ 4

n

な

Ш

カコ る 西 噴 3

塚

ま 登 り

で Щ

0 道

道 を 岩 П 登山

筋 1:

は

カン 0

T

て水ケ た。

塚 お

と出 須

火後 水ケ

どる道

な る百姓が その職に あ た り 浅間 神 社 0 神 事 0 主 宰 0

<

13 L は T カン 富 几 月初 役割 王 信 仰 申 をに 白 0 布 な 六月朔 教 0 てい 活 動 日 た や富士 (図表 + 登 3 月初申 Ш 0 69 先達(案内役) 白 に 祭りは、 行わわ n 古 E T

2 H に 1= 行 から b 現 n 在 T は 1 四 る。 月 十七七 現 在 日 本殿 前 0 日 0 西 曜 側 日 七十 15 あ る 相 月二十三 殿 15 は

> き 0

従

う

当

番

0

時

に

は

須山

「囃子

が太鼓などを手車に乗せて付

天 Ш 六 神 神 大正 社 社 力力 新 Ŧ. 井 口马 窪台 年 に 愛鷹 . 相 八 殿に 幡神 神 社(堂ケ 合祀され 社 7 里 尾 木 たと記 . 0 穂 各神 見 され 神 社 社 てい が、 (大野)。 るこ 九

神

から 坂

まつられ

てい 幡大神

る。

これは、

一神

社明

細

帳」に

第六

習場対策委員長・氏子総代などがそれ

ic

あたる

奇

演 X

1

大神

愛鷹大神

• 子安大神

疱

瘡守

護

とと関

わり

が

あると思われ

る

が

詳

細

は

不

明である。

と氏 X 祭祀当番 0 子総 X は 長 代 をつとめ が 務 0 め 区→三区 2 が 祭り てい 各役員 **→**二区 に る。 が 百 そ 席 四 0 す X 0 補佐 順 る。 は 氏 に 子 をする。 祭典委員 年ごとの輪 で あ るが、 長 四 公は当 月十 X 番 七 番 長 で

車 H

が は

番

区のみを巡行する。

十七日には浅間神社

での

0

春

祭り

で

前

日

0 十六

日

に

は宵

祭りが

行

わ

れ

Ш

神 15 供 事 奉する。 12 引き続 二区 き神 0 輿 当 (が当 番 番区 0 時 一を渡御 15 は H 向 L 囃 子 お 囃 子 が 神

長 神 . 須山 麒 0 振 お 興会役員 旅 所 は 当 • 番区 消 防隊長 四の役員 の家 火防 隊 で 長 区 東 長 副

が 後 数 0 か あ 所に る お 旅所と 氏子 神 輿が寄るよう調整する。 な 総代となっ り、 ここで昼食をとるため て神輿 渡御 氏子総代の家 を迎えること 大振 る舞 が 最

を安置す 生 に る 度の名誉なこととされ 庭先を清め、 祭場には る 盛 0 お 砂 旅 を 所では、 L T 四 神輿 方に

ると庭先で 練 り 盛 9 砂 を平 らに L 7 カコ 3 そ 0 上 に 鎮

竹を立て注

連縄

を張

り巡

こらし

T

お

神

齟

は

敷

12

入

主夫婦、 座する。 後 お 息子 囃子が囃し、 ここで神 夫婦、 主に 家 それを合図に次の 族などが参 よる神 事 が 拝 行 する。 わ れ お 旅所 簡単 お 旅 な へと出 所 饗応 0 当

X





写真 3-69 須山囃子と田向囃子

T

15

また

田

向

Щ

車 は 上 村

は

春と秋

0 0 Ш

一度曳

き

回さり

れ

飾 春

る K

は る。

桜

0

花

0

枝

を、 0

秋に

は

紅葉の枝を屋根にさ

L

台を

所有

T

た

村

古

いく

車 で

市立

富

士 向

Щ

箵

館

に保管され、

現在 が、 0

祭り専

用

1

ラ は

ッ

クで代用

L

坂かうえ が、 シ ギ が に 5 リ(車切)とい 須 囃子 シ (囃子)という。 年に る。 演目 = Щ 区 VE は、 ウ は 1 田 は P ず 残っ デ 向 ン 以 し保存会が結成され 'n 市内でもここ須 は T 下 も中 . P 11 0 い 須山 る t 通 保 絶 神 0) シ 0 L 存会が、 ٤ 輿 みで、 で = T 八渡御 田 ウ あ 向 デン 山 る。 た で 日と岩波、 の巡行中 貴重な民俗芸能とな が、 は 須 た。 . 九 山 調 ガ 七 ~ 囃 Щ ク 几 九七三(昭 二本松、 が 車 に . 子 昭 異な 囃 は 0 す 囃子 和 ク 깯 ると ズ 0 シ + をシ は シ ヤ 和 御 九 宿 ギ 1 四 0 3 年 サ IJ t + 7 0

発する。 最後に巡行を終えて神社に戻ると、 還御 0 神

事

が

行

わ

れ

る。

Ш

車

は

カン

つて

上

0

• 0

 \equiv

区

台

田

で

シ ズ

が

力

J'

7 4

ル

•

7 ズ

ツバ

+

シ

ギ

オンなどである。

楽器

Ш

天社

新

井)。愛鷹神

社

(堂ケ

尾

.

Ш

神

社

新

井

穂見

シ

t

1

ク

シ

.

シ

"

チ

3

X

で

神

興

一渡御

0

ハ

t ク

る

几 Ш クズ

シ

.

2

"

チ

3

7

1

.

1

t

ワ

タリ

で、

神

輿

渡

御

0

11 0

明

神

(同)

愛鷹大明神

(同)となってい

る(『市史』三

シ セ など t 3 ウ => デ で から ン あ 力 る。 J" 力 7 また 7 ル ク . ラ 田 7 シ 向 " 囃 バ 3 + ウ 子 デン は シ • 111 . シ サン チ + バ ギ ク IJ + ズ が シ • シ 1 サ • ナ 11 = 力

所 は は 太 では 手 車 丰 ンドウ(小太鼓)・オケドウ シ はなく、 ツヅミ + ギ 1) (鼓) • 笛 0 太鼓を持 何 曲 カン が 2 鉦。 て歩い 奏され、 カン 0 たとい 桶 て神 とくに 胴 ・オオド 興 う。 渡 才 御 オド ま 0 t= . ウ(大 ウの 折 お

旅 に

生

T その 2 る神 ほ 社 寺か は 0 須山 カン 1 IJ 0 てその でまつられる神社 (鍵取 たとい り)と呼 家 0 屋 ば 敷神 n てい る 0 で 家 あ 中 0 が で 管 一六 た \$ \$ 理 八六 0 を 力 ギ を 1

入るシ

+

ギ

ij

は

X

長

や氏子総代宅で特別に行われ

る。

目 れ

地

域

で

まつるように

な

0

わ

れ

る。

T から

(貞享

年

0 社

須

Ш

村

指

出

よ

ば

村

内に

天嶽寺

ね

権現のほ

カン

辻 帳に

堂

軒 れ

宮九社

があ

り

2

から

あ

り

御

師

の一人である土屋平太夫が発行

したも

内 • 子 訳 は富士山室丹生大明神 神 . Щ ノ神 八 幡(十里木新 金山 権現・ 田) 水神(大六天。 神

.

T村誌! Ŧi. が 号)。 不 15 明なも 現 よると、 在 0 0 神社 \$ 神明 5 K くつ あてることが 社 カン 淵 あ る。 + 下 できるも 社 2 T 田田 向)。大六 駿 東 0 郡 \$ 須 あ

神社 神社 (大野 富士 原)。 Щ 八 合目 幡 社 となってい 千 里 木 る 祖 霊 社 津 ± 井

神で、 ず いっ 確 E 2 たと推定され るが、 御胎内ととも 2 認 0 + 0 0 中で丹生 絵 里木の家々 きる。 これ から 描 また、 神社 る カン も古く に丹生明 「富士 n 7 7 0 持 か 子 みが 1 ち回 ら富士 る。 ノ神 Ш 神としてまつら 須 不 2 「る掛 は 山 明 登 で れ 現 口 在 け 略 15 Ш あ 絵図」 るが、 軸 は 道 須 15 15 里 は 関 Ш 木 れて 近世 口 わ 7 に 中 大黒 ま は 0 つら 15 宮 1 0 天と る 刷 0 深 社 銘 n 合 3

鎮

霊 2

神 0

社

風

神

Ш

神

(大沢入)。

愛鷹

神

社

堂

ケ

ほ

カン

須

Ш

全体

でま

つる神

社

とし

ては、

祖

社

C あ

あ

る。

では 神 氏 神 神 で る。 あ 下 田 0 を 荷 神 社 社 神とは 村で水神をまつっ 向 15 女 る 須 新 社 神 は は 金 ほ カン ととも 0 井 明 で Ш を 岳神社 氏 + Ш カン 言 神 神 は に 組 0 里木でそれ 津 と呼 社 神 原 社 では坂上で山之神社 1 に 各字 浅 と水神を、 難 重 と子神社 で ± は は 井では 淵 層 ば Ш 1 久保で、 的 れ で、 が、 神 郷 神 てい 社 T 社 K ぞれまつられ 秋葉神 第六天神社は などでまつる 各字 氏 とい いるも をまつっ 分 神 十二社 馬場では秋葉神社 る。 口 う地区へ が (郷)でまつる神として 窪 存在 社 0 を で T を、 を 神 全体 5 社 L T 神 全戶 + る。 T 新井と原で、 田 中 権 r J 社 村 里 向 5 で 現さ る。 ま る。 でまつ が ま で金毘羅宮を、 木 で た C 5 0 は これ h < る は 水 2 八 る は 0 神 さらに 坂 神 0 八 久保 八 神 浅 社 幡 3 田 ほ カン 宮 社 稲 カン 間 0) 幡 向 あ が

> 月 H

あ

習場 見神社 た際に 1 7 霊 は 2 三芦 神社は 大沢入の山 T 内 日 穂 風 天岳寺とい 無 穂見神 数 通 現 K 見神 に 15 ノ神 合祀 かけ 共有で十二月十七 過す 0 在 あ は愛 る石神にまつら 社 太平 石 地 社 され ての祭りである。 が るときに に (高尾さん)は 高 う寺 鷹 移 洋 散 ノ神と堂ケ尾の愛鷹 尾さん) 転 7 Ш 戦 乱してい 争 跡 中 した。 1 石をぶ る 0 0) 15 が、 田 戦 ま + 没 蚕 れ 向 たとい な 日 0 てい 蚕 E 林道終点に 者 3 影 0 お 月三 神社 影神 lをま もとは まつ け れ 石 ると願 たも わ た 神 干 などが 社 る。 神社は、 0 \$ れ は 隣接、 日 るため る。 0 0 0 0) まつら で で、 祭 5 印 蚕 晚 H あ 影 が 野 L 接収 E T カコ 神 5 叶 道 は ず うとい ら十二 社 れ 創 Ŧī. 0 る演 建さ ま 祖 峠 3 月 は れ T た \$ n Ŧī. 穂

れ 鎮 社 尾

百 る。

世 誉 上 末寺。 常誉上人に 須 人 Ш 開 に 0 寺 創 よ 年 は 0 よって再 T 月 晴 建 は (青) 立 不 3 詳 雲山天岳寺で浄 建され れ だ が、 七 たという(「寺院明細 九三 六三二(寛永九) (寛政 土宗芝 Ŧi. 年 增 年 K 寺 K 高 0



現在の観音堂と旧登山道 写真3 - 70

年 岳 その後、 に 寺は 九〇二(明治三十五)年に本堂が火災で焼失し、 今里 無檀となっ 0 浄土院に合併して廃寺となった。さらに、 八七一 た。 (明治四) そのため、 年 に 村 一八八二(明治十五) が神道に 転じ 現在 て天

十八日に念仏講の女性たちによって月並の観音講が、

で護摩相撲が奉納され

た。

現在、

観音堂では

毎

月

(『須山 音堂に難を逃 れ た仏像などが安置されてい るとい

主催 祷 放 月七 とい と馬 月六日に 0 う導者が乗馬したまま観音堂の前 音堂を遷して仏像をともに 道 あ が 0 法 沿 り 観音堂は現在新井にあるが、 行わ 印 日 う。 から放り出されるといわれ、 あ その間に堂ケ尾で護摩焚きをし、 1 げ が、 となっ に 観音堂は久保の宝永噴火後に れ 縁日 るなどの 須山に あ て青年 印 2 は旧 野 た た。 やってくる。 とい 行をする。 が 北畑・仁杉(以上 富士 暦 護摩: わ 八月七日だが、 峰 れ 札を配 る。 修行を終えた村 ま 法印 七日に観 0 明治以降 5 ここにはもと薬師堂 2 必ず下馬して通 を通過しようとする た。 一御殿 行は観音堂で二泊 そ 後に一月遅れ 開 音堂前 強 富士 0 に か 場 晚 飯 れた富士 Ш 市 に 0 登 薬師堂)を経 (富士宮 で護 は 握 Ш 青 9 に 摩 飯 て八 年 0 0 向 に 登 市 祈 12 九 0 を 観 Ш から か

1

1

丰 合

は 同

久保

馬

場 +

合

同)、 木

津

土

井

坂

上

方

新

井

1 村 ヤ

は

+

Ŧi.

日

朝

K

行

う。

サ

1

1

t

丰

は

道

祖 日

神

中

村 サ

下

淵

原

里

で

は

月

四

A

どが

あ

る

几 K 釈 H 泇 15 観 加 音 来 0 祭り 七 月二十 が そ 六 れ ぞ H n 15 盆 行 わ 施 餓 れ 鬼 T る 旧 暦 七 月二十

月 IH

千八

日に 月十

観

音

三月二十

日

に

弘 Ŧi.

法

大

師

几 観

月

八

H \equiv

0

竹

を立

て、

そ

0

周 原

り な どに K

葉 る。

P

正

古 る

5 心

ダ 柱

ル

7

P

人形

などを積

み重

ね 杉

ح

3 0

0 お

進 飾

備

暦

IE

八

日に

毘

沙門天、

月

日

に子

安

音

をまつる辻

や広

場、

Ш

ゴ

シ

ン

クと

呼

ば

れ

村 間 曆六 に 行事 0 な 観 音 月二 は 堂 上 村 田 兀 ٤ 向 \mathbb{H} 日 向 K 0 地 0 地 念仏 蔵堂を行事 蔵 0 講 祭り 中 から が ٤ 行 0 度に行き来するこ \$ わ 12 れ 行うた る。 な お め 上 年

月十

五. 村

日

が

地

蔵

0

念仏

講

で

番茶

前

に

大念仏

講

が

H

0

観音

堂に対して、

H

白

に

は

地

蔵

堂

から

あ

る。

毎

在

で

年輩

0

男性

0)

指

導で子供会

0

世 わ

話

人

などが

中

3 L か

0

T は

は子ども

や青年たちだけで行

れ れ 月 ボ

てい

たが、

現

小正 お ح 月 ŧ (若 Ī 月 須 0 0 から Ш サ 小 0 1 行 な 1 < 事 な t は 十 5 子ども 天神 そ 0 講 中 お \$ 心 子 15 な ども \$ 行 0 わ 相 12 れ 撲 るも は な

9

須

Ш

0

民俗』)。

神 に 奪 道 は L 終 T な 0 1 祖 7 神 2 ときに ٤ わ 合 シ T 刷 る。 0 前 行 た ン K 5 5 れ ح ボ 0 1 0 ただ ク は T 屋 た 0 後 が から い お 5 倒 九六〇年頃 け る。 札 を たご祝儀 を 中 れ ると、 して、 竹 子ども 学 串 生 15 を くまで たち は 団子を焼 他 は 才 2 0) + 天神 で が h 4 力 あ で ラ タ 各戸 週 講 5 る。 0) (親 T ゴ 間 0 方 資 に サ 以 お シ に Ź 金 配 飾 ン Ŀ. にする 1 9 ボ 前 道 を ヤ ク カン 祖 丰 燃 を

す は 一月中 天神 る が 幼 旬 講 稚 新年 園 に は \$ 各 児 とは 度に X カン 3 0 入園 子 中 月 学 供 初午 する 会ごとに 年 几 生 0 行 歳児たちも招待する。 ま 行 事 で 0 わ で 子ども れ あ 0 T 5 た る。 が、 た 5 現 が 田 向 在 加 は で



写真 3-71 田向の天神講

男子の先導で ず 分 カン (転出 れ 天神を屋敷神としてまつる手綱 順 12 + П 屋明正家の家々を、 0 「東風吹かば匂い て参拝する。 このとき、 おこせよ梅の花 子どもたちが三 拓史家 頭 土 である中学 屋 主な 公介 組 15

> 神社、 る相

旧 で

曆六月二十四

日

に 旧

向 六

0 月

地 蔵堂、 Ŧi.

七

月二

十五

\$

相

撲に 撲

2

てしまっ

たが、

カン つては

青年 15

主 0

催

す

あっ 変わ

た。

まず、

暦 \mathbb{H}

7

日

向 から

1

坂

日に祖霊社

(盆相撲)、

八月一

日に津土井の秋葉神社、

撲が多い ように れてい 家 と役割分担がされる。 中 までのすべてを、 をしてから会食をする。 前で全員が一口ずついただく。 きとて春を忘るな」と全員で歌を詠み、 市 0 学生の女子は食事作り、 天神」と一 域全体でも言えることだが、 屋敷神である天神にそれぞれ参拝 催 なっ たが、 土地柄である。 た。 世 現在では子供会の役員が 話 拝した後、 また 人である大人たちはその補佐 中学卒業の三年生の男女が 区 なお、 と三区 現在ではそのほとんどが子ど これらの準備 供物として供えた赤飯 男子が神事と余興 区と三区も では、 この後、 須山 も祭りの奉納相 してい 淵の菅沼富士 おもに カン 一人ずつ 3 集会所で余興 行事 同 指導 様 0 をする。 頭となっ 15 ずの進行 する 行 催 祠 「ナ 夫 わ



頼朝の井戸 写真 3-72

新 井 餅頼 無朝 0 が伝説と 第六 天神 社 狩 須 を Ш で子 15 ども たときの は 源ななも 相 頼よのよ 撲 伝 が 朝智 説 行 がき から わ 富 1 n \pm < T 0 0 1 裾 る。 カコ 残 野

3 で

れ

巻

ま T 1 3 た 3 (弁当場)、 1 姓 る。 田 頼朝 を下 向 地 0 名 根 賜 0 五.3 Ŀ 3 馬 では 色色 家など家に れ 0) 塚が 手 + た 綱を引 里 腰 木 1 切 0 塚 頼 まつ 手 5 などの 朝 綱 たとこと わ 并 家 戸、 3 塚名 伝 茶 かをも 承 御 カン 「などが 本陣 \$ 3 てなし あ 「手 P 米 あ 綱 とぎ た る。 Ł

在 カン 護

は

田

向

0

神 0

社 力 T

と地 士

蔵堂、 集

津

+ \$

井

0 だ

秋葉神

3 摩 \$

月

第 相

Н

曜 行 相

KC わ 撲 坂

新

井

の第六天神

九 月七

H

観 音 和

堂 \mathbb{H}

撲 素

で

れ

た。 から

須 ま

Щ 社

以 1=

外

0 0

印

野 ٤

P 15

下 う。

0

現

は る。 に 1 塚 わ 0 頼 る。 現 浅黄 巻狩 とき 裾 朝 在 水源 野 腰 地 0 0 塚 名で残 富 切 平 に 市 で 本 塚 塚 は 地 域 士: の — 陣 赤 を含む富 0 は に 五. 巻狩 塚 る。 を 色 つである弁当 張 青 頼 0 朝 ま 黒 は 塚 幡 塚 た米をと た 士 0 は を立 Ш 本 0 鑵 1 頼 陣 が Ш 子 てた をここ 朝 御 麓 Ш 九三(建久四) |場をさす 本 で大規模に KC 0 が だ 相 Ŧi. 陣 に 色, 0) 置い そ す 塚 が れ る لح 米 現 たが、 とき 行 年 5 が 1 在 白 わ Ŧi. b 15 11 場と 月 わ 塚 れ Ŧī. れ 八 た。 白 れ T 本 青 V H T 塚 い 地

に追わ れた獣たちが登ってこないように 塚 0 周 りに

十里木の集落の飲料水として長く利用されてきたが、 たと伝える塚である。 また十里木の 頼朝 井戸 けは、 堀

浮 伝 頼朝が か え る。 ぶという予兆伝 のどを潤すために盃で何杯も飲ん そのときに沈めた盃 承 が あ る。 が、 富士 0 ほ Щ カン 0 だ湧き水だと 田 噴火の 向 ic は 前 卷 に

に ところで、 十里木では新暦

狩

の折に亡くなった武士をまつったとされる石が芝畑

が た侍三人が、餅つきの最中に首をはねられて討たれ 家が火事になるといわれる。 と言い伝える。 汚れたので、 それ以来新暦の正月には餅をつかなく もし餅をつけば餅 幕末に江戸から逃げて の正 が 月には 赤くなる、 餅 をつ 0 カン な 1 餅 た

小正

月に餅を供える。

正

月に

餅

をつ

カン

な は

1 寸

という話

殿場市

印

野の勝間田一

族や富士市桑崎でも伝えら

なったという。

そのため新暦の正月に

子を供え、

T 御

る。

なお天岳寺跡の旧墓地には、

このとき首をは

ねら 養塔が残っている。 れ

参考文献

編さん室 須山の民俗 九九二年 -裾野市-』 静岡県教育委員会文化課県史

た武士をまつる 「殉難三士之墓」 と刻まれ た供

図表 3-71

下和田

第 節

2 3 km

下和田の位置

第一六章 和 田

地理的概要

七軒百姓の村

下も和か

田には、

七

軒百姓という草分け

下和 0 苗字 田 で は は これらの家々を初代の先祖として分家し 杉本姓三・杉山姓二・真田姓二である。 的 な特定の家の伝承が ある。その七

軒

た 0 だと言 い 伝 えらら れ T 5 る。

県道富士

地 裾野線からはその全容は望めない。 さを感じる気候 の集落である須山よりも 集落は愛鷹山麓 である。 の谷間に展開しており、 厳し 南に あ い りなが、 立 地 市域でもっとも

村が結束して生活を営んできた様子がうか 位 置 下和田は裾野市 の北西部に位置し、愛鷹山 がえる。

条件

15

あっ

て

5

夏でも涼

高

東側は富 0 主 峰 王 山 海 抜 麓地帯となってい 四五七·四以 の位牌岳を西 る。 東西 約 六 端

は大野原を隔てて御殿場市、 約二・八き以の広 さが 南は今里、 あ り 北 西 は位牌岳 は 須 Щ 東 Ш

南

北

部

0

幅

Ŧi.

トメルー

0

狭

長

な入谷

が

あ

り

そ

0

入

口

部

٤

佐

野

ま

高

0

٤

い

わ

れ

T

1

たつ

「駿

東

都

富

岡

村

誌

管

七

わ

地地 部 利 形 0 用 ح 稜 土 線 を 和 愛 境とし 鷹 田 JII に 0 て富 沿 Ш 0 麓 士 て、 側 市 に 奥 は 長が 行 泉が 佐さ き 町 野の کے 川 接 0 支流 L T 入 5 0 口 下 る

頂 Ш な 11 3 III 名 集 3 麓 畑 15 を 落 に 地 K 沿 大 から 2 から 0 規 散 形 0 た 模 T 在 成 北 亚 呼が な L 3 約 坦 子 住 れ T Ŧi. 地 い T = 字 0 に る。 1 地 い 0 下 浩 1 る。 和 近 タウ 成 0 から 年 集 愛 0 落 鷹 行 ン 集 落 ٤ わ Ш 0 ま 命 れ 0 麓 が 集 名 わ 裾 形 愛 落 3 0 部 成 れ 鷹 0 12 に 3 南 は T Ш れ 側 大蒜 15 地 T 胡 る わ 15 0 愛鷹 ず 山や る。 Ш カン 0

3 な ス 2 ギ 0 0 Ш とその T 頂 尾 . 根 い に Ł Ш 支流 は 地 る。 カン 急 1+ 丰 15 3 7 0 峻 に は 3 は 植 よ C に 除 林 0 位 下 ブ T L 牌 地 樹 和 ナ C 15 岳 を主 様 枝 田 あ 0 状 る JII 相 東 木 0 を呈 が に 直 とす 刻 下を 源 流 海 L ま る落葉広 抜 T れ 部 源 七00 た谷 0 い 流 とす る。 が 葉樹 かけ付 大部 る下 に 形 には、 成 3 林 近 分 和 れ 沢 は カン \mathbb{H}

> 林 は は

筋

カン

3

Ш

腹

に

カコ

け

て樹

齢

約

〇〇年

から

四〇〇年とい

た佐 しヘクタに 3 理 れ 四〇 る天 L 野 T も及び、 然杉 尺 JII 1 0 る 約 浅 0 朝 間 巨 学 日 神社 木 術 新 から 聞 参 0 境内奥に 林 考 静 滝 立 出 保 が L 支 護 あ T 局 林 り は 5 編 Ł る。 富品はおか L 銚ま 静 子になった T 出 そ 沼湖 村 0 津 自 広 大 営 呼 3 瀑 ば 林 百 は 布 署 れ 几 0 る

る。 3 る 分 地 開 黒 地 東 墾 ح ٤ 色 形 カン 0 雜 3 富 を れ 0 0 木 n 腐 L 地 1: 士 植 用き 林 T T X Ш 畑 沢され から お 土 麓 帯 混 地 から り Ш 地 ٤ 在 堆 は が、 帯 な 火 積 南 L に り T Ш 東 Ш は 麓 5 T 砂 15 その る。 を浸食 い 礫 向 下 るとこ 12 カン 和 他 厚 0 して く覆 は T 集 3 落 ス 傾 ギ 渓谷をな が 斜 ゎ 0 あ れ L 南 • た E る。 て、 C 1 起 佐 亚 丰 表 伏 L 野 0 坦 土 0 T JII 植 15 あ 5 カン

III あ る。 集 . 用 沢川 ま 落 た 愛鷹 の三 開 下 和 す 川 る Ш 田 に 地 は 挟 市 0 入谷 ま 域 海 れ 0 抜 た窪 は K 三 位 Ŧi. 須 地 置 Ш 0 に 15 1 次 あ 刀口 る。 高 和 この 所 H Ш 0 付 集 ような 近 佐 落 に 展 C

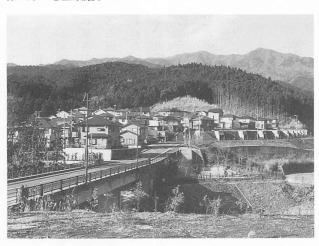


写真 3-73 呼子ニュータウン

寒く雪も 正 えるの 月 を である(杉 旧 降 暦 るの で行 って 山伴作 それ 1 たと 「覚書 までに 15 う。 Щ 一稼ぎを 旧 TF. 月 0 T 時 IE. 期 月 から

を 最 ま

迎

える。 鷹 地

高 L

洞

で あ

ること

寒冷 であ

な気候

あ

り

霧 所 ぼ

から 0 0

発生

しゃ

すく須

山

よりも濃霧 カコ 3

る。

冬

Ш

0

水 あ る上に

を水源として発達した集落

であ 5 る

ると

形

のことを、

市

域 で

は ホラ

(洞)と称

7

が、

愛 1

15

は

雪

から

降

ることも多く、

九

几

留

和

Ŧi.

年

で

あ また火山 流 Ш る す から で 13 大 どの 性 雨 そ 通 常 が 0 0 降 砂 水 源 は ると下 流 礫 流 水 部 から が 土 寒であるため、 あ は 流 豊富 2 和 れ たと 田 T Ш な 1 水量 0 な う。 上 い。 流 を たたた 下 部 用 沢 和 カン ら大石 え Ш \mathbb{H} T Ш \$ 佐 \$ る。 口 野 Ш 様

L

カン

\$

涸

県道富 下 n 域 Щ す た杉山である。 下 和 しても機能 な 集落 和 わ 田 氏 Ш 神 ち 田 ± 右岸 浅 0 0 中 間 裾 本 旧 心地となる向い 0 野 神 村 来 愛鷹 社 線 T 0 0 これ 集落は、 74 北 0 る。 側 西 Щ 東 3 麓 側 0 樫木坂が 谷に に ح 0 に背世 は 0 X お 一分は、 下 およるそ 新 越記 展 13 たに と富士 和 開 を越えたところに カン する上方、 新 田 造 匹 サ Ш 戸 成さ 見み と佐 つに 0 1 集 1 から れ 野 区 + あ た呼 佐 分さ る。 丰 Ш 野 0 大胡 単 挟 Ш れ 位 る ま 流

どる道

では

あるが、

須山

15 向

かうため須山

街道とも

5

0

下 1 和 タウン 0 中を通 が 広 から 過する道は、 0 ている。

落

5

線が れ 集落の中を通る道があった。 開 通する以前、 根方道あるいは根方街道と呼ば 愛鷹山の根方(麓)をた 現在の県道富士・裾野

葛山、 どの産物を三島や沼津 園で わ n 大畑を経て佐野川を渡り、 今里、 裾野市内では、 下和田、 須山へと通じる。 黄瀬川 出荷するための重要な道であ 佐野川に 右岸に 沿 沿って千 薪炭や材木な って富沢、 福気 桃記

二節 歴史概要 た

1 中 世 以前

本杉下遺跡 年にかけて、須山道から下和田の集 九六 五~七四 阳阳 和四十~四 + 九

> この のゴ ら縄文式土器が発見された。土器は縄文時代中期後半 \$ う。 へ入る道路付近で、縄文時代の土器 ので、 頃の人の生活の ルフ場へ至る道路工事中、 その後、 富士山 一九八〇(昭和五十五)年 麓 あ の海抜五〇〇以以上のところにも、 2 たことが確認され 地表下の深いところか が発見され 頃 4 里 地区 たと

後半、 時点では下和 (『市史』二 - 一九三号)。この文書によって、 厨のうち下和田等を孫の南 田 はすでに下和田が成立していたことがわかる。 中世の下和田 盛 継 三二七(嘉曆二)年、 0 妻聖 田は藍沢御厨に所属し、 褝 0 古代末までの歴史は、 もないので不明である。 所領 で あ 部行宗に 尼聖禅 0 た。 これ 南 譲 三嶋大社宮大司 部氏) り渡 より以後、 文書的 鎌倉時代の が L 藍沢 四 T な資料 この 世 1 近

紀 る 御

15

世 矢

まで

明ら

かでは

な

い

御

鳥見 ح

ح

れ

に

太

L

馬

から

百

兀

1

る

0

から

注

3

n

る。

n

は

農

耕

馬

٤

5

3

よ

0

は

槻

杉

雜

木 目

村

対

L

南

は

今

里

村

西

は

愛

鷹

Ш

15

連

な

0

色

村

長

Ш

高 沂 東 世 は に 大 野 お 5 原 て、 向 カン 下 15 和 駒ま 門かど 村 村 は 南な 御 北 殿 は 場 須 市 Ш に 村

以 泉 六 隆 (享保) 小 などと Ħ 原 元年 藩 接 領 して 以 降 1 再 七〇 た。 ZL 11 八(宝永 支配 田 原 は 藩 五 領 ٤ 年 六三二 な 以 降 0 T 幕 寛 明 領 永 治 九 維 七 年 新

寺 す 町 帳 天 を 免)。 保 1º Ł K 迎 えてて T 反 よ 郷 畑 四 n 帳 方 ば 畝 九 0 る。 Ł 九 II か 歩 村 15 石 3 村 0 高 余 内 九三 で 畑 高 Ш 勝 は あ 畑 石 5 田 る。 から 0 方 七 正 斗 は 村 保 町 で 新 六七 郷 0 Ŧi. 内訳 あ 帳 \mathbb{H} 反 る 九 七 . 3 畝 は 元禄 (延宝 畝 步 うち一 0 \mathbb{H} 郷 五. みで、 畑 帳 步 反 反別 年 八〇 あ 八 0 畝 る 他 __ 明 石 歩 八 余 は は 細

御

市

史

几

三号

あ

5

は 本 下 和 百 要 田 姓 村 七 東 村 11 西 域 百 15 は 姓 細 東 長 西 1 六 無 家数 田 間 Ħ. は • \equiv 南 名 一八軒 北二 主 • そ 0 間 村 0 内訳 足 で 軽

七

 $\overline{\bigcirc}$

竹 役 萱 米 Ŧi. などを 斗。 沼 年 賁 津 以 . 外 15 島 椚 15 炭 0 1+ P 送る 紙 カコ ぞを た 8 F. 0 納 \$ L 0) で T 小 あ

原 藩 が 買 1 Ŀ. げ T 5 る

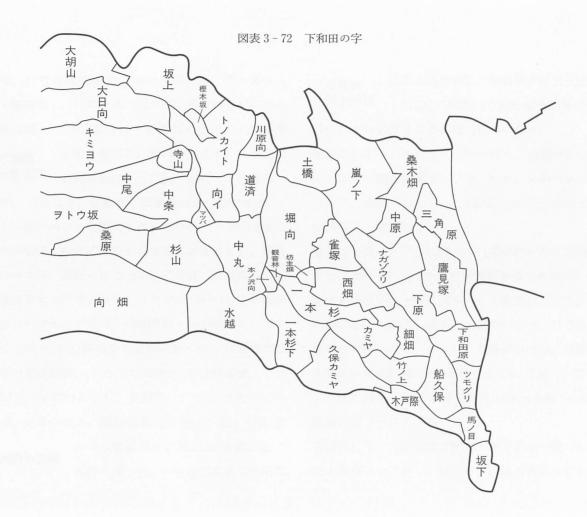
専んしゅ 社宮 愛宕 林 像 七 村 院と 三五 から 森 C を 内 本 神 K P \$ 採っ 尊 Ш 明 11 (享保二十) 之神 表 とす 狰 記 ている(延宝 浅 土 間 る。 宗 長 大六天などの 昌 年 無 . 愛鷹 すべ 寺 量 15 Ш 除 1 てこの 0 仙がん Ŧi. 地 寿 年 原 神 院は 石 慈 檀家 駿 小 を (芝増・ 八 源 ま 東 丽 半 寺 郡 0 0 が 上 から 0 F る。 ま あ 寺 和 用 る。 あ 0 末 田 り 材 3 村 を n 0 氏 明 7 冏 神 T 13 向 細 1 弥 和 カコ は 山 陀 る。 \mathbb{H}

巫

民 家 に は ま 対 夜 軒 た 明 L 几 T 当 it لح 村 謝 棟 罪 では から \$ 類 0 15 た 焼 め L 八 「入寺」となり、 謹 T 七〇 慎 1 る。 L 明 たとさ 治 な おお 车 n 火元 に る 洣 惑 大 とさ 火 を が か 1+ た村 た

0 富 美 士 女山 頂 当村 八 0 0 幾右 Ō (寛政十二) 衛門の 娘 车 姉 0 妹 庚 から 富 申 縁 士: 年 Щ 15 頂 に 際

第16章 下和田



図表3-73 下和田の字一覧

ズクウ(ズクウ) 嵐ノ下(アラシノシタ) 嵐ノ台(アラシノダイ) 石コロバシ(イシコロバシ) 一本杉(イッポンスギ) 一本杉下(イッポンスギシタ) 上ノ山(ウエノヤマ) 内尾(ウチオ) 内平(ウチタイラ) 内山(ウチヤマ) 馬ノ目(ウマノメ) 大胡山(オオゴヤマ) 大野原入会野(オオノハライリアイノ) 大日向(オオヒナタ) ヲトウ坂(オトウザカ) 樫木尾峯(カシノキオミネ) 樫木坂(カシノキサカ) 桑原(カバラ) カミ中(カミナカ) カミヤ(カミヤ) 川原向(カワラムカイ) 観音林(カンノンバヤシ) 木戸際(キドギワ) キミョウ(キミョウ) 久保カミヤ(クボカミヤ) 桑木畑(クワキバタケ) 坂上(サカウエ) 坂下(サカシタ) 笹山(ササヤマ) 三角原(サンカクバラ) 下原(シモハラ) 下和田原(シモワダハラ) 十三郎(ジュウザブロウ) 上ケ尾(ジョウガオ) 新右エ門沢(シンウエモンサワ)

雀塚(スズメヅカ) ソロバン坂(ソロバンザカ) 鷹見塚(タカミヅカ) 竹ノ上(タケノウエ) ツチヌタ(ツチヌタ) 土橋(ツチハシ) ツモグリ(ツモグリ) 寺山(テラヤマ) 道済(ドウサイ) ドウゾウグラ(ドウゾウグラ) トノカイト(トノカイト) 中屋(ナカオ) 中条(ナカジョウ) ナガゾウリ(ナガゾウリ) 中原(ナカハラ) 中丸(ナカマル) 鍋沢(ナベサワ) ナンゴウ(ナンゴウ) 西畑(ニシバタケ) 花ノ木荒(ハナノキアラシ) 花向場(ハナムカイバ) 船久保(フナクボ) 平僧淵(ヘイソウブチ) 坊主畑(ボウズバタケ) 細畑(ホソバタケ) 堀向(ホリムカイ) 本河原山(ホンカワラヤマ) 本沢山(ホンサワヤマ) 本ノ沢向(ホンノサワムカイ) マツバ(マツバ) 水越(ミズコエ) 水沢山(ミズサワヤマ) 向イ(ムカイ) 向畑(ムカイバタ)

杉山(スギヤマ)

七

八歳の美女二人がいるのを見たという伝承

がある

その とい 『駿河記』 駿 河 年齢までわか 30 0 国の吏民、 下巻)。 れ は 頂上にいる人が下から見えたこと、 ったことは不思議な出 八 富士山を祭る」 七 五(貞観十七)年 と都装 + 良香 来事であっ 月 が記 五. 日 L た 12 15

ح

編

記 『富士山記』に、 美女を見たという村 ことと同じであるとし、 0 嶺の上で双び舞っている(『市史』二 - 三〇号)とある 0 著者 る記 Ш てい の峰を見ると白衣の美女二人が 0 義兵衛という男が、 る。 不思議なことであると 0 こと は 姉妹ととも 深みいま 『駿河 (須山) に Щ

3 近 現代

村

0

|神主素山に語ったことだとされている。

村に置かれることになった。

Ш

戸

カン

行政区 一の変遷 町 村 制 施行までに は 市 域 0 他

下和

田

も一八八九(明治二十二)年

0

まず、 々と同 様 一八七二(明治五)年の大区小区制 そ 0 所属がめまぐるしく変わ の導入によ ってきた。 0

村

民選の戸長が置 の村々とともに第一大区三小区に編入され 治七)年の大区小区制 (明治十七)年には戸長公選制を廃され、 って第一大区五の小区へと編入されて、 _ O を境に 長役場管轄区域の改定がなされた。 制 0 法に 大区小区制 カコ 村 市 よっ 域 0 は東西 て廃・ 区域 かれることになる。 \$ 止 に組み入れられ、 に二分され、 3 一八七八(明治十一)年 の再 れ 編により、 再 び近世以来 下 和 L 市 戸 か そのため、 戸長の官 域 長役場は御 は 0 た。 下 0 0 御御 八七四 水雞 郡 和 そし 宿 八 X 田 村ほ 選と 八八四 以外 黄 村 町 明 宿 瀬 村 7

須山村富岡村組合村として出発した。 は に 0 翌八九年に須山 財政 富 0 行政村 岡 八八八(明治二十一)年、 規模 村に日 が弱いとされ、 属 が誕生した。 した。 村 藩制 富岡 村が 下 村 富岡 和 深れなる 市制 その 田 同村と町 は 町 村 まま移 他 村 0 組合村役場は富 村村 小さ 制 泉村 行 の公布 組合を設けて、 0 した カン 村ととも とい に より、 う四 村

は

九

八戸、

七八七人(男四一〇人・女三七七人)で

あ

候

る

(富

岡

村

事

務報告」)。

ちな

3

É

富岡

村

0

人

口

は

○歩、

Ш

林

原野

四四

__.

九町三反二五歩と、

水

田

は

皆

無

富 出 0 岡村に置 後 出 村 と須 八 かれ、 屲 (九九(明治三十二)年に 村は 組合村長も富岡村出身者 独 立した行政村となっ 町 村組 合 が を 務めた。 解 消 そ

戦

後

九

五.

(昭和二十

七)年

に小

小泉村と 泉

村が

合

併 七 Ш 村と富 一)年には深良村 して裾 留 和 岡 野 四 村 町 + が 六 が誕生した。 裾 车 野町 が、 に 市 に 制 合併 九五七 から さらに、 施 して裾野 行 (昭和三十二)年に 3 れ 町 九 現 とな Ŧ. 在 六 0 り 丽 裾 野 は 和 九 須 市

戸数と人口 査」によれ 八七五(明治八)年の「小区 ば

表編立

調

る。

となった。

三人(男一八五 人・女一八八人)となっ 家持六六戸、 てい る。 X П 三七 八 八

八

(明

治二十

一)年頃の

御

路宿村

ほ

カン

0

カコ

村

自

治

区

造 市 成に関する諸表」では、 史 四 - 三四二号)。また一九二五(大正十 — 五. 一戸、 匹 五〇人である 四)年 C

> が 九一七(大正六)年が四二七二人、一 五. 二 五. Ŧi. 人 九三七(昭和十二)年が六一七六 人と

九二七

留

和

な 0 九七 T 1 る Ŧi. 留 和 五十)年 0 国勢調 査によると、

世帯、 子 0 比べると約一 六四 世 = 帯 2 数 七〇三人である。 1 # タウ 帯 は二三九世 倍 七 2 が造 0 Ŧi. 増 帯 一成されたことにより、 加 人となってい である。 これ 人口は八九二人と急増して は ま たー 一八七 る。 九 五年の 九 九 五年 九 六 年 統 K 12 は 計 呼 15

下和田 の立 地 須 间 街道を行くと、 南 0 今里 和

須山 る。 条件と生業 『と同様、 C の急坂を境に霧で覆わ 下 和 田も天気が変わりやすく、 \mathbb{H} 0 境 に は れ 馬き やす 0 目め 坂ざか i とい 土 地 柄とな う急坂 寒冷 な気 が

案 め条件に では、 ある。 畑 \equiv 町 八 六反六畝歩、 八六(明治十 九 宅 年 地 0 Ŧi. 町 地 六反 誌 取 九 調 畝 草

Ш

野二入テ炭焼ヲ生業トス」として、

物産

に大小麦

耕

地はすべて畑である。

「地誌取調草案」では、 では、 八七五(明治八)年の「小区表編立調査」 農二〇六人、僧一人となっている。 「農業ニ従事シ、 冬期ニ至レバ また前 0 職分表 述

0

< が 一蜀黍 大正 に玉蜀 初 期に 黍 炭 0 · 材木。繭。三椏 編まれ 産出額はもっとも多く、 た『駿東郡富岡村 茶等をあ 誌 やや時期は いげてい には、 る。 三五. 下る ٤

草 額 平 0 0 や茅、 てい も今里の五倍、 均は二七、 ○俵と今里とともに群を抜い る。 薪 炭 なお、 0 八俵だとしている。 運 葛山 馬 搬 用 の飼育数も一 とし の一〇倍、 て馬は T 戸につき二頭と多く、 欠 金沢の二倍と多くな また同 お か り せ ない じく 戸 家畜であ 炭 あ 0 た 産 0 出 0

した。

0 子弟が寺院で学んでいたと記されている。一八七二 学 校 近世に 東 郡 寺子屋のようなもの 富 岡村誌』 15 よれ ば は わず なか カン ったが、 15 有 志

九〇八(明治四十一)年、尋常小学校の修業年限を六年

を学区とした下和田尋常小学校が設立され

てい

る。

と今

た

導 治二十)年には、 通学 と開昇舎そして須山学校が嶽南小学校に統合され 12 小学校の分校とし、 て県内の学区が大幅 創立される。一八八六(明治十 (明治 通 が一人、 わせることとした。 0 五)年に学制 困難を考慮し 授業生が二人配置された。 下 が 和田分校を嶽南小学校第二分校と 頒布され、 に統 今里の子どもたちも て、 このとき下和 須山 合され と下 九)年、 下 ることになり、 和 和 田 田 県 田分校に 村 0 翌一八八七(明 0 に 小 も別な 和 布 学校を嶽南 達 今里舎 を受け 四昇舎が は の分校 た。 訓

るが、 嶽南 嶽南 深良·小泉·富岡· 一八八九(明治二十二)年の市制町 小学校 小学区から分離して須山村立尋常小学校を設立。 その後一八 の下和 田分校 九二(明治二十 須山 はそのまま存続することに の各行政村が誕生 五)年に 村 制 下 の施 和 行に 田 須 より、 Ш 里 は

9



写真3-74 富岡第二小学校

が

北に位置している金沢と葛山では子どもの通学 転は実現しなか するよう要求 を感じて、 下和田と今里ととも した。 った。 L カン 1 費用 0 に本校を村 問 題 \$ あ とり、 中 央 移 0

移 転 に不

便

することになっ 小学校を廃して、

た。

そのため分校の生

徒は、 「か年の

本

校 いであ 嶽南尋常小学校の四

分教場と 和田尋常

.延長されたことを受けて、

翌一九〇九年下

る嶽南小学校へ

残り二年間

通うことになる。

そこで、

12

中里と田場沢なかざとたばつされ より 常小学校に高等科を併置することとなり、 年嶽南尋常高等小学校が移転改築された。 東郡長から本校を御 これは、 務部長地方課事務官の調停に するように指示され て北 行ったことだが、 は一九二 E 前 移 九〇〇(明治三十三)年に小学校令が改正され、 転することで合意が 部と南部 嶽南 一九二〇(大正九)年 八(昭和三)年に高等科 小学校への通学に不便を感じていた地 の住民が協力して中里に分校を設置 地 区との た。 宿 その後一 0 宮原にな 間 その に再び対立が生じた。 成立 に より、 ため、 九二五(大正十四)年に駿 移転 L 今里、 が併置 御宿内の若干 本校の位置をめぐ L 九二九(昭 金沢、 され 中 -里分校 嶽南小学校 葛 和 を廃 ۲ 北 Ш 四 れ よ X 0

田

に

富

岡

村立富岡第二小学校

が設立され、

九

Ŧi.

七

富岡 昭 駿東郡 一九四一(昭和十六)年、 和二十二)年の国民学校令の廃止によって富岡村立 小学校となった。 富岡村国民学校と改称されたが、一九四七 九 国民学校令の施行にともな 五. (昭和二十六)年、 下 和

併したのを受けて、 阳 九七一 和三十二)年に富 (昭和四十 六)年の市制施行により、 裾野町立富岡第二小学校となった。 岡村が須山村とともに裾野町と合 裾野· 市立

富岡第二小学校となって現在に至る。

あった。 十六)年に居宅六戸、二六棟が焼ける大火があったが、 年の大火明治二十五 八九二(明治二十五)年の大火はそれを上 「検視明細書」によれば、 下和田では一八七二(明治五)年に居宅 九戸、二九棟が焼け、一八八三(明治 四 月 九 日午後三 るも 0 時 T

が

回り、

本戸五三戸、

そのほか神社、

寺

学校など合

屋根に火がつき、 三〇分、葛山の山

折からの大風にあおられて八方に火

林より出火したもの

が居宅の茅葺

寺、大畑、千福、 須山 須山など須山村富岡村組合村から多数出たといわれる。 して木材や茅、縄などが供給され、その人夫には く届けられたとい といわれている。 富岡村長は、 年 十二月に 村 富士岡 住み込みで陣頭指揮をし復興に は浅 一村(御殿場市)、原里 御宿、 米・塩・現金・衣類等の救援物資 う。 間 神社 また住 上ケ田、葛山、 を再建 まい L 0 ための復興材料と 村(同)などから多 八九七(明治 金沢、今里、 あたっ 1=

催 を大火当日の して火渡り行事を行っている。 この大火を教訓とするため、火の神である秋葉神社 四月九日にまつり、一〇年ごとに大祭を

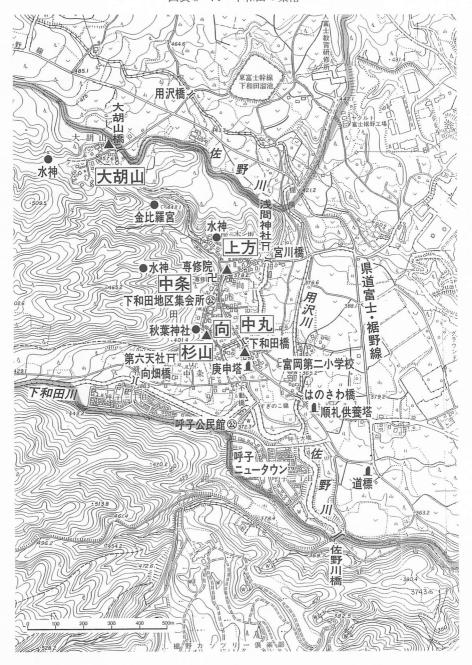
十)年には寺の本堂を建築した。

同

当時の芹沢孝三

わせて五九戸、二二七棟が焼失した。

図表 3-74 下和田の集落



第 三節 地域社会と生活

生業の変化 農業 昭 和 三十 セ ン Ħ, サ 、スト 年の総 に 戸 ょ 数 n ば 九三 九六〇 0 うち、

総農家数が

一二九戸、

うち専業が一二戸、

第

種

兼業

は は

(最寄)ともいっていた。

中条と中丸以外はガタ(方)と

九〇年になると、 0 が 四戸、 七七戸、 うち専業が二 第二種兼業が四○戸であった。 総戸数七〇三のうち、 三 から 総農家数が これ が一九

第二 積で比較すると、 ている。 種兼業が九二戸 また、 主要な農作物を作物類別収 と圧 稲が三九・四から三〇・六 倒 第 的 15 農業が 種 兼業 副 業とな 〇戸、 穫

0

図表3-75 下和田の内部区分

ーヘクタ

だ

麦類・雑穀が六九・五から一・〇ピッに、

い

\$

類

も二五・三か

3

•

ールクタに

い

ず

\$

してい

る。

これ

に替わ

って増えたの

が

芝生栽培の隆盛

によるも

0

と思わ

n

る。 花 n

な 類 激

お で 減

九六〇年には養蚕を行っていた農家が

区		郷	組	サイトヤキ
下	上	大胡山	大胡山	大胡山
		上 方	上方上	上方
			上方下	
			背 越	
	方	中 条	中条東	向 方
			中条西	
和	下	中 丸	中丸東	
			中丸西	
H		向 (方)	向	
			松葉	
	方	杉山方	杉山上	杉山方
			杉山下	
			富士見	
呼子	/		1 ~ 20	

Ŧi. 0 戸 あ 0 た

一下。 東がし 自治会組織 な 戦 中条西・ 時 1 背越に 下 0 が 0 背 隣 中丸東・ 越と 富 組 下和 士 わ が 富 見で ち、 き 士見 田 0 中丸西 大胡· ある。 15 カン は であ け Щ 現在一 7 ح ・上方上・上方下・中条 る。 • 向 · 松葉 · 杉山上 · あ れらのうち旧 0 三の組 クミ たと (組) が 7 あ 1 来 る。 3 王 0 す \exists X 組 杉ぎ 1) 分 で な

780

部農会などの

単位となっ

T

1

る。

ح

のように

錯綜

した

T

飲

食

などの

接

待

\$

L

な

け

れ

ば

な

3

な

カン

0

t=

٤

う。

組

が

あ

る

戸 9

加

よっ

てニ→

四四

→六

 \equiv

٤

内

部

0 0

X は

割

が 数

增 0

えてて 增

1 に

0

た

カン

らだと考えられる。

林 郷 条 る い と呼 う呼 は 前 入会の 中 は び方 30 ゴ 丸 ウ 郷 向か も使っていた。 Ш をそ 方がながた は ٤ 杉山 日常生 れ う区 ぞ れ 0 六つ 活 所 分 また、 から 0 有 管理 中 0 あ でつ 郷 り 上下、 L で 大胡 き T あ あ 0 お 東西 1 り た。 山 p 葬式 と分 そ これ 上 方 れ 組 を 3 カコ な 郷 0 中 れ

E

の単位とも

なっ

てい

葉 大 中 杉 る 0 丰 胡 ほ 条 Ш から 0 ま 杉山 方 た 組 カン Ш 中 ح に 0 から . 四 郷 丸 れ あ Ŀ 富士見が含まれ 0 上方と下方という言 をまつる単 る。 よりも 方 松 が 当葉が あ 下 中 から る。 和 条 入っ 田 集落 位 に 背越、 に 7 として大胡 は 大きな区 T 1 0 道 中 お る。 祖 下 り 心 神 5 方 つであ 方 2 分とし が に 秋葉講 から 0 Ш 几 は 基 る向方に、 几 あ 中 まっ る。 上方·下 て 0 0 や念仏 丸 3 サ まとまり 上 方 向 れ 1 方 講 向 T 1 に • は 松 t 1

> 裕 員

など共 有 施 設 \$ 整 1 0 0 あ な

お

呼子

ニュ

1

タウン

は

別

0)

自

治会

組

織

を

り

公

民館 組 長 X 0 一三名(うち一名 役職 15 は X 長 が 組 副 長会長)、 X 長 各 会計 名 協

議

委員四名

寺世 方法は 任期 る。 は 0 話 寺 あ だ る家 世話, 現 が、 すべて区 人三名、 在 の当主 そ 人と檀 0 ような輪 れ 檀 以 の公選で、 外 徒 が 徒総代三名、 総代は 務 は め 番 年 制 住 組 再任を妨 Ŧi. C 年任 長 は 期 なく、 氏子総代三名などが \$ で ある。 期 組 げ 0 な 内 旧 氏子総代 監 部 カン 家 カン 査員二名 で 2 0 0 は た。 経 T 済 X は 選 的 0 役 年 あ 余

とっ 諸雜 組 5 ٤ 0 代表者 費 T 務まらず、 5 0 ほ た。 か、 が 下 三 集会 和 道普請 名の 田 所 0) が 組 X 0 建設さ ような共 長 長名を書 は 村長 れ る 同 1 前 作 T L 投票す べ は 業や学校関 自 ル 1宅を 0 る方法 財 開 力 放 係 が L 0 な

共同 共有 財産と 愛鷹 町 歩 余 Ш あ 0 る。 茅 野 に カコ 0 T 七 は 戸 俵 0 P 共 屋 有 根 地 0 から



写真3-75 山神社境内の龍爪社

本河原

水に二一

町

あ

る。

て区割りをし、 て茅を刈るため 0 共 区画を六、 有 地で あ 七人で所有してい 2 1: が、 現 在 は 植 る。 林 を

茅刈りをしていた時代には、

良い茅を生やせるために

理

は共有会が行い、

会長、

副会長などの役員

が

5

る。

てい

る。

と交 組織 0 が、 ソウ Ш 換 神社 0 たの 猟 L t ほ 付 力 師だけでは か 7 が 近 工 龍爪 に 龍 ザ う。 あ 爪講とい 講 ワ 0 たというが、 で 龍 t なく捕 ある。 爪とい 7 、う講仲 12 れ 反歩ほどの植 IJ 3 た獲物を飲 2 0 間 七二人持ちの ウソウヤマ は で 猟 共 師 有 食する仲 が す 林地 る 信 は 仰 Ш とな 共 す を 有 現 IJ 間 る 在 地 で 神 2

新芽 在 屋 分割をして入札をする。 根茅にする。 (木馬)で、 後に から 0 和 出 治郎兵衛に 田 る時 搬出して良い茅は炭俵や野菜俵に、 0) 低いところからは 共 期 搬 有 に 出 茅野を焼 地 す は 大野 る際には、 刈っ 町 步余、 原 3 0 た茅はその 印) 馬 十二月 水沢に一 で行 野。 高 Ш い ところからは 15 0 初 たとい 場 旬 五. E Ŧi. に 町歩 悪 立 刈 町 う。 ててて 步 い る 茅は 前 現 1 干 に

金で建て替えたもので、それ以前は児童館として建て現在の集会所は一九九三年に国庫補助金と地元負担

受け、 た \$ 0 だ X が つ た。 市 無 土 償 地 で貸 は 寺 L 0 所 T 15 有 る。 地 で X から 寺 カン

3

借

9

年

水 源 地

1

下

和

では、

大胡

Ш

「の谷、

金比

羅

神

社

0

谷

0 確保 0 市 L 0 ぼ 水 道 0 水 が を水 引 カコ 源 れ とし る ま では、 て水を 引 愛 鷹 1 寺で T Ш

大胡 川ゃ 水 沢 水 Ш 水 沢 源 で は 0 中 金 几 条 比 カン 所を 羅 中 0 水 水 丸 源 源としてい 松 は 葉 上 方 で 杉 た。 Ш 寺 C 大胡 利 Ш 用 水 L 源 T は 0 き 水 向 たが、 で 源 は

現在

使

わ

n

てい

るの

は

寺

Ш

水

源

0

2

C

あ

災に ため、 て水 たと 九一 よ 以後井 0 を う。 九(大正八)年、 T 開 水 15 関 戸 源 たが、 から 東大震 0 掘 位 置 れ なくなっ 35 が 九二三(大正十二) 水沢 で 変 は わ 水源 り たと 地 カコ 下 * 3 5 0 作 土 わ 水 9 年 n 流 が 管 C る。 0 が 0 水 変 き 関 な を わ 東 くな 大震 引 0 た 1

細 調 K ょ れ ば 村社 る ほ 和 は E 田 浅 に 間 は ま 神 神 0 社 3 る んと で 神 14 棟札 橋 から が 多 IC 多 1 よると元禄 5 Ł 神 15 社 わ 明 れ

祭日

K

拝

す

る

度

あ

0

た

が、

九

九

七

年.

頃

5

金

比

羅

神

社 参

は

浅間

神 程

社

0) 1

祭典

後

に

ま

0

るように

な

0 カン

た

ると 現 建 間 在 あ 15 神 り 御 第六天 明 鍬 境内 皇 社 大神 創 社 建 Ш . 15 年 浅 神 は 月 間 吉 不 大神宮 愛宕 田 詳 神社 0 天皇 ・愛鷹 社 八 は 社 四二・ 大明 同 \$ ٤ 神を ٤ 天保: あ 0 る。 社 十三 地 な

創

お

祭りを続 神 け 細 T 調 る。 は な が、

考 は だ 0 0 部 ٤ 力 金 えら L 進 屋 ギ 1 比 な 15 1 不 備 敷 1 不 羅 つ 社 神 動 をす 動 て、 れ IJ 神 明 は が 社 る。 鍵取 ま だ た金 る当 つ まつら 本 など 河 力 た り)と呼ば 比羅 が 否 \$ 原 ギ れ に と水 1 は 3 0 れ ま を T 神 IJ 組 0 0 祭り 区 沢 ごと 1 3 社 0 1 れ 一全体 2 家 る。 0 れ る家 分 は Ш が 0 T 神 主 輪 X でまつ ح 水 15 ح 宰す 一全体 が 領に 社 れ る。 番 0 は あ 3 制 ほ となっ る り で行 るように 0 な ま カン ので た飯 X 神 る 15 尾 仏 0) カコ \$ そ T 役 T 0 15 根 盛り 秋葉 T は 員 0 1 お な 筋 山岩 そ 限 る。 り 0 0 0 9 た 0 必 Ш 不 3 社 家 ず が で た そ E 頂 動

に

よ

れ

ば

五.

九六

(慶長元)年に宗祖

円光

大

師

法

2

15 1

寺 で あ が 寺 る。 あ は り 浄 土 般に 阿 宗 弥陀如来を本尊とする。 無 は 量 専修院 Ш [専修院(芝増上寺 と呼 ばれてい 末 すべてこの る。 寺 向 Щ 院 明 檀 長 細 唱 家

Щ るとし 孫 とし 僧光誉 T て相誉上人の名をあげてい 1 創 る。 立 また あ る い はそ 一酸東郡富岡 れ 以前、 る。 村誌 僧 また同 心 に 誉 は、 0 書に 開 中 創 は 興 で 開 あ

月九日の大火で類焼し、 わ 焼 今 失 里 0 T L 0 海じ 1 土党 な L 院の隠居所だっ カン としてい \$ 住 職 0 移 る。 九月頃に寺の居宅を須山 動 等によっ たとも 一八九二(明 記され 7 口 治二十五 碑 てい る文書 る。 年四 から 再三 \$ 伝

3 衫 山伴作 「覚書 買

取り、

八九七(明治三十)年に本堂を建築し

たと

8 カン C

て参拝する。

直会は、

カギト

リの家

で行

わ

れ

る。

飯 山 「の不動 愛 飯 鷹 盛 Ш Ш 系 は カコ 1 1 ら派生した尾根筋 モ IJ t 7 ٤ \$ 1 に わ 飯を れ

盛

たような形をして

い

るためこ

0

名

か

あ

る。

2

0

Щ

0

Ш

頂

標高一〇三二點のところに不動がまつられて

0

お

もなものをあげてみる。

まつ る。 の家 ح 0 に 0 たも は 不 不 動 0 動明王と役行者、 は だとも 小 田 1 原 わ 城の守り神とし れ 修 力 験者 ギ 1 などが IJ て乾 官 描 0 方角 カコ \$ れ 1

役員と浅間 た三 多くの人々が 属 1+ 登 不 してい てまつり、 れ 幅 動 ないときに 0 0 祭日 掛 る組の当 神社宮司、 1+ 飯 は三 軸 飯盛 盛 から 月二十 所 は Щ 蔵され Ш 番 に 氏子総代、 15 登って参拝 力 から は後 飯盛 八日 ギ てい 1 日 1] Ш で、 代参人を立 に る。 0 家 登ってまつ 力 L ギト た 九四 0 座 リ、 敷 現 0 ててて 年代 在 C 掛 る。 では、 力 あら ギ ま 17 大雪 軸 1 で は た IJ X

が

Ł 15 ま から な 0 お できると 葛山 3 れ T 0 雷 5 お 神宮 わ り n 下 は T 2 和 愛鷹山 る 田 0 不 動と 0 標 高約 は 4 九 1 五〇 に 見 通 付近

事と お もな行 九四〇 暦 で年 中 昭 行 和 事 + が行わ 五. 年 まで、 れ てい 下 た 和 次に では 2



飯盛山の不動の祭り 写真 3-76

在

2 神 で 社 0 は 秋 日 0 ic 祭り 葉神社の は 8 刀 可 月十 祭 C 火の神 0 日 から 節 15 移 である愛宕神 供 動 認 た。 識 3 れ そ 社 0 るようなっ ため、 0 祭りも 下 た。 和 田

浅 を節

神 供 和

0)

祭り 3

四 月 0 77 0

日 であ

0

た。

カン

九二 つ

と呼 社

> な節 春

供 もとも

に L

行 宵

が

下

田 では

浅間神社

祭り

0

前

H

祭り わ れ

のこと

几

月

九

日

に

まつるように

なり、

それ

にともなって浅

間

明 間

治

五年

0 は 女児

大火の後、

秋葉神社を大火が

あ 八 る

た

れ

てい

る。

六天社)の では七 ま る 第六天社のことを天王さんと呼 たと考えられる。 うら 時 夏の厄除け 期 れ 月十五 カン 祭り てい 3 混 は 日 同してこのような言 る天皇社 毎 に を祈願する神であ 年 P 旧 愛知 0 暦 てい 0 0 の津島神社から分霊 祭神が素戔嗚尊 六月十五 3 が 1 る。 日 方をするように だ 浅間 天王さん つ で た あ 神 した るた 社 が 第 現

な あ

0

に

前 + 15 蔵 参る習慣 を 0 四 盆 は七 勧 日 日 請 曜 に 月二十三 地 日 蔵の から た 15 あ \$ 行 祭り 0 0 2 だ T 日 12 \$ が カン 1 る。 あ ら二十六日までで、 0 1 るが、 0 わ 遠方の 2 れ 0 現在 新 地 蔵 ため下和 盆 では は 0 家 七月十 深 が その 田 深 良 K 良 0 遷 0 原 五. 間 の 二 L 地 0 日 た 蔵 地 0

とい う。 地 蔵 の祭りでは念仏を上 げたり、 子ども 相 撲

年 吉 n 都 に 三島囃子をまね ように 旧 (安政六)年頃悪疫が蔓延 定三 浅間 てい 神楽岡に鎮座する吉田神社を勧 暦 田神社の由来は、 最も近い 八 八月十一 神社 る(杉山伴作 して大胡山以外 若 祭日か日曜日に神事の 五日で、 の境内にまつられている吉田神社の祭りは 衆の てシ 相 「覚書」)。 一八二九(文政十二)年~一八 撲が催され ヤ カコ ギリも難し 0 つては L 村中 これをおさめるために京 なお下 を回 祠を馬力に た。 た。 請 みが行われてい 0 和田 天王さんの相 た。 現在 たも では、 積 は 0 のときには んで だと カン Щ + 五九 撲 つて る。 車 1 Ŧi. わ 夜 0

であ 盆 法螺貝を吹き法具を鳴らしながらやってきて、< (富士宮市)の法印 の二十 戦 前 頃まで、 五. 日 0 富士峰修行を終えて下ってくる 施餓鬼相撲、 が 毎年 九月八日に下 十五夜の吉田 和 田 さん 15 体をこ 来 0 村山 た 相 撲

い



写真 3-77 大胡山の道祖神

てくるが、 ウチングチとい 無 病 息災 下和田 0 呪い では泊まらずに金沢に向 う淵などで行をし を した。 須山 から下りてくると してか 3 か ラに 0 たと

チ す

3 0

T

0

いう。

内や道 られる龍爪社 多くは 0 脇に 八世 建 てら 紀 が 目立 0 れており、 \$ う。 0 である。 順 その 礼供養塔は、 数は 道祖神はほとんど ○基に 専修院境 も及

順礼供養塔、

馬頭観音、

道祖神など

15 うの Щ 神社境内に は 鉄砲撃ちの は、 龍爪社 神で、 がまつら 現在 でも龍爪講中 ń T 1 る。 龍爪と ic よっ

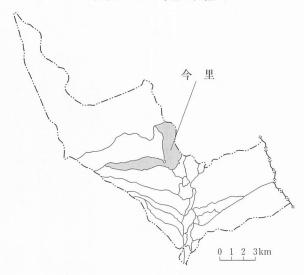
が双体形で、

道の辻に九基建つ。

て守られて

いる。

図表 3-76 今里の位置



第 節 地理的概要

第一七章 今

里

う村名い 広々とした芝畑の中にい 点在する。 市街 から水田地帯を抜けて、 くらかの水 田が

いつの間にかその

路からはほとんど望めない。今里を南方面からたどる から下ってきて、初めて村らしい集落を見たことか れている。村名の今里も、富士裾野の巻狩で頼朝 と命名されたとも 地 の南端近くに位置し、 県道富士・裾野線を上っていくと、 を「古屋」と呼んだのに対して、 ような景観に変わってきているのに気づく。 帯と分断されているために、 今里という土地柄は、 そういう印象を持つ。地名の由来は、 里が見えた」と言ったことからつい いう。 しかも佐野川によって愛鷹 頼朝伝承が多いことでも知ら 集落の中 新しい「今」の里だ 心部は たも かつて御宿 富士山 主要道 0 だと が Ш Ш 麓 麓

789

今里の名主が巻狩の折に案内

いう伝承もある。また、

をし

刀を

拝

領

L

た、

佐

野

川

上流に

頼

朝

0

0

言

伝 1+

えも た刀

刀を掛

地

石 朝 北 を の富 0 0 馬 集落 士 が Щ 引き込まれ が 麓 出 から下ってきて、 現するのも、 た大淵、 など ようやく里らし

る。 景 観 持 今里であるとい え

> 2 植

ル

7

場

が

造

成

3

れ

た

海 抜 位 九〇 置 ナトメー 山中 今里 0 西 尾 端 は 裾 根 0 愛鷹 野 部 市 を Щ 0 北 西 尾根 一端とし、 西 から 部 15 北 位 愛鷹· 東 置 してい に分岐した、 Ш 麓 を る。 流 恵かずら れ

る

佐

野

Ш

を挟

h

で富

1:

Ш

麓

を東端とし

T

5

る。

佐

野

III

0 混 あ

金加 広 Ш 0 沢さ 西 0 から 東 側 深ら良い あ 側 地 地 X X は 東西 南 地 は 東西 は X 葛 約 0 約 Щ 形 四・五キロメ は 一七 北 逆L字型とな と西 五キロメ は 南 下北 北 和影 南 約 田だ 2 北 T 約四·五 須* 1 山中 る。 と御殿 キロメの 東 佐 野 は

T 地地 形 る。 利 甪 と土 ح 0 佐 佐 野川 流下 野 川に沿 は渓谷状をなして北 つ 側 た愛鷹山 の富 士: 麓裾部 Ш 麓 から南 地 0 区とを分け 狭 東方向 い 平坦

場は

市

に

接

L

T

1

る。

•

枝状 林 0 に 地 今里本村の集落 Ш 0 で 小さな沢谷に 地 0 あるが、一 P P 傾斜 部 刻 が 0 まれ、 形 緩 に 成さ 落葉広葉樹林 15 平坦 大部 れ 面 T を利 分 1 る。 は スギ 用 が残存し して、 愛鷹 . Ш E 近 T 地 丰 は る。 樹

平 在 る広大な原野 東 側 坦 L 地 0 富 15 部は日 9 士 里 Щ 開 新 で、 麓 墾 地 田 3 帯 0 ス ギ れ 集 は 落 て畑地とな . 火山 Ł が 1 形 + 成 砂 3 礫 0 り 植 n 0 堆 林 T その 積 1 地 る。 ٤ L 末 た起 雜 2 端近 木 伏 0 林 地 < が

0 X 関 0 連 南 ì 東 た施設 部 は 1 が造 3 タ自 成され 動 車 てい 株 式 会社 る。 0 敷 地となり、 そ

め れ から L 集 T る。 本 県道富士 1 村の る。 ま 落 た 佐野川 旧 佐野 今里本 今里 集落は県道からはほとんど見えない。 川 裾 から 野 新 村 沿 愛鷹 線 0 田 1 沿 集落は 0 0 Ш 集落 海 1 麓を削る谷となっ 抜 0 海 は ホ 三一〇~二〇以付 抜 シ ン ンデ ムラ(本村)と呼 ン 新 田)と T 近 呼ば る 展 に広 ば 佐 開 た れ

写真 3-78 旭滝

下 74 た FF 家 和 田 近 々 が ٤ < 0 15 新 折背 たに 境 に 口至 HU 0 屋 0 敷 出で 地 を 域 構 石 增 え 船 え 県道 ٤ T 1 1 0 沿 \exists タ 1 0 15 間 石 0 15 恵え ほ ELU カン 1 須

0 が あ 新 富品 は る。 P 田 入 は 0 j 棚 村 口 9 旧 看 た県 集落 返 戸 \$ 数 板 L 0 15 あ から 道 が は 淹 る を 增 \$ 萬 記 が、 12 え 前 入 Ш 述 載 県道· 呼 旭 る。 か が た 3 ば 滝 あ よう 上 東 れ は る T れ 0 側 駿 は今 T 15 K 棚 2 河 旧 る 1 底 里 \$ 記 0 道 0 範 新 0 0 淹 で P 域 要 旭き 所 あ を 0 る。 あ 酸な 旧 滝き 広 に 集落 る 東 げ 入 あ 高 5 郡 口 0 る

方だ

中なか Щ 村

村的

そし

T

浅間:

神社

付

近

0

畑た

5

う大 る

0

端 本 旧

挟

ま

n

たおおく

保课

浄ようと

院に

0 尻片

谷

に 下村村ら

立.

地 ٤

す

入为 地 5

本

麓 心

0

水 集落 方 わ

を が

利 形 里 な

T れ は に

立

新 す 道

 \mathbb{H} な

村 わ 神

が れ

建

0

点を で Ш

中

15

3

T

る 田

は

道

筋 村

地

て

発達 佐

L 源

てきた

集落

で

あ

新

たに

生

ま

れ

0 旧 に は

集落 立.

は L

野

Ш

と通り

称寺

Ш

٤ な

1 0 地

う愛鷹

野

III

٤

愛鷹

間

0

ず

窪 新 成

地 \mathbb{H}

集落

から 0

形

3

きく二

地

域

に

分

カン

れ

T

15

る。

ま

た

家

P

転

L

T

 \exists

4

T

0

あ ٤

る。 0

0

4 カコ

新 1

> 祖 成

と記 誌 和 3 棚 \mathbf{H} 0 3 0 台 本は n は 丈 T 河が と称 約 誤 原 1 Ŧ. る。 0 を 四五五 T 水 T 旭 源 5 0 滝 ٤ る 辺 ٤ L が 0 1 7 幅 で わ 1 棚 Ŧī. は n る。 底 間 淹 る ٤ ように 0 駿 15 落 3 東 5 郡 0 な \Box は 0 富 滝 崖 下 村

んど水は落ちないが、ひとたび大雨が降ると雄大な滝下の落ち口をさしている。渇水期になると涸れてほと

から 出 新 現す 田 0 道 る。 祖 神 0 辻 のことを、 『駿河記』 に は 迁

0 15 7 時 ミツジ る勝又賢 に ノイ 0 辻 工 家は、 とも で小 田 2 原方 新田 わ れ 0 0 番人をするように 先祖は葛山 オオヤとい と小 う屋号のほ 田 命 原 じら 0 戦 カン

ていると記されてい

る。

新

H

0

草

分け

0

家とい

わ由

れ来

葛

Ш

御

宿

今

里の

三つ

の辻であ

ることに

今里新 村誌 る れ て住 は には、 信玄公の塩次道路とも 田三辻 み着い 景ケ島と葛山 から北東方向 たのだと伝えられてい に通じる道を甲 の中間を越え大根坂を経て、 呼 ぶと あ る。 る。 州 駿 明 治以 街 東 郡 道 富岡 降 は あ

は金沢入口をさすようになった。現在の県道富士・裾野線が開通してからは、

郵

便

配

達夫

が

通

2

た

ため、

郵

便道

E

\$

わ

n

た。

お

3

れ

T

る。

一辻なり

界二節 歴史概要

1 中世以前

今里中は F村遺跡 出土した 資料 原始、 がない 古代 0 までの で明ら 事 柄 カン で 12 は 0 な ては、

L とい 裏山を開墾したところ古銭の数枚入っ その古銭を献納してしまったという。 中 た 時 う山 期 政 2 府 は れら 裾 不 カン 5 いから約一 明だが 0 般市民 出 五〇〇 戦前、 土 品 のうち、 金属提 入方の ○枚の古 浄土 壺 供 銭 0 個 が出 要 院 間が浄土 た壺が三 その後、 請 北 側 土 が あ L 院 た 通 寺院 称寺 個 たため 出 戦 Ш

はとは、ほど掘り下げたところ、 同寺 九六八(昭和四十三)年、 Ш 福部 で 上 水道 I 事 0 浄土院 中国銭が一一二二枚ほど ため 地 カン 下 3 東約 約 Ŧi. 四 0

郷帳

一〇〇石余であ

四 0 T 紀末の淳化元宝(九九〇年)から が 〇三年)まであ 付着した状態で発見された。 ためであるという(『市史』 一-八六号)。 1 る。 埋 蔵 0 目 り、 的 は 埋 明 蔵 3 は カン でない Ŧi. この 世 Ŧi. 世 紀 中 が、 紀 で 玉 0 あ 銭 永楽 ろうと は 般 に 通 は 宝(一 0 3 備蓄 世 n

出

土した。

古銭は一〇〇枚単位

でまとまっており、

縄

以 後 近世までの 動向 は 明ら カン ではない。

2 沂 世:

(寛永 近世 領 (九)年 の今里村 七 以 降 六(享保 小 田 南 は 原藩領、 金沢村と接する。 は葛山村、 元 年 以 降 再 西 七〇八(宝永五)年 U 北 小 は下 支配は一六三二 田原藩 和 田村と、 領と な 以 東 降 0

河

2

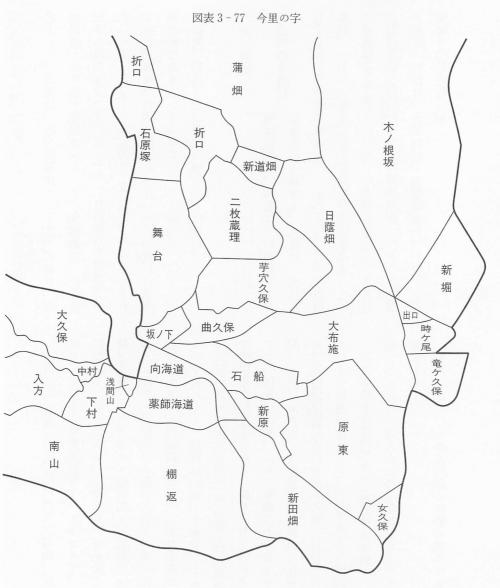
幕

が て明 駿 あ 河 る。 治 \pm 維 |駿河 村高 新 を迎え 説 郡鮎沢庄今里 は、 IE T 保 1 郷帳 る。 村 • 畑検 元禄郷帳 六四 地 帳」(今里区有文書) 八 八三石余、 (慶安元)年 天保 八 月

堂が 間 安養山 三五. 八。 数三 に野 余で、 てい るのが目につく。 てこの檀家である。 保ごろの流行と考えられ 玉 は のうち浅間神 天神、 九 六八六(貞享三)年では村高九三石余、 .駿河郡御厨領今里村指出 江 水吞六·門屋 畑 る(『駿東郡富岡村誌』、 ・大工一・出家四 あ 軒 三反余の屋敷地以外すべて畑で 浄土院極楽寺とする、 が二 る。 戸 增上寺末浄土 うち名主 町 大六天、 反 社 あ 鉄砲は村筒三 八 は る。 舎後神、 ほ かに 人数二八六人、 である。 . 宗安養山浄土院 七三〇(享保十五)年 る岩船は 組 Щ 「神社 [役米は 薬師堂が 除地一 頭 シ之帳」『市 Ш 匹 地蔵が 明細 0 石三斗 村足 六斗 脇 神 0 ほ 筒 書 0 男一四 軽 あ 軒 納 [綴」)。 カン ま 史 Ŧ. 『駿 が 馬 8 る。 つら あ で 社 反別 あり、 が六一 に る。 7 河記 あ から ま 再 本 ح れ あ 四七号)。 建さ 宮 た た 百 る。 る一つ 0 疋い 六 地蔵 すべ 女 姓 ほ では 村 は 浅 享 駿 内 家 カン れ

に

当村 では、 5 わ ゆ る天保の 飢饉 0 翌年である一



図表3-78 今里の字一覧

赤目立(アカメダチ) 石原塚(イシハラヅカ) 石船(イシブネ) 芋穴久保(イモアナクボ) 入方(イリガタ) ウシヲテ(ウシオテ) 江ノ平(エノタイラ) 大久保(オオクボ) 大竹洞(オオタケボラ) 大布施(オオフセ) 大向(オオムカイ) 折口(オリグチ) 女久保(オンナクボ) 蔭ノ山(カゲノヤマ) カシノ木立(カシノキダチ) カツタ畑(カツタバタケ) カリ又(カリマタ) 蒲畑(カンバタケ) 木ノ根坂(キノネザカ) コウチ休場(コウチャスミバ) コブナ(コブナ) 小麦畑(コムギバタケ) 古屋ノ入(コヤノイリ) 権九郎(ゴンクロウ) 坂ノ下(サカノシタ) 三庄山(サンショウヤマ) 三本松(サンボンマツ) 下ノ平(シモノタイラ) 下村(シモムラ) 新田畑(シンデンハタ) 新原(シンバラ)

新道畑(シンミチバタケ) 泉口(セングチ) 浅間山(センゲンヤマ) 大根山(ダイコンヤマ) 棚坂(タナガエシ) 出口(デグチ) 時ケ尾(トキガオ) 長坂(ナガサカ) 中村(ナカムラ) 新堀(ニイボリ) 二枚蔵理(ニマイゾウリ) 八久保(ハチクボ) 花向(ハナムカイ) 原東(ハラヒガシ) 日蔭沢(ヒカゲザワ) 日蔭畑(ヒカゲバタ) 東大塚(ヒガシオオツカ) 舞台(ブタイ) 細畑(ホソバタケ) 曲久保(マガリクボ) 間古坂(マゴサカ) マヒガフチ(マヒガフチ) 丸山(マルヤマ) 水グイ(ミズグイ) 南山(ミナミヤマ) 明保根山(ミョウホネヤマ) 向海道(ムカイドウ) 狢穴(ムジナアナ) 森坂(モリサカ) 薬師海道(ヤクシカイドウ)

竜ケ久保(リュウガクボ)

年に返済してい

徳金を無利息で借用 七(天保八)年に、米一六俵の代金として二五両余 L 五年賦で一八四一(天保十二)

3 近現代

行政区の変遷

大区

Ŧ.

の小区

へと編入され、

一八七四(明治七)年の大

X

小

区

制

0 再

編により、

市域の水窪以外の村々ととも

年の大区小区制の導入によって第 近世の今里村は、一八七二(明治五)

東 域 は 制 T に カン 廃止 戸 西に二分され、 0 れ \$ 第一大区三小区に編入された。そしてこの大区小区 改定がなされた。そのため、黄瀬川を境に市 長公選制を廃され、 ることに され、 一八七八(明治十一)年の郡区町村 なる。 再び近世以来の今里村に民選の戸長 今里 L は カン 戸長の官選と戸長役場管轄区 「御宿村ほか一〇か村」 L 八八四(明治十七) 編 制法に の区 域 年 が置 t は 15 0

域

15

組

み入れられ、

戸長役場は御宿村に置

かれること

12 なった。

の報

した。 15 岡村と町村組合を設けて、 村出身者が務めた。 村 八九年に須山村・富岡村・深浪村・小泉村とい 0 町村 一八八八(明治二十一)年、 に属すことに 行政村が誕生し、 組合村役場は富岡村に置かれ、組合村長も富 組合を解消 なっ L その後、 た。 今里は他の一○か村とともに富岡 富岡 財政規模の 一村と須山村は独立した行政 須山村富岡村 町村制 一八九九(明治三十二)年 小 の公布 さい須山 組合村 により、 う四つ で結成 村 は富 翌

となった。 七一(昭和四十六)年に市制が施行され、 十一)年には深良村が、 村と富岡村が裾野町に して裾野町 戦後、一九五二(昭和二十七)年に小泉村と泉 が誕生した。さらに、一九 一九五七(昭和三十二)年に 合併 て裾野 町となり、 現在 五六 の裾野 昭 村が合 は 和 市 九 須

Ш

併

村となった。

七

O

五人である。

戸数と人口 八七

五.

一(明治

八)年の「小区

表編

7

調

七人(男

一六四人。女一

六三人)となっ

T

1

る。

八

1

町六反

八畝二四

歩、

Щ

林

原

野

.

雜

種

地

三 五

九町

反六

あ

る 八 査」に よれ ば 家持 Ŧi. 戸、 人 口

ちなみに富岡村の人口は、 七二人、一九二七(昭和二)年が五二五五人、一 九二人である(「大正十四年 15 造 八 (昭和十二)年が六一七六人となってい ついては各大字の統計 市史』四 - 三四二号)。また、 成に関する諸表」では、七九戸、三九三人である 明 治二十一)年 頃 0 「御宿村 から -度富岡 あ り 九一七(大正六)年 一九二五(大正十四 ほ か 一 () 村事 今里では七七戸、 る 務報 か 告」より)。 村 自治 が四二 九三七 年 Ŧi. X

季に

材木・茶・繭等をあげて

る。

とくに玉蜀

地

誌 炭

取

調草

案」では、

物

産

に

大 1

小

麦

蕎

麦

玉き

蜀る

世帯、 増 に 加 比べると世帯数では約二倍、 九七 となっ 一二四三人である。 Ŧi. てい (昭和 る。 五十)年の また一 玉 九九五年には、 これは、 勢 調 人口では約三・八 査によると、 八七五年の 九三世帯 _ 倍 統 八 計 0

生業の変遷

案 では、 八八六 (明治十 畑 五二町 九年 九 Ó 畝 地 歩 誌 宅 取 調 地

草

では、 畝一八歩と、 八七五(明治八)年の 農一七三人、僧一 水田は皆無で耕地 人となってい 「小区表編立 地はすべ て畑で る。 調 査 また前 0 職 分 述 表

産業ト シテ に編ま の産出 維新 れ 額 た はもっとも多く、 前 『駿 スへ 玉 蜀 東郡富岡 丰 黍 七 栽 1 ナシ」 培 村 やや時期は下るが 一戸 話 と書 約二十 に は カン 俵 位 れ 特 殊農 = 0 シ 大正初 産 村 テ 誌 其 物 他 1 期 から

出 平 編 まれ 均 額 四 \$ た当 ・シテ録 ○俵と富 一時は 戸につき二、 岡 玉 村中 蜀 黍 で最も多い。 の総計二八〇〇俵、 三百俵を算出して下和 また同じく炭 戸 K 田 と金 0 0 産 き

沢に 次い

の子弟が寺院で学んでいたと記されてい 学 校 近世に寺子屋のようなものはな 東郡富岡 村 誌 12 よれ ば る。 わず か 一八七二 カコ つ に たが、 有志

県内 下 は 七(明治二十)年には、 0 を嶽南 n 立 (明治五)年に学制が頒布され、 され 分校に 13 和 訓導が一人、 H 0 学 通学の困難を考慮して、 の開 る。 小学校の分校とし、 通 区 わ | 昇舎そして須山学校が嶽南小学校に統合さ が せることとした。 大幅に統合されることになり、 八八六 授業生が二人配置された。 (明治十九)年、 下和田分校を嶽南小学校第二分 今里の子どもたちも下 今里村に このとき下和 須山と下和田 県 0 布達を受け も今里舎が 翌一八 田 の小学校 今里舎と 分校 和 八 T 創 に \mathbb{H}

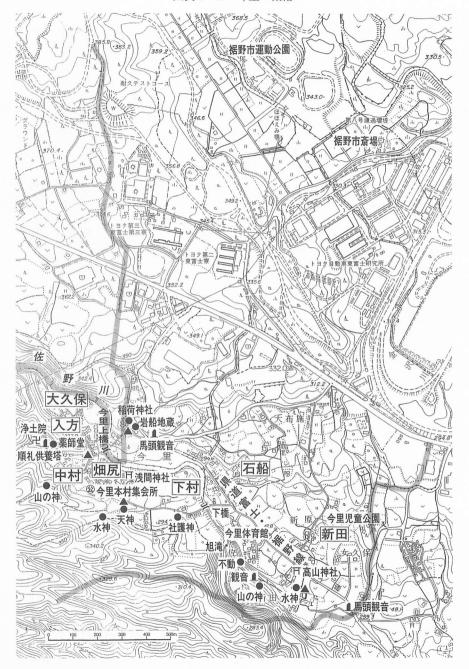
嶽南 深良 南小学校の下和田分校はそのまま存続することにな 小学区 · 小泉 八八九九 か (明治二十二)年 富岡 ら分離して須山村立尋常小学校を設立。 須山 の各行政村が誕生 0 市 制 町 村 制 0 施 行 須 K より、 山 は

> 村中 小学校よりも北に位置している金沢と葛山では子ども る 0 る嶽南小学校へ、残り二年間通うことになる。 することになっ 小学校を廃して、 に延長されたことを受けて、翌一九〇九年下和田 九〇八(明治四十一)年、 を学区とした下和田尋常小学校が設立され が、 通学に不便を感じて、 央 その後一八九二(明治二十 移 転するよう要求した。 た。 嶽南尋常小学校 その 尋常小学校の修業年限 下和田と今里ととも ため 分校 五)年に下 の生徒 L 0 四 カン 一か年 1 費 は てい 用 0 和 分教 本校 0 15 田 出と今里 問 本校を を六年 る。 いであ 国尋常 題 \$

中里と田 これは、 より前、 15 常小学校に高等科を併置することとなり、 は 九〇〇(明治三十三)年に小学校令が改正され、 九二 嶽南小学校への通学に不便を感じていた地区 I場沢の住民が協力して中里に分校を設置ばできる 八 九二〇(大正九)年に、 (昭和 三)年に高等科 今里、 が併置 金 され 沢 嶽 た 南小学校 葛 2 れ 0

あり、

この移転は実現しなかった。



するように指示された。そのため、本校の位置をめぐ が って北部と南部 行っ 長 いから本校を御宿の宮原に移転し、 たことだが、その後一九二五(大正十四)年 地区との 間に再び対立が生じた。

務部 年 0 嶽南尋常高等小学校が移転改築された。 E 長地 移転することで合意が成立し、 方課事 務 官の調停により、 一九二九(昭 御宿内の若干 和四) 北

参照)。 現在の裾 その後、 野 市立富岡第一小学校となった(第二一章御宿 < 度かの制度的変更、名称変更があり、

第 三節 地域社会と生活

農業の変化 「農業セ 昭 和三十 ンサ 五)年の ノス」 に 総戸数は八八戸、 よると、 九 六〇 総

農家数は八一

戸、うち専業はない

が第

種兼業が

四六

第二種兼業が三五戸である。これが一九九○年に

農家数は六七戸と減ってい なると、 総戸数は一七六戸と倍増してい る。 うち、 専業が六戸、 るも ののの、 総

中里分校を廃

-に駿

県学

よ

また、 五〇・五から一・八いかっに、 から二五・八分を増えてはいるもの 一種兼業が六戸、第二種兼業が五五戸となっている。 作物類別収穫面積で比較すると、 いも類は二一・二から一・八 0 麦類・雑穀は 稲が二〇・四

れに対して工芸作物が九・四から二八・三片でに、花き いかっに、まめ類が一・六から○・二いかっに減っている。こ

○年現在には養蚕農家が 類が○から二八三・○□シッに増えている。 一八戸 あっ たことがわ また、一九六 かか る。

村 内部区分と X . 畑尻 一の役職 ・入村・大久保 現在、 1 新田2・新田3・唐沢・石船 今里には一二の組が • 日の出 . 恵比 寿 あ 折 る。 口 新田 の各 下

てい たのは、 新 田 (現新 田 1 組)。 石 船 下 畑

れ 組

である。

これらのうち、

旧

来

0

七

=

IJ

最

寄)と呼ば

組は、一九九八年四月から編制された新しい組である 尻・入方・中村・大久保の七最寄である。 現在 の入村

図表 3-80 今里の内部区分

最 寄		組		
入	方	ス		村
中	村			13
		日	の	出
大ク	、保	大	久	保
下	村	下		村
畑	尻	畑		尻
石	船	石		船
今里新田		唐		沢
		新	田	1
		新	田	2
		新	田	3
		恵	比	寿
		折		П

最寄 れ が 天神社下、 てい 义 表 本 0 る。 来は 3 字を取 す 入方と中 79 なわち、 新 15 田 あ るように、 て入村とした。 0 辻 村という二つ 大久保組と入村 そして稲! 道 祖 0 荷 神 神社 は 最寄を合わ 几 組 前 0 カン であ 所に 境

下

村 つら

計

ま

せ、

各

監

る。

サ 組

員

記

二か イ カ 1 所 ヤ 、をま で行 キは 現 T 在 り 1 る サ 今 里 1 が F: 1 橋 t カン 丰 0 0 佐 T は は 野 E III 橋 1 際 屋 河 原 が 0 畑 1+ と児童 をし 県 **公園** 道 T 沿 サ 1 15 0

3

n

会 X 長 長 二〇〇〇年度の 副 名 X 長 自 主 防 出 X. 納役 災会副会長二名(一 0 役職 名 は 次の 協 議 ように 員 名 四 は会計担当)、 名 な 0 T 自 主 1 一防災 る。 の二か所でまとめて行

T

た。

委員 長 は 組 査 0 兼 各組 役職 任 二名)、 委員三名、 計 公民館 す 環境衛生 る。 0 名 任 名 神社総代三名となっ 期 3 長 計 委員長 は 3 . 組 一二名)、 に 新 新 長 年 田 田 で 公民館 副 前 公民 自主 年. 組 子供 度 神 長 館 社 X 建設委員長などをそ 防災会長 各 建 会世 総代 長 設 てい は 名 準 話 などは 顧 計 備委 人各 る。 問 体 となる。 員 組 兀 育館 ま 各 一年で た 名 協 長 組 議 除 体 れ • ぞ 書 名 育 れ 委 折

共有地 浅間 が 神 基 社 建 つって の境内に 1 る。 は 共 ず

有

15

わ

る記

念碑

れ

\$ 関

七

料 T 古くから今里区民 3 は 昭 地として接収され、 年. 和 てい 長が 用 四 15 3 坂さ + 植 る。 共有 れ 林 7 年 を まず、 き 林 四 た 記 月十六日 た の下草 念碑」、 共 長坂 \$ 有 X 0 地 一では 0 共 から に 屋根茅 有 あ 建 基 御 林 0 は T 料 九 E た 3 つい 地 富み が、 れ 保護組合を結 女竹の採取 九 平以 た てだが、 大正 Ш \$ 九 起 0 源 几 九 年 長 地 天 ٤ 六 成 0 坂 題 基 正

とが内定し、

区をあげて払下げ運動をしてきた。

やが

てその保護管理 和二十二)年に引揚者互助組 に協力してきた。 合に払下 しか L げられ 戦後 るこ 九 几

払下げ代金は ることとなった。その広さは二一町 和二十八)年にようやく区長ほ れ 九四 さらに 九(昭和二十四)年に 払下げ 八四二万円にもなったと記されてい 運 動 を続 けたところ、 国有林野整備 カコ 八三名に払下げ 八反 一畝 法が制 九 Ŧi. 三(昭 る。 歩、 3 定 n 3

うの 産 とを称えるも 力を富岡村長や歴代の区長、 0 は 権 利 当 が 時 あ のである。 る家 0 旧 戸 数に T あ あ また、 る たるも 役員たちが 区長を含め八四名とい 0 で、 現在も共有財 やってきたこ

最適な場 長坂とい

所を召

Ŀ

げ

3

れ

それ であ

を払

V

戻す

た

8

0 努

ととした。

うの

は

愛鷹山

0

部

る

が

共

有

地として

体 対原開 に た 寄付したが、 狠 富平 畑 五. Щ 反歩を在郷軍 戦後その地は区の管轄となっていた。 うの は 人会消防団青年団等 戦争中に 勝又富平氏 0 諸 が大おお

認され

るのは下村組の一八六二(文久二)年のものと、

々

果、 とし は 1 予定地となり、 たというものであ して富平 町歩を代替地として払下げを受け、 九六 = 代金の一部で下和田地 タに 現在愛鷹山 て青少年育 Ŧi. Щ 売却した折 昭 「と呼 和四 成その 14 地 称することとしたとい + の下和田地先、 る。 時)年に の代金 0 他諸団 区 そのため、 1 長 の 一 籍 \exists から タ自 裾野 体 の町有 部は、 0 字内山山 活 町 寄付者の意思を尊重 動 車 林植 動 当 う。 今里 局 富 0 今里区福祉 助 15 王工 栽 と折 | | | | | | | 成をするこ あ 後六か年の る。 の富平 場 衝 林とし 進 L なお、 基金 た結 出 Щ 0

水源と開 田 ため、 今里の土壌は火山

水はすべて地下に浸透してしま

性

の砂

礫土

嬢

で

ある

う。 方法をとってきた。 め 水であっ また、 古くから愛鷹 佐野 水源には水神をまつってい 別に Ш ま \$ 0 た旭 しぼり 通常水が流 滝 水 0 湧 を水 水も、 れ てい 源 として水 るが 貴 な 重な生活用 現 その を引く 在 た 確

七

九

明

治

+=

年

· 八

九〇

明

治

十三

年

九

社

12

Ш

神

社

\$

加

え

て

祭り

は

浅

間

神

社

0

例

祭と

秋

新 田 0 ___ 八 九二(明 治 二十 五年 の二 基 C ある。

明

以

前

は

水

 \mathbb{H}

が

皆

無だ

0

た今日

里

\$

有

志

七

名

0

発

返がえし 耕 起 地 15 坂ノ下 整 よ 理 0 T 委 • 員 石 九 七 船 名 • 原東。 0 から 開 明 田 治 ・女久保 12 几 7 着手 年 0 た。 耕 に 官 地 字 整 0 大 許 理 久 を進 口 保 を 得 8 棚な て

口な 翌 地 七 籍 町 九 1 步 0 須釜みり う水 余 を 開 源 (明治) カン 溜 3 L 四 た 池 + を作 ·四)年 そ 0 間 0 0 に T 水 0 七 水を引 土 口 町 管 は 歩 を引 を 1 カン た き 所 ٤ で 田 1 翌年 わ 0 11 0 れ に 葛 は T \$ 泉なん 1

後

0

H

曜

日

15

祭日

を

移

動

L

T

15

る。

て大六天神 の祭り そ 社 ٤ 社 神 Ш C 社 神社 木るの 明 花は 細 開き が 調 耶也 あ る。 姬 に 命さ よ 浅 をと る 間 ま 5 神 0 り 社 村 は 社 創 合 は 建 祀 年 社 浅 間 月 E は 神 る

駿東

郡

富

村

誌

五. る。 詳 年 だが、 0 ほ 八 カン Ŧi. に 七三〇(享保: 九 安 政 七 六年 九三 + (寛政 • Ŧi. 年, 八 Ŧ. に 六 年 再 八 建 明 L 治 八 1= 五. 兀 棟 年 札 嘉 から 0 あ 永

浅

に

元

宮

から

あ

る。

1

ガ 0 た 昭 が に 日 0 和 (明 は 0 ア 四 現 元 + 治 7 在 且. 神 三十 ナ 祭 饌 は を 年 ٤ 七 四)年 特 0 して + 月 别 棟 月 15 札 • + H 新 供 が 穀 七 15 え 九 あ H 行 0 る。 る。 0 わ __ T 几 神 れ ラモ 例 な 嘗 T 大正 祭 お、 祭が 1 ミと は る。 現 六 あ 力 在 年 月 る。 ほ ラ は カン ナーシ + に 七 九 0 C 六 日 3 秋 正 あ 八 0 ウ 月

間 社 年 E は字 呼 大六 神 Ш 社 神 ば 社 天 森 K れ 合 神 坂 る لح 家 社 祀 K 3 ま \$ から は 0 15 n あ \$ たこ 3 浅 ٤ 0 間 入方に れ た。 とに T 神 社 1 L まつら な て、 に カン 合 0 記さ T 大六天神 れ 5 る れ T 九〇七 た。 が 1 社 て ま 現 明 在 力 治 \$ ギ \$ 四 森 15 Ш 1 + 浅 坂 神 IJ

社 2 間 0 神 大 ほ 汁 Ш か 同 境 夫 内 天神 利 に 神 は 社 社 金 から 比 社 ま 羅 (舎) 0 神 護 3 社 神 れ T が 1 下 15 坂 る。 村 神 に 社 ま 4 れ 0 3 3 頭 れ 0 天 神 王



写真 3-79 今里の浅間神社

七宮市)の法印が金沢で一泊し

てから、

九月八日

K

淹

T 15 神 田

2 る。

旭

滝

で

は

カン

つて富士

行を終い

れえた村山 むらやま

社

に

本村の浅間

神社 同

分祀

L

7

同

様に

にまつ

0 高 7 明

旭滝: は

付

近に

は

家

0 \$

0 峰

神と不

動

\$

まつら

れ 7 Ш

壺に入って身を清めたという。

ま にともに た 地蔵堂側 行 い 注連 0 稲 縄 荷神社は、 を張 0 替 二月初午に祭りをして え神 - 饌を供 えて 5 る。

い

た

今里新

田には、

県道

から

0

入口

に高山神社がまつら

境内に 蓮社文譽上人が中 は 細 帳 不 今 詳 里 は薬師堂が だが、 お 0 寺は よ W 蓮譽が 浄土宗浄土院(極 『駿東郡富岡村誌』 -興するとある。 あ 開創、 る。 楽寺) 六三九(寛永十六)年 に 本尊は阿弥陀如来で よれ で あ ば る。 創 「寺 立 年 院 教 月 明

二十七日に地蔵堂が改築され、 蔵と呼ば 由来と祭り れ る石 今里 仏がまつられ 15 地 蔵堂 0 集落 から あ てい る。 県 その落慶法要が行わ 道を北 る。 地蔵堂には、 カン 九 ら入るとす 九四 年三 船 n 月 地

n

T

る。

もとは勝

又賢

家の

屋

敷神

T

あ

2

た神

浅

間 5

近年、

高

Ш

神社と新

命名し

神社としてまつるようになっ

たも

0) たに

である。



岩船地蔵の祭り 写真 3-80

0

出さ

れ T

る。 そして

御

神

(本尊)

は

見え

な

15

が、

0

カコ

3

Ł

日

I

に

中畑なかばた

御

殿場

市

さらに七

日

目

K

佐

法雲寺、

Ŧi. 村

日

目

口に本宿

村(長なが

泉が

と送

から

見えるように

な

た 体

り、

手

が

由 あ

> P 盲

病

気

治っ

たりする、

た

5

h

利

益 不

0 自

る な

地

蔵だと

右衛門が 梨県郡 月に は とどまりそれ たん T 須 天気 Ш 内 船 カン 地 記 から 3 地 悪く 地 方 地 蔵 L た 蔵さん」 以来まつるように 蔵 カン 0 3 記 な から 「覚書 P 籠坂坂 載 た つ から と呼 帳 てきた 峠 0 あ で帰 る。 を んでい に 越 そ が、 えて れ な なくな れ るが、 須走り 0 須 に 七 は Ш 九(享 り れ 村 茶畑の ば、 帰るときに 小步 う。 保四) 山地 地 和木甚 蔵 年 が 2 Ш

今里 石 あ る 0 船 が、

に ま

0 3

れ

T

1 る

0

3

で い。 お

あ

る が、 船

そ 蔵 は に 乗

0 は 地

由

来 市

は 内 0

次

0 は 0 で

を見ることは 厨子に

できな

岩

船地蔵

は

その めら

名

石

0 通

船 常 地

> 0 た地 像

蔵

ようである。

納

れ

T 0 通り

り

蔵

2 で

送りで各地 町 あ の高勝寺に ることを示して 0 に 地 まつ 蔵 が、 3 1 る。 れ るように 七一 今里 九年に の岩 な 船 地蔵 たうち 突然大流行 \$ 2 0 0 系 折 L 統 0 T \$ 村

う。 人が

は、

下

野

玉

0

岩船

地

蔵 御 足

(栃木県下都賀

郡

岩舟はおきな

は

地

蔵

0

頭

頂

部

か

ら船底

までの

高

3

が

〇九・八

催され

る。

方で伝 たも 中 ので、 畑 0 が今 そこか 柏木 わったものと考えられる。 里に伝 甚右衛門の「覚書帳」 3 印記の わったのであろう。 (御殿場市)、 須山へと村送りされ とは異なる伝播 すなわち、 現在の岩船地 須走 から の仕 蔵

究 ジ 2 カン 才 0 なりの大きさがあり、村送りするには重すぎるため、 流 歴 船の 行の後に建立されたものと考えられる(福田 史を 舳先から艫までの長さが一一三・五はとれると、 調 ~ る楽しみ 岩船地蔵捜索記 —」『市史研 ア

い

ようにと祈願した。

ず に 念仏講が新 から 3 0 行われ 現在の祭りは、 出 珠繰 て地蔵堂に てい 盆 りをしてい る。 の家を回って供養した後、 お 七月二十三日から二十四日の地蔵盆 二十三日には当番組の各戸 籠もりをし、 る。 翌二十四 夜通 日 0 し念仏を唱えな 地蔵堂で岩船 本祭りに から一人 は

地

蔵

0

御詠歌を唱える。

また、

参詣者には岩船地

蔵

0

姿を刷っ

た札を配る。

かつて本祭りには相撲が行われ、

は女性の講で、毎月二十日に組ごとで子安さんをまつ

とい 沼津 まで行われ、 う。 0 静 なお、 浦 辺りからも力自慢の 二十三日の晩は地蔵堂前の辻 今里の盆は七月二十三日 相 撲取 りが から二十 で盆踊 来たも りが 0 六 だ H

竹を一対立て、 事を祈って行われた。 春祈祷は、 の行事 か 二月二十八日に災難がない 現在は もな行事として春祈祷 注連縄を張り渡して厄病が入ってこな 行われ また風祭は、 なくなってしま 村境の下 風 ように一 祭が 0 橋 たが、 あ 年の の脇に 0 た。 無 お

する。 葉山へ代参に行き札をいただいてくる。 れ 八 講などがある。 ぞれ 日に 講には、 秋葉講は、 が 組ごとに行わ 不動講、 月十七日 不動講は 十二月十五日~十六日に清水市 Щ E れ る。 神 の神講、 世帯主による講で、毎月二十 場 山の神講は、 0 Ш 秋葉講、 神 社 御 殿場 また、子安講 子安講、 本村と新 市 15 万神 田そ の秋 代



写真 3-81 廻国塔

また二階建ての小屋がけをして、 の行事 は年に二 天神講も、 ダ ルマ としてサ かつて子どもたちが 口 を買い、 ほどになっ イト 子どもたちが家を 泊まり込みでオ 才 ヤ てい ンベ + や天神 、を作 る。 裾 野 講 ま 年 る。 は 辺の石造物 岩船地蔵周 0 七二九(享保十四 8 馬 廻 玉 頭 0 観音 塔 が あ は る。 順 地 七 石 造物 蔵堂 礼 また、 Ŧī. に年、 供 四四 養塔、 が 0) (宝暦 0 集 庚申塔も一 \$ 角に 8 四 のが並ぶ。 3 廻)年と は 玉 れ

塔 T

庚

申 塔 お

など \$

から \$ あ

お 1

ただし

数

0

る。 U

な

0

六八八(元禄元)年

七四三(寛保三)

が

あ

る。 0

サ か

1

1

では、

で寄付金を集

8

お t

飾 丰

0

P

る。

新

田

では、

現在

ほ

子ども

神

講 供

は

5

ず

'n つ

も現在は行われ

てい

ない。

えてまつ

たと

5

う。

サ

1

1 t

0 1

屋

から

1+

や 主

借 に

米や薪を持ち寄っ

て食事を作

り 丰

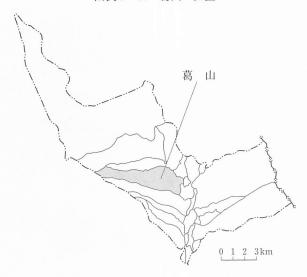
赤飯を天神社

ンベを見張ったという。

『柏木甚右衛門覚書 市史研究』 市史編さん室 田 アジ 才 Ŧi. 歴 史を調べる楽 裾野市史編さん室 帳 九 九〇年 湯山 安右 しみ 衛門日 岩 九九三年 船地蔵搜索記 記』(叢書 1 裾

福 野

図表 3-81 葛山の位置



第 節 地 理的]概要

第

葛

Ш

谷間の村葛山

だとされる。

また、

周辺には葛山

氏

0

居館跡

P

葛

Щ 城

氏

(最寄)には浄土宗仙年寺があ

り、

2

0

裏

山

が葛山

跡

葛山という地 名

山氏と深く結び ついている。 を通じてこの地を領 中村と は 呼 室 ば 有 町 れ カコ る T 3 七 戦 1 た 玉 \exists IJ 葛 時

三なり に関わる屋敷名も残る。 1 1 戦国 遠 0 たも 風 カコ 十板橋」 武将の痕跡よりも、 景のほう のだっ 葛山 た。 が印 が 0 集落景観からは、 わ 象に 谷 カン 間 3 残る。 なけ に 愛鷹山 あ る れ 村の 葛山 ば 麓 葛山 様 そのような血生臭 0 の谷筋に拓 子をよく言 長老は、 は 語 れ 「三塚、 かれた な 1 1

Ш 位 0 位い 置 牌品はいだけ 東西 葛山 より 約 は裾野市 七キロメ 南 東に派出する尾根の 中心 南 北二十二 部 から 北 0 広 西 1方向に 海 3 拔 が あ 位置 る。 愛

ているといえよう。

表

鷹

809

町

E

接

L

て

1

る。

15 0

長がいずみ あ る低 は の分岐点を西端とし、 今里、 丘 陵を境として金沢 南 Eは千福、 西 端 東 /はな 0 上がけた 位 野の 牌 岳 JII 尾 と東名高 御智 根筋 と接する。 を境として 速 道 0

を 尾 部 T 主 分は 深く 地形 根 地 利 木とする落葉広葉樹 筋 と土 刻 用 P ス ギ ま れ 面 E Ш 地 と中 また海 1 尾 X 根 丰 の大部分は愛鷹 筋 央の大久保川 0 抜 植 0 林 六五(斜 林 0 地 面 自然林とな 〇以以 とな は 急 峻で 0 Ш の多くの 地で、 上 T 0 あ 1 つ ところ る。 る てい 枝沢 北 が Ш 0 は __. 地 に 田た よっ 出場沢 ブ 部 0 大 ナ 0

堆 地 III 成 東側 積 Ш 深 麓 は 3 東 台 側 富 地 T 0 P お 士 Щ 1 佐 低 り 野 Ш 側 トメル と富 東 ЛĬ 丘 溶岩 南 陵 は 上 麓 士: 基 幅 は 0 地帯で馬背 Щ 盤 上 黒 麓側 約 0 色 に 富 一腐植 火山 土山 とを分け 状 [溶岩、 砂 土 五〇トメ 礫 0 0 低 t 形 まで深く浸食 岩屑 丘 の峡谷な 成 3 陵と台 る。 などが れ たと 佐 を形 状 野

> 3 Ш

ろも

あ

大部

分は

ス

ギ

•

Ł

1

丰

0

植

林

地

と雑

木

林

畑 地 から 交錯 して る。

集 落 葛山 は 範 域 が広 い

とめ を伝統 と金 てい 上城、 最寄 に て 7 沢 て本村 は 沢 る。 1 五. は その JII な 的 下 生 さらに二つ 中 0 15 0 い 活 とい の最寄 流域 0 0 村、下条の は 各 は谷 た平 最 や生 葛 々 う。 Щ 筋 寄 0 0 業の 平 谷 坦 が 7 に に 本 呼 0 筋 地 あ 坦 は 制 U 村 基 谷筋の合流するところ、 15 0 地 約 三つ ニっ 15 た。 中型と 0 盤となる社 に 3 北 集 現 畑 0 れ 0 が大部 落 谷 から 0 最 大久保川 在 を __ 田 あ 0 寄 が は N 筋 場沢 ある。 る が並 X 3 が 0 分が 西 まとまっ 会 い 組 呼 方に 0 T U 谷筋 集落 織 Ш 0 それら h 狭 入り込 地で、 0 で い n に あ た形をと を 谷 3 佐 は る。 形 0 を 集 集落 筋 西 成 h 主 蒽 落 III T カン

切ら 道 田 居 筋 本 場 館 れ 15 村 ることが多い。 形 跡 成 は 前 3 を通る 大久保 れ T 1 道 Ш る。 を縫 から ただし、 あ 最寄や り って 集 走る道と、 畑 組 落 \$ 0 は 境も 谷 お 筋 \$ 道 根ね に に ひら 方道と交差 IC よっ の二本の カン て区 れ 7

川ゃ 4

藤畑た

・一色原

.

下

条葛

Ш

居

館

.

F.

Ш

0

中

な ど

0

縄文時

代

遺

跡

が

散在

する。

2 跡

れ

3

カン 城

3

出 居

土:

L

1= 里

地

で

U に 地 り T 屋 沿 から 急速 でき、 敷 2 T 村 地 道 が 0 様 戸 並 が Ŧi. 数 走 相 0 h であ を で り 0 増や 最 5 る。 寄 る。 そ L 0 区 区 字森的 中 北 T カン 里 側 15 3 脇き る。 は 0 は 県道 緩 15 独立 は 県 P 道 富 八 カコ L 士也 沿 な た森脇 # 斜 い 帯 は 裾 面 0 商 野 15 団 森 店 線 南 地 脇 \$ が 面 X 寸 並 通 L

1

るため

街村という景

観

では

な

いっ

田

場

沢

は

田

場

沢

Ш

土

器

K

よ

0

て同

時

代早

期

から

後

期

まで、

万年に

及ぶ

第 節 歴 史概

1

中

111

以

前

に

L

لح

な

0

てい

る。

数少

な

1

縄

文時

代後

期

0

遺

跡

C

あ

る

継

坦 縄散 文遺 在す 地 佐 跡 野 III 野 葛 東岸 Ш Ш 15 に 沿 は 0 低 愛 つ 丘 鷹 た 陵 低 Ш E 台 麓 な 地 0 E 尾 に 大久保 根 柳な 上 島 0 亚 Ш \mathbb{H} に 坦 場 沿 面 沢 p 0 裏 佐 た

> 集さ 長期 続 色 原 n 0 間 L た生活 遺 T な 15 跡 お カン 人 り で 々 カコ 3 0 0 生 あ 早 じく 活 0 期 場 前 沢 たことを示し L 半 裏 た 後 期 痕 カン 0 遺 跡 3 + 前 跡 が 器 知 期 カコ 7 3 が 0 3 いい 出 中 は n 土 る。 期 匆 T 量 L 後 る。 ま 0 市 た 期 士. 内 中 ま 器 里 で で が は 0 採

紀代に 発本 T 0 の格 高 5 開始開 坏 る。 0 頃 0 くら 坏 以 か 後、 などが が、 縄文 3 萬 れ た 下 辞 古 Ш 代以 代 採 土 条 0 末 集 師 P 本 後 ま 格 3 器 色 れ 0 で 的 壺 数千 0 開 て、 原 事 カコ 拓 . 生活 甕 年 柄 が 3 始 は 0 15 0 空白 台付甕 0 ま 0 5 多 几 様 T 世 た 期 は 間 紀 3 有 7 カン が を示 資 3 孔 あ 料 時 脚 Ŧi. る

世

付

から な 葛 Ш 1 氏 0 C 0 登 明 瑒 3 カン で 東き 葛 な Ш は 室 前 戦 玉 時

代

を

通

じて

験な

あ る。 葛山 氏 は 鎌 帯 倉時 12 勢 分 代 を カコ 3 持 大森氏 2 た 葛 ととも Ш 氏 0 12 本 駿 拁

3

れ

る

て

5

<

0

カン

に

分

カン

れ

姓 L

町

権力の 東郡内に本拠をおき、 きら かに 中 で重 なってい 要な位置を占めてい る。 御家人や得宗被官として当 しか L 鎌倉時 た人物もい 代に活躍 たことが を認 時 0

どの か T から 2 ような活動 13 V L れ 人物の多くは実名不詳 な 氏 0 をし どの たの 系 譜 をひ カコ は くの 史料 か カン らはほとんどう 駿 東 郡 に お V T

る在 を 町 に 自 īE 撤退 訴 幕 分の本 長元)年 え出て認められてい Щ 府 氏 0 T 領 から のことで 小 接近をみ 初 であると支証 成長 8 田 て裾 原 に あ 入城 せるようになる。 野 る。 市 ĩ る。 域 (証拠文書)をもっ 2 た 12 登 0 0 葛山氏はその後急速に室 場す ち 年 0 駿 + る 東郡 大森氏が 月 0 15 は 域 て室 を代 佐 佐 四二八 町 野 野郷 表 幕 郷 す 府 から

するには至ってい

な

カン

0

たの

であ

る。

とか 駿東北 だだっ カコ L 5 たとい 部 その の二岡 定 3 出 0 神社 確 自 権 は 証 力集中を果たしてい あきらかではなく、 や宝持院に安堵状を出 が ない。 北 条氏 の 一 ると思わ 族だったとい そもそも葛山 して 5 るこ

郡 田 h 城館を中心として駿東中 う見方もある 基樹 でい 10 氏広は北条早雲の子か孫 支配 たことも 『戦国大名領国の支配構造』)。 地 から 散 (二小世) あ 在 3 して が、 史 い まだその支配 た。 央部から南部に 六。 0 今川 2 ず 氏 れ 氏 0) かと思わ 支配 広の時 から 広 カン 域 地 けてと富 的 と入り n 15 は ~る(黒 葛 存 在 組 ± Ш

を持 地方に 史研究』十二号)。 域 氏 の支配 氏元の が · 葛山 0 領主でもあった。 おける重要な交通路 してい 時代になるとその支配は格段 氏の支配領域 た沼津 また、 とその 12 足柄路をはじめとし なっ を押さえているという特徴 周 T 辺を たと 0 考 ぞ 12 えら 広 1 て から り れ 13 る 今川 ぼ 0 市 全

Ŧi.

五(大永五)年

か

3

五二八(享禄元)年に

カン 氏

T

広

氏される

氏された

が

知られてい

る。

発は 17

地

領

主

15

L

室

町

幕

府将軍

在

国奉公衆となる。

戦国

時代の葛山

氏は、

歴代当主として氏



写真 3-82 葛山城跡

端 輪 0

西

側

下 段に

袖

曲

輪

から

あ

る。

葛山 城跡

氏 北

が滅亡した後は徳川氏支配となって近世を迎えるこ

条氏、

武

田氏と変わり、

五八二(天正十)年

五六九(永禄十二)年に葛山氏退転の後、

支配 に

は 武

後 田

ととなる。

葛山 末端 氏 0 仙 の拠城は本村の北を遮る愛鷹 年 裏 山 通 称 愛宕 Ш とよ ば Ш

麓

れ

0

北東隅 る丘 部 が 北側と西 陵 削平 K に 築 櫓台状の され カン [側に れ た葛 た東西 土 土 壇 塁が残ってい Ш 址 約 城 であ がある。 七以 る。 2 (1 る。 南 海 北 抜 北西 約 が主曲 二六 二七以 五トメルト 隅 輪 15 門址 平. 最 そ 場

張出郭となってい は突き当たりとなり、 主 0 平 曲 場が 輪 0 下 つくられ、 方に、 東 北 カン その 西 5 隅 南 上段は、 に 枡 西をとり 形 主 の門 曲 囲 輪櫓台 址 が h あ で二ノ んる。 に続 曲 東

下 端 瞭 状 15 の三 る。 る稜線上に である 一ノ曲輪枡形門を下ると、 めぐる三ノ曲 が、 曲輪となっ の三ノ曲 掘 匹 本の 3 輪外縁 輪 れ た竪 竪 に ており、 は 堀 に 堀 から は 兀 認 は その 二 めら 土 本 仙 塵が 年 0 北側 曲 寺 堅 れ る。 残 水 堀 輪 場 は崩壊 全体 り が 東 0 あ を 上 り カコ カン に 3 囲 所に 南 南 T to 通 通 C 東 門 T 西 明

尾

根

稜

線

を

断

5

切

2

7

1

る。

2

0

西

空

堀

切

カン

3

0

先

0

てて

址 1 から あ 2 て 曲 竪 輪 堀 0 東 から < 西 15 い 込み、 重 0 土 大きな空堀 から 鍵 0 手 切 から となっ あ 0

は F 尾 明 根 る 尾 3 上 カン 根 15 0 上 小 は に さな空 な 数 段 堀 0 亚 切 場 から から あ あ る。 る が 東 方 城 0 郭 下 条北 遺 構 村的 カン どう 地 X カン

曲

輪

南

東脚

部

15

は

東西に

舌

状

4

場

0

あ

る

尾

根

状 0 あ 円 水 る 状 端 0 を 水 \mathbb{H} に 摭 は 南 を 深 面 t= 断 8 する 3 仙 ぐら 年 れ 5 水 寺 た う湿 L 0 平 T 東 西 田 15 カン 場 る で 3 から 約 0 あ 八 そ 比 O トメー り、 高 0 前 西 は 方 約 端 南 ナトメー 北約 15 0 堀 Ш 田 裾 あ 几 とい トメルリ り VI 水 う帯 南 場 0 半. 面 が

であ

る。

T

1

る葛

は、

日

本

0

中

世

城

郭史を語るうえでも

貴

重れた城部

3

た Ŧi. 5 世 わ 紀後半 れ 0) の平 る。 仙 年 0 場 IH 寺 平 15 仙 1 あ 年 場 あ る 寺 は 現 り は 在 F カン 5 0 城 0 仙 0 T 0 200 頃 年 葛 寺 12 Ш 居 0 15 氏 館 開 西 0 が Ш 側 居 ----[隆誉] 0 館 Ш が 言光門はこうけい トメ 麓 あ に 0 13 たと は あ E 0

南

に

移さ

れて、

その跡

地

15

葛

Ш

氏

12

t

0

て菩提寺とし

0

跡 T 0 0 仙 北 年 側 寺 は から は伯母子沢 移さ れ たと という深 1 うことができる。 い 沢で、 そ 0 さら な お 15 蒽 北 Щ 城 側

に 0 跡 で、 7 わ 葛 尾 あ 根 t= Ш 城跡、 る。 2 城 0 T 跡 頂部は Ш 巧 0 居 城 妙 主 館 は に 体 見 跡 浩 張台 初 部 とも 営 8 0 居館 規模 3 であっ 15 れ 比 は約二〇〇公 に T 付 たとする。 較 1 的 属 る 良好 する 中 世 な状 0 典 匹 が 型 態で残 方で、 多 的 カン な

山細

0

と考 15 平 葛 えら 場や空切 Ш 葛山 またその 城 れ 跡 0 る。 0 かくし砦」 背後の愛鷹山 堀 由 が認 L 来 か L 8 \$ 葛 3 明 0 3 Ш れ 伝 尾根 カン 城 何ら 承 跡 で 地 な Ł 稜 が は カン 部 あ 構 0 までを る。 構 築 造 上 この 物 城 0 共 から 尾 あ 腰 通 点 0 根 から た 上 い

微高 葛 Ш 居館 地 で あ 跡 る。 ĵ 葛 居 15 Ш 中 居館 館 跡 村 は 跡 15 東西約九七次、 あ は 葛 る。 Ш 海 城 抜 跡 と向 0 南北 トメ かっ の台状 約 合うよ



写真 3-83 葛山居館跡

に

は

3

3

史 \$ 事

な 存

0

ころに 開 口 L T 1 る。

てら また北

れ 入

٤

地

名だ あ

残

T

北

と東 規模

に

豪

から

2

たとい が

が、 れ

現 5

在 る。

は

立

四ドルの

あ

5 は

東西と北

に

土

塁が残存

してい

る。 8

> れ たも

0

である。

正式

な門址

は西

側

0

南

三分

0

0

7

敷と、

T

に

出

口 が 堀 田 側 が

あ

る

が 5 ŝ 門

址

0 は

なく、 け

後 3 3

世、

便

宜

E

開 東 埋

け

3 隅

老松 な る。 そ T 0 0 北 カン が 0 る。 居 のうち半 西 は あ 明 つ 15 館 居館 た。 出 3 跡 村 カン 0 跡 田 西 15 屋 屋 隣 な れ 0 敷 敷北 土 から に 0 3 臺北 連 T 0 あ 1 屋 側 り 続 敷名 東 に な L 15 隅 は 連 T に半 半 が 郭 から 式 1 5 \mathbb{H} つご まも 居館 屋 戦 田 松と 敷 期 ろ 土 を 構 荻 0 カン 1 塁 , う見 文献: 3 址 成 田 0 が 屋

トトルよ とも 久保 る。 jij に 0 た居館跡 どさ を隔 金 13 属 カン カコ 生産 てた に のぼると右手 南 Ŀ を行 南 東 城 隅 西 カン 0 側 つ 3 東外側のところを鍛 大久保 T 0 金 5 奥に 比 たとされ 羅 JII Ш Ш に沿 乃神 0 裾 る 社 2 地 部 T から を 名 Ш あ 金 冶 が 道を り 残 屋 ٤ 敷 0 約 T 1 5 大 0

居 館跡 內 に は 庭 園 0 石組みと考えられ る集石 遺 構 付

近

帯

を元屋

٤

0

時

代

B

相互

0

関連に

0

い

ては明ら

カン

で

は

な

柱 焼 穴群、 土 址 溝状 南 北 遺 に 併列した柱穴群、 構などが みられるが、 南端 それぞれ 付近で置 石 0 遺 列

カン 焼 集石 3 + 多 址 中 遺 量 構中 カン 0 3 か 一熙寧 カン わらけ ら中 元宝(一 国産青 (素焼の 〇六八年鋳造)、 磁片と常滑古 小 瓦質土 I窯産 置 一器(手焙)、 石 0 列 陶 遺 片 構

常

滑

渥

美

古

瀬戸

中

国

産

陶

磁

類

0

ほ

か、

刀子。

鋳造の 鉄滓、 構 遺 釘 物が カン 3 約二 I 出 片 銅 房が 滓なども 土 一五ドル 銀鐶 L あっ た。 東 の土 出 また、 銅鐶 た可能性 王 遠外 してい 有孔 高 が高 側 熱 下段 るが、 銅片、 0 ため いと思わ は鍛冶屋 2 中 陶 質化 れ 玉 れる。 らから 銭 一敷とい など多 した坩 ح 鍛 少様な わ 0 冶 鍋 坏 n 遺

央の 穴 の底部 以 井 前 言 から宮さんの井戸といわ 南側 址 は に 調 隅丸方形の横穴を設けた地下式横穴で 査 0 結果井戸 れ 、址では てい なく、 た居館跡 円 東側 筒 形 竪 中

T

るところで、

伝

承

地

名と深

1

関

連

0

あることを示

してい

で な

あ

ることが

判明し

た。

ただし

居

館と

0

関

係

は

あ

きら

構

葛山 世 居 紀後半に 館 跡から出土し 及んでお り、 た陶磁類は この 屋 敷地 一世紀前 遺 構の安定、 半

から

継続性 葛 Ш が 葛山 生活 氏 の本拠地とさ 水準や文化性 れるの 0 高さを示 は L 世 T カン 3

城 葛 く対応している。 つ頃築造され 館 六世紀後半までであり、 Ш 跡 城 跡 0 原 や居館 形 た が 0 形 跡 ただ、 ル成され 0 カン 形 は 態からみて、 5 現 たのでは 在 出 ま のところ 土した陶磁 残ってい な 5 明 五世 カン る居館 3 類 とい 紀 カン 0 年代とよ で わ 頃 な 跡 れ に から る は 5

た居館 書 『静 3 状に 四 れ る小 九四 岡県郷土研究』 に住んでいたことを示していると考えられる。 堀之内殿」 田原城主大森氏頼 明 応 三年 第九輯、 -に深良 ٤ あ って、 の西さい が、 御 殿場 安寺は 葛山 葛山 市 P 氏 氏 史研究』)。 興され が に 宛て 堀をめぐらし 寺 0 開 基と た

2 近

支配 0

 \mathbb{H}

原

/藩領

とな

り、

一六八三(天和三)

年以

降

幕

領

15

戻

0

カン

変遷 以 葛 降 Ш 幕 村 この支配 領 六八〇(延宝八)年 は、 六三二(寛永 以 九 降 年 1

村 1= で 配 T 方に 0 0 で 5 で 俸 る。 転嫁さ あ 給 末 る。 に で は 至 六九八(元禄十二) れ、 なく 旗 る。 本 松平 旗 領 旗 本の 本に 知 氏 0 葛 の家政 知 知 行は Ш 行を与えて自 年 . 以 公窮乏の 幕 金 降 沢 府 は . 0 旗 上 13 方 本 分賄 ケ 8 針 松平 田 財 で 村 政 をさ 0 負 ح 家 半 扣 n 0 分 # ま 支 が

村

. 千

福

村

の二か

村

であ

る。

村 高 と村 0

は

そ

0

誅求

15

苦

L

h

だ

河 郡葛 六七二(寛文十二)年 Ш 村検 地 水 派帳」 六 から 月 あ る。 駿 州 村 駿 高

郷 帳 四三 T 保郷 Ŧi. 石 帳 余 九 0 あ 六石余、 る 元禄 郷 帳 四 几 石 余 天保

帳 では、 七 七 七 家数 安 永 六 年 几 軒 0 (本百姓百 駿 河 軒 駿 . 東 無 郡 田 葛 水 吞 Ш 村 四 明 軒 細

寺じ

院が

石 疋 数 余 . Ŧi. 几 のうち 市 域で 八 九 町 人(男二七九·女二 田 は 反 方八 大きな規模 会と圧 九 石 倒 余 的 0 六町 村 に 四 畑 で \bigcirc あ から 1 多い 反 る。 馬 余 村 高 であっ 0 畑 四 方三 疋 る。 牛 石

余

三分二 \$ あ は 村 る。 内線 が下 畑 嶽 0 内 畑 Ш 下 と下々 に でとる 畑二 は 畑 五町 が、 七 で カン 秣 九 村 反余 は あ が 大野の まり生 入 下 9 原は 숲 入会七〇 産 々 方に 畑 + Ш 恵 町 九 元 カン ま は 村 れ 反 余 葛 0 な Ш 内 5

薪

で

Ш 池 1 Ŧi. う。 12 を カン 用 \$ 村 水 田 溜 葛 組 は Ш 合 沢 0 池 水 から 村 で深良用 水を引く石 0 あ 確 金沢 る が、 保 村 水 15 場所 両村 を引 堰二 は苦労したも が が 0 悪くて水 共 他 有 ま に 0 た 利 0 御 宿 が 用 金 思 保 村 沢 L たれ 村 b T 0 れ 地 新 る。 な る。 内 堰 0 カン 葛 ٤ 溜 3

仙 村 薬 年 内 師 に 寺 堂 は 京 朱 都 庚 印 知ち 申 恩院 高 堂 三石二斗 末 Ш 日神宮が 2 余 0 あ 0 控 る。 浄 え ح 地 宗 15 0 日日 景は 他 当き 島 山着 富 山青 常光 依着 士 京き

٤



写真 3-84 薬師堂

間社(除地九斗九升余)を別当修験明王寺、八幡社(除地

六斗)を袮宜弥右衛門が支配する。

稗 間 てこれら畑作物があげられているが、 Ш 0 手伝い 諸 菜 男は炭焼き・ 職としては、 · 大根 や木綿取りをする。 猟師二、 ・芋などをつくるとある。 「木挽き一、大工二、屋根板へぎ四 薪取 小売酒屋 9 小竹刈り稼ぎ、 一」が 畑には大麦・小麦・栗 いる。 多少の誇張はあ 百姓夫食とし 2 女は の他農業 Щ 出

> ほぼ半い たのである。 示されるように、 あ る。 その生産も百姓所持の鉄砲 分の三町 Ī. 猪や鹿などを追い払い 反余では裏作に麦をつくる両 八挺 猟師 ながら行わ 筒 毛 挺 作 れ に で

た。 (大一二(文化九)年正月に葛山村惣若者が喧嘩、盗の八一二(文化九)年正月に葛山村惣者が、この年に十五か条「口上」として成文化した、角力や芝居興業などについてさまざまな取り決めた。

3 近現代

明治期前半の

地方制度は、

8

まぐる

ぞいた市域の村々とともに第一大区三小区に編入され七四(明治七)年の大区小区制の再編により、水窪をの大区小区制によって第一大区五の小区に編入されるが、大区小区制によって第一大区五の小区に編入されるが、

るに

しろ米食の記載はない。

夫食確保

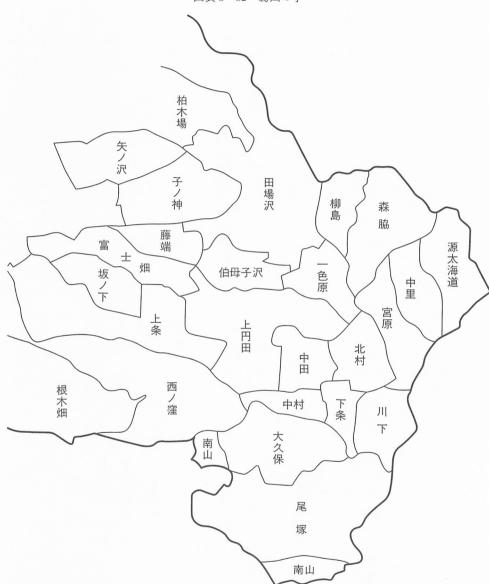
0

ため、

田

方

図表 3-82 葛山の字



図表3-83 葛山の字一覧

赤松(アカマツ) 一色原(イシキバラ) 大久保(オオクボ) 大附(オオツキ) 大端ケ(オオバタケ) 大平(オオビラ) 大洞(オオボラ) 大洞口(オオボラグチ) 尾塚(オツカ) 伯母子沢(オバコザワ) 柏木場(カシワギバ) 上条(カミジョウ) カヤノ木窪(カヤノキクボ) 川下(カワシモ) 北ノ沢(キタノサワ) 北ノ沢口(キタノサワグチ) 北村(キタムラ) 景ケ島(ケイガシマ)

高山(タカヤマ) 田場沢(タバサワ) 出払(デハライ) 中尾(ナカオ) 中里(ナカザト) 中ゾリ(ナカゾリ) 中田(ナカダ) 中村(ナカムラ) 西ノ窪(ニシノクボ) 根木沢(ネギサワ) 根木畑(ネギバタ) 子ノ神(ネノガミ) 八合(ハチゴウ) 稗畑(ヒエバタケ) 藤端(フジバタ) 富士畑(フジバタ) 古道(フルミチ) 堀太ノ沢(ホッタノサワ) 本欅洞(ホンケヤキボラ) 本洞(ホンボラ) 南山(ミナミヤマ) 箕洞日蔭(ミボラヒカゲ) 宮原(ミヤバラ) 森脇(モリワキ) 柳島(ヤナギシマ) 柳洞(ヤナギボラ) 矢ノ沢(ヤノサワ)

山居(サンキョ) 山居向(サンキョムカイ) 下条(シモジョウ) 上円田(ジョウエンダ) スガネ沢(スガネザワ) 須釜入(スガマイリ) 堰場平(セギバダイラ) タイラハヤシ(タイラハヤシ)

長役

場管

轄

X

域戸

整の

理 官 戸

合

が

制四

を廃

止

と戸公選

明

治

+

七

年

15

は

長

ことに

な

る。

25

に

八

八

2

入

れ

ら宿

れは

戸

長〇にの長

役場

は

御

宿

は

御れ

カン

カン

村

に募

組山

な

3

2

n

よっ

て 統 選

源太海道(ゲンタカイドウ)

坂ノ下(サカノシタ)

復活 とな 人 属 村 合 2 L が 13 C 年 り、 7 置 構 カン カン 15 再 民 戸 成 カコ は 選 近 長三 され、 U 0 れ 郡 第 0 世 た カン X 以 戸 人と 村 八 町 大区 長 来 萬 七 村 0 副 から 0 Ш 八 葛 置 編 戸 村 は 制 明 Ш 長 カン 連 4 n 村 カン 法 治 合 3 15 里 が 村 + 15

0

 \equiv

11

X

は

三

0

0

村

現

在

0

裾

野

市

に

なっ

13

村に置かれた。

八

八

八 (明治

年

町

村

制

が

公

布

3

れ

翌

八

定輪寺村・ 富岡村 里村、 合村 村となっ 十二)年 \$ 大規模な町 九 富 明 とな 出 治二十二 は 金 村 K 沢村、 ととも 0 町 須, 村 た。 身 村 山地 合併 者 組 年 組 村 に H が 合 几 富岡 ケ 合村役場 ٤ から 務 を 月に 町 田 行 8 解 村 村 わ 村 た。 消 施 組 に れ がは富 行 合 属 御 た。 2 3 宿村、 [を設 0) 富 葛山 n 岡 後 出 葛山 た 村 け 村 千 が、 は に は は 福 置 須 八 村 独 そ 下も 山 大字となっ カン 九 立 村 和も れ れ 九 大畑なおはた L 富岡 田だ IC 明 た 村、 先 組 行 合 村 立 治 村 た。 今 \equiv 政 長 組 5

裾 15 良 な 村 野 九 0 から 町 た。 裾 ٤ Ŧi. 年 な K 野 町 須 昭 九 に Ш 和 七 さら 合併 二十 村 ととも 七)年 15 昭 す る。 和 九 に小い 几 に 十六 富 Ŧi. 裾 六 岡 泉村 野 村 昭 年 町 は ٤ 和 に 15 三十 泉ず 合 市 併 制 村 九 から L が Ŧi. 施 年 T 合併 七 行 裾 15 3 昭 野 は れ 町 和 深 T

戸数と人口

査 に 七 よ Ŧī. れ (明 ば 治 八年 人 口 0 は 小小 四 区 表 編 立 男

0 戸 正 六八人、 13 八 が 大正 数 7 匹 二三一人女が二〇二人となっ カュ _ O 戸 兀 年 Ŧi. 時 であった。 代 度富 戸数一一三戸である。 か 村 P 戸 と人 昭 尚 自治区造 村 和 初 口 事 期 が 務報告」 八八八 非 は 富 常 成に関する諸 岡 15 (明治二十 村 增 で また一 ٤ は T 加 L い L て 人 T る。 一)年 表 九二五 0) 1 口 統 る。 戸 計 で 数 0 年の 四 で 2 は は 御 家 れ 人 葛 以外 口 宿 持 大 Ŧi. 村

0 生業 3 0 数値 0 変遷 は わ カュ らな 区 表 編 立 調 査

0

職

分

表

で

は

人

案 は 耕 Ш となってい 近 地 林 では、 世 ٤ 原 ٤ L 野 あまり T 七 三五 る。 は 田 圧 から 変わ 八 倒 町 __ 口 町 的 余 八八六(明治十九) 四三三人中 りで 3 六反余りに 15 な 畑 あ カン 地 り 0 から 多 たと思わ 農二八 対 近 世 L 车 生 百 れ 業 0 様 畑 な 水 が 地 Fi 几 田 誌 経 が 六 僧二人」 町 取 済 少 なく 調 状 草 熊 反

ま

た

羅宇竹を産した。

竹行李は

一八

九一(明治

二十た。

として「米麦、烟管所、竹、薪炭、材木ヲ産ス」下って、大正初期の『駿東郡富岡村誌』では、

がつくられ、とくにとうもろこしが多く産出された。る。畑山林が多いために、農産物もそれにかなうものとして「米麦、烟管所、竹、薪炭、材木ヲ産ス」とあ

が二軒できた。一か月に二○○個ほどの割合でつくら四)年ころに須山から作り方を教わり、葛山にも工場

れ

るようになった。

区分と払下げ 明治以降も継承されていた。愛鷹入会地の官民有 近世の葛山を単位とした入会地は、

や大野原などである。

地租改正

によってそれまで所

有 し入会地 なされ、 たため、 0 はっきりしなかった山 は人 愛鷹山 民有引き戻し運動や払下げ運動 びとの生活や生産に欠 も大野原もともに官林とされ 林原野の所有名義の確 カン せ ない が開始され た。 \$ 0 であ 定が L カン

愛鷹山の入会地をめぐっては、大畑、富沢、水窪や、る。

会地は含まれ

てい

なか

0

たが、

古くから入会のように

をつくって運動をおこしていたが、葛山は当初それに原町、沼津町、長泉村、清水村など多くの町村が組合はのます。

物産

10 げを受けた。 は が 加わらず葛山だけで入会山に対して運動をし、 また、 山元になって御宿、 愛鷹山 その時期は史料がない にはそのような入会地 上ケ田、 金沢 ため、 の三か とは 確定できな 村 别 が入会 払下 葛

てい た時のための契約を交わした文書がある。 治二十六)年に葛山と入会三大字との間 大字(三か村)とともに払下げ運動をし、 る。 払下 げ 0 時 期 は わ カン 3 ない が で払下 払下げを受け 一八九三(明 げ 3

している四か村入会があったが、

これは

葛山

が他

の 三

こうして個別に運動をしていた葛山だが、御料地に

なった愛鷹山

の官林の民有化をめざす組

織

VI

は

加

入し、

八 結成された。 九二(明治二十 この 組合の対象に Ħ. 年沼: 津 町 ほ なる原野 カン 0 には カン 町 葛 村 組 の入 合 から

使わせてもらっていた経緯があったことから参加した

使用

から

開

始

され、

現

在に

至ってい

る

愛鷹 沼 L た 津 Ш 町 組 13 散 合 カコ 己と改 時 0 15 葛 称 カン Ш 町 L から 村 払 組 下 九 合は一九四〇 げ Ŧ. を受け、 昭 和 二十 以 留 後 五年 和 葛 + Ш Ŧ. に 0 権 年 解 利 散 に

が

持つようになっ

とい

う。

一八九九(明治三十二)年に払下げが実現

した。

念し、 形をとり入会利用を継続 (明治二十二)年に御料 入会地を借り受けることによって官有 原入会地 る払下げ運動 地に することに 編入されて が行わ なっ れ からは たが、一八 た。 2 大野 地 れ 入 八八九 会 を 原 は 0 断

となっ わ 5 九一二(明治四十 たが、 一次世界 7 X IJ 力軍 大戦 従来どおり入会地として利用 0 0 五)年に陸軍の富士裾 敗戦 占 領 を経 によっ て自 てさまざまに I 衛隊 に 野陸 よる ルした。 軍 演習場 事 海習 情 そ が 0 変 0 場

急に 几 売られたため、 カン 村入会は、 葛山 九七〇 『の管理 (昭和四十五)年ころ を離 れ た か ら東

> 財産管理委員会共有地と葛山共有 現在 まとまってお 0 葛 Щ 0 らず、 共有 地 点々として は カュ 所に

X IC る。 ょ 2 0 T れ で共有し管理するところが少なくなっ は は 組 葛 P Ш 全体 個 人に 0 分け 共有を各区 たところもあ K 分割 り したためで、 た 転売 ので

15

ある。

れて全体

管理そ 洞は日 本 5 金 有 洞 共 は県と葛山 0 葛 I 蔭がげ 有林 共 ٤ 0 0 有 ザ 呼 共 ツボ \$ 林 スガネ沢などの共 などと、 ば 有 0 は県との n 財 でわ クリ る近 産管理 は 県 愛鷹山 世 けることにな が 2 契約では 委員 行 カン 雜 1 3 木 組 0 会が管理す 林 有林 植 合 入 ウ ワボ 0 林 会 から払下 共 いってい が 山 L 有 あ ク(木)を売 T が 林 る。 継 る 1 げに る。 る県行造 が 承 共 \$ 本 3 有 洞 なっ れ 地 とも 却 共 は た字本洞 た字箕 した料 林 有 本にはら は 広

0 共

が T 愛鷹山 管理 い る が、 L 組合より T そ 5 れ以 る。 払下げ 外は 箕 洞 葛 Ó 日 土 Щ 蔭 共有 地 は は 財 市 九 産管 外の 五. 人 理 委員 々 \equiv に 丽 会や 和 却 個 3

n

時

時

間

も歩い

て下刈

りに

行って手入れをした。

の人々

葛山 などを植林し、 は 八年 水が乏しい土地柄で一五年間 頭に水源 五区で分けて管理することになっ を保護するために は各区 スギ、 E が当 ノキ た。

形の上では葛山 カン 義 玉 売されるようになった。 L 何 £ P カン ・県の 人 0 持 地 ちし E 指定を受けてい だい 権 0 0 売買 一共有財産管理委員会が管理することに 12 ままであ 勤 0 め人が多くなって管理しきれず転 2 るところも る。 現在は水源の保安林として、 で登記上は 共有 地が 少なくない 昔 カン 転売されても名 3 0 誰 ため、 々 13

関 なっ したときにいったん大区の自治組 ころに わらない家も多くなっ 葛 関係する問 Ш 共有 発足し、 委員は三三名からなる。 財 産管理委員会は一 題を区の自治組織と分け 九八八 ているので、 (昭和六十三) 九八一 戸数が 織 のすべ 年に 一昔 昭 て現在 増 カン 大区 和 えて てを引 3 五. 十六)年 共 一の形に の人た から 有 き継 解 散 に

L

ていた行餘舎の校舎を新築することになり、

行餘

ちし、 長 副委員長、 「旧戸」といわれる一六三人から選 監事、 顧問、 区代表委員をおく。 出 「する。 委員

富さ 玉 産管理委員会が管理 公園として市に貸した貸借 田 富 財 から 場沢、 岡 産管理委員会から四 東富士演習場 一畑の雷さん、 地区 0 補償料や、 上城から各一名、 0 委員 E を兼任 Ŀ 関わる共有の管理についても、 城 払下げ地を市 L てい 0 してい 名が東富士 天王さんも 関係 下 る。 -条と中 る。 いの補 そ 0 0 几 演習場対策委員 運 葛 ほ 償料 村で一 名 Ш 動 か 0 公園 共 内 は 名で 有 葛 嶽 訳 Ш P 財 0 は 産管 雷さん 共 梅 あ 有 会の 葛山 中 0 里 財 里

嶽 南小 学校

委員会が管理している。

なる。

もに行餘舎を設立 葛山 一八七二(明治五) してい は 上 ケ る。 田 御 宿 御 年に 宿 0 在出 学 園寺に 金 制 から を仮校舎に 頒 4 布 福 され

の定輪寺の分校を設置していた富沢、 えた八村の連合によって一八八二(明治十五)年に 定輪寺、 大畑 続な を

加



中里の天王さん(葛山中里区所蔵) 写真 3-85

なる。

なっ そ た。 の後分校を統合した嶽南小学校は嶽南尋常小学校

なっ

そのため葛山

は初等科

0 3

Ó

分校として三麓

3 れ

ず、 た。

新築なっ

た初等科教室を売却して補うことに

学校を設置

葛山と金沢

の子どもたちが通うことに

南なん

小学校と改名して落成した。

L

か

し新築費用

が集め

名称変更を経て、 位 た Ł こなり、 置 り に移 L な が 転改築され 後述するように再び分校をつくっ らも 現在の 九二九 た。 裾野市立富岡第 さらに 留 和四) 年に 度 富 \$ 0 出 小学校とな 制 たり 村 度的 0 統 現 在 合 0

章御宿参)照)。

止され 校を統合し、 小学校は、 転をめぐる対立嶽南小学校の移 た。 可 今里舎 葛山 车 0 .の三麓学校も千福の分校とともに 小学校令により、 (今里)、 0) 学区 八 八六 開昇舎は が 大幅 (明治十 に (下和 嶽南尋常小学校 統合され 九 世 年 ic 須山 静 た。 出 小 嶽 学 廃 南 内

学圏としては北に位 延長され、 0 T 九〇八(明治四十一)年、 同じく通学に不便を感じて 再び政 置 府によっ L て 1 尋常小学校の年 た葛山 て統合が進めら 5 『と金沢 た今里や下 は、 限 n が 和 統 た。 田 六 合 15 通 年 0

に

よ

張 人々とともに富岡村中央部 した。 南部 の人々は絶対反対の立場をとっ へ学校を移転することを主

態は小学校問題を軸にしながらそれ 0 村 この カコ 長 け 対立 で 助 富岡 役 は 葛 が 辞 村内 Щ 職す 村 0 議 るとい 北 が 部 移転を建議したのが直接 と南 う事態に 部 から のみにとどまらず、 反 目 までなっ L あ 1 た。 当 0 時 き 事

た。

負担するということで一応の解決に到 不 転 立 政上 は 便を補うために地代は南部の御宿、 は せ 長 ず 期 にそれ 化したが、 までの 北部 敷地を拡張して増築 九一七(大正六)年に、 の中心は葛山であった。 千福、 0 た。 L 財 上 ケケ 北 政 田 部 上移 対 が 0

村

一の問題となり、

が 題とされた通学の不便のためである。 が 再燃した。 本校をそれ ろが一 金沢の住民が協力して分校をつくった。 この年 までより北 九二〇(大正九)年、 - 葛山 よりの御宿字宮原 0 中 里に、 地域を二分する対立 中 しかし駿東郡長 里と田場沢及び に移転 再三問 L

中

里分校を廃止するように指示した。

このため南

部

住

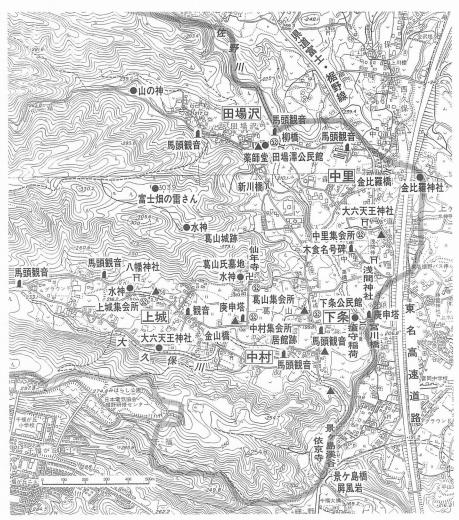
とで双方の合意を得、 民が反対して分村問題に 九二八(昭和三)年に御宿内の若干北 翌年嶽南小学校は移転改築され まで発展したが、 よりに ようやく一 転する

共働学校 農村青年 九)年まで、 九二八 丽 葛山 和 0 年 Щ か の中 3 に 九 農村 四四 青 年 昭 0 和

間 n 教育のために農村青年共働学校、 つくられた。 た岡本利 や社会や国家をか 古きち これ が、 自 は当時農村問題 んがえるという農本主 然 12 即 L た農村を基 通称 0 研究家として 一山 本 一義を掲 の学校」が お げて 知ら て人

安の目 0 地 3 月から二 始めたものである。 青年 青年の名前は見られない。 域に浸透することはなく、 が で見られ 集まっ 月末までの T た。 1 近在 約 たようで 一三棟の建物を建てて農閑期 Ŧi. 一日間 0 ある。 葛 働 Щ き の学校を開 0 カン 参加 人々 け \$ 者 に 行 0 は わ 中 奇異 れ に 全 12 葛山 が 0 カン

図表 3-84 葛山の集落



村内区分

現在葛山は

X

らなっ

てい

る。

城

中

村

下条、 六つの

田

場 カン

沢は最寄がその

ま 上

的

な生活基盤である最寄を行政的な区とし、

葛

Щ

区

を

統

図表 3-85 葛山の内部区分 (『葛山の民俗』より作成)

区		組	葬式組		
		1	- 111	0 20	
Ŀ		2	1 14	の窪	
	城	3	L	4ch	
		4	Т.	城	
		5(新)		/	
中		1	1	組	
	k.t	2	1	WIT	
	13	3	2	組	
		4(新)	4	WH.	
下		1	下	条	
	条	2		来	
	*	3	北	村	
		4	40		
中		1	F	組	
		2		W.C.L.	
		3	ф	組	
	里上	4		WIL	
	-	5	下	組	
		6	'	WIL	
		7(新)		/	
		8(新)	/		
田場		5(新)	下	組	
		1		UNIT	
	沢	2			
		3	上	組	
		4			
森脇	刊地	1~8			

地 域社会と生活

L Щ 15 か 字森脇に森脇団 移 た上城、 0 れ 自治会とは別になっ た。 行したものだが、 森脇 中 村 团 地 下条、 地 区は大字としては葛山 ができ、 中 田場沢、 T 里は一九七 い 中 る。 里区と森脇団地区に分 中 以下 里 Ō 0 は (昭和 最寄 であ Ŧi. つの 四 る カン 1十五) 区に 3 が、 移 年 行 葛 0

> 1 て述べていく。

Ш K より 全体で葛山区となった。 九 業務の一 五六(昭和三十一)年に 部を執行するために区が設置され、 しかし、 「裾野 町 その後葛山 X 長設置 は伝 程 葛

「大区」として、 た。大区は一九八八(昭和六十三)年に 15 なった。 は さらに 組 12 町の行政とは自立 分 カン れ てい る。 現 した自治結合とし 在 解散 は 戸 数 L から 現 增 在 え た 0

形

ために各区とも組が増 X え 葬式組 も変化 してきてい

村 \$ 义 表 最 寄 3 田 全体 場沢 85 は で葬式 は 戸 区と組と葬 数 で手伝 が 少な カコ 式組を示したも 0 っ T 5 たころは た。 組 は 0 であ 複 数 る。 あ つ 7 中

下

条

0

組

は

カン

0

て今の

組

を中

組

組

を下

組

三

揃

っていくということに

なる。

脇 北 四 もとも 中 組 0 組 秋 は を北 九〇 とは 北 葉 村とい 神 組 九 独立し とい 社 0 明 ってい 1 常夜燈に、 治四 た最寄とい さら + た。 E 一年)と刻 この 北 中 う意識 組と下組をあ 村 S ま たっ れ 下 が 強 T 条 は 1 カン 下 る 中 わせて下条、 0 こと 村 条公民館 たと思わ 最 カン 寄 3

とし 自治 T 0 組 役員を定 織 現在 8 葛 + てい 城 山 全体 など る。 0 をまとめ そして、 Ŧi. 区そ る れ そ ぞ X 0 長 n ほ P が カン 葛 組 に Ш 織 全体 五区 は な

共の止

れ

る

員名 内部 な る。 萬 簿 Ш 0 役員 全体 15 よると各区一 を定める。 0 役員 けは、 兼 八 九 務する役員が複数い 九 九名で、 八 年 0 合計 葛 Ш 各種 九五名に ることに 寸 体 な 役

> 名(葛山区として市 長 る。 神 葛 社 氏子総代各一 各区ごとに区 管 Ш 理 集会所管理 運 営委員 へ要望などが 名 長 運 \equiv 共有 副 営 区 委員 匹 財 長 名 産管理 ある場合に 四四 体育委員長、 含 名 厢 で 委員六~ 問 あ は る 名 X 長 七名 相 子供会会 八五名が ま 談 役 浅

仕 は浅 有 されて、 時 事 財 は 九八八年まで葛山 間神: 産 のうち伝統的なことに 各 管 X 長 理 大区長もなくなった。 社 委員 の当 をまとめ 番 会 区 が 引 る は 0 大区 区長がつとめた。 大区 き 継 関 長 制 1 をと C しては、 から しかし、 お る カン 0 T れ 実質的 2 T 大区 たが、 大区と 15 た に 大区 葛 が そ T 廃 0

長 当

が、 道 る役職 組 路 長 Ŧi. 係 田 区それぞれ 場沢 自 0 部 主 他 農会会長、 防 15 0 例 協 级 会長、 をあ 議 0 委員 X げ 一役員 寺世 自 ると葛山全体 主 顧 は 区 話人、 問 防 E 555 よっ 副 事 東富・ 会長、 務会計 て多少 の役員 士: 演習場対 体 育 K 違 なっ 7 副 [委員] は Ŧi. T 組 あ る 長 0

織

が

あ

る。

本村総代を代表にして、

葛 員 まって本 などが n 3 0 あ 村 織 る。 0 0 組 ほ

カン だっに、

上城、

中村、

下条の三区が

本村の 総代以下、 行う。 共 本 有 三区の区長、 ・村総代は三区 地 0 管理、 本村単位での行事、 副区長、 で 年ごとに 道路 順 係 に交代する。 顧問 道普請など などが

神社と寺院 葛 П Ш には、 全体でまつる神社が三社あ

る。

中

单

に

あ

る葛

ĬII

0

氏

神

0

浅

間

神社

本

一村の組織をつくってい

る。

制

で、

中

单

1

田

場沢

↓ 上

城

中

村→下条の

順

送りで担

中 7 あ 里と田 ま つられて嶽 1 この 城に てまつる神社 場 ほ 沢 ある大六天王社、 は の雷さんと呼び慣わされ カン 各 に 々 上城、 0 が、 X 1 (最寄)で神社 中村、 幡神社 それ 上山山 下条が本村としてま に愛鷹 T をまつ 乃神社 いる雷神宮で Ш 0 0 であ 八合目に てい る。 て

浅間 神社 は 八八三(明治十六)年の「神社明細

中

里は

大六

天王社と金比羅神社、

田場沢

は

Щ

「の神社

C

あ

る。

替えの 調 れ 0 の後方に富士山 + る。 本祭りが四 五)年とある(文化年間は正式には十四年まで)。 に 都 本 は祭神 祭り 合に合わせて変更された。 は 月三日で、 が木花咲耶姫命、 本来四 を望む立地となってい 月十五 十月十五日に 日だ 創立 が 祭礼 は一八一八 る。 仕 お 0 事 25 世 まちが 祭日 P 話 年 は、 度 は (文化 当 切 行 社 番 春 0 わ 殿

をつい 当する。 0 に 0 い、七五三やお宮参りもこの氏神で行われる。 1 石段に子ども 母親と祖母 お宮参りは、 ボ 1 て供 ル 神 大会が開 え氏 事 が 0 を 子の 子どもを抱い E あとの 1 + カコ ク れ 家 0 ヒト てい E 1: 直会は、 ん寝 配 エとい る。 0 かせ たとい てきて供え物を IE かつては当番最寄で餅 月に てくる。 って生後一〇一 うが、 は 初 詣でに 現 在 新 は 神 ぎわ 日 生 ソ 児 社 目 フ

6 が、 大六天王神社 として親しまれている。 神社その \$ のは葛山 0 おまつりは 全体の神社で、「てん 大六天王神社の世 上城の一組と二組 のうさ から 行う は 世:

写真3-86 八幡神社の祭り

神宮 富士 りに 畑 の参道の草刈 中 0 雷 里 さん 田 は 場沢 上 城 り当番は 組 城 から 中 浅 世話をする。 村 間 神 **↓** 社 条の の当 順 番 で 務 同

まつっ

てい は

る。 雨 乞

祭日は七月二十日で、

下 15

条 から

0 葛山 辻 に戦

を で

雷神宮

5 0 神 で

氏神では

な

全体

襲 あ

で決 る。

いまっ

T

る鍵取りが行う。

祭日は

七月十

应

日で

建てて行う。祭りの世話は下条がするが、

愛鷹

Ш

0

雷

たが、 祭日 神社 れ 戻すまでご神体 n 七六〇(宝暦十)年 たところにある。 た。 る。 は 村でまつる八幡神社 15 九月十 H つまり、 祭りはそのまま八幡神社の 合祀され 城 に 鍵 Ė だ 0 取 た。 で、 ない が、 0 九七五(昭和五十)年ころにご神体 「神社 0 家 現 まま元宮で祭りを行ってい 九〇 明細 九〇六(明治三十 は から 在 あ は 九(明治四 調 その 上 城から北方へ によると、 あっ 前 後 十二)年 たところで行 0 日 九 曜 年 少し登 創 15 日 遷宮 に に 建 行 た。 浅 は を 間 わ わ

だという。 だだ 社 Ш が 15 乃神社 \$ 本来 鍵取 は は 9 上 四四 とい 城 月 から愛鷹山 わ + れ る家 户 が 十二月と年四 登る途中に ある。 祭日 は あ す る。 る 月 \$ + Щ 七 乃

日

比羅

神

社

は

金

沢

٤

0

境

に

あ

る。

月十 中 里 Ŧi. 日で 0 大六天王 あ る から 神社 その も天王さん 前 後 0 日 と呼 曜 日 ば に 行 れ わ 祭日 れ る。 は 七 金

つの る。 \mathbb{H} ころ 場 とも 沢 か で 3 ま カン は 0 最寄 鍵 る 取 Ш 0 0 (区)でまつる神社 神 0 家 社 で は ま 集 落 0 0 0 T 西 に 方 1 なっ 13 0 \$ Ш た 0 0 中 が に い あ

地で、

急流

P

淵

が変

化

iz

富

み

行楽客も多

葛山

では

Ŧi.

0

0

X

0

ほとんどの家

が

仙

年

十寺の檀

家

で

氏 建 帳 数 が あ あ 信 から 立されたとあ + る 仰 現 に 軒 する ずずつ 仙年 寺 は、 在 地 伝ではも 浄 恵が 寺 に あ 移 山岩 る。 0 る 檀 宗に変えたと言 L 惟き 信の 家は 0 宗旨も と上 八 仙年寺に 開 七 ほ 一の字 基 九 カン 真言宗 に 明 は Ща \$ 治十二)年 葛山 四七 居 御 1 伝 で K 宿 えら あ あ 氏 九(文明十一)年 Ŀ 0 0 0 たも 歴 0 ケ n た 代の墓 T 0 「寺 田 を葛 0 を葛 院明 る。 金 Ш 所 沢 に 細 氏 が に Ш

方道 温場に 筋 別に景ケ島は 建 から南 立され 佐野 依京寺 てい 川を下って、 る。 が かある。 「寺院明細 依 集落 京寺 帳 は か では、 佐 3 野 は 川 離 0 れ 六二 た根 中 0

> が 0 師 葛山 管 (元和六)年 0 理下に 彫刻と伝えられるとあ 0 人 ある。 々 創立、 に よっ 刀口 本 て行 月 尊 四四 0 わ 日と八月十六 生 れ る。 嚴 る。 現在 正 観 景ケ島渓谷は は 世 日に 無住 音 菩 観音 薩 で は 弘 市 0 仙 大祭 法大 年 寺

を利 病気 民館 14 5 であ 0 田 用 T が 0 場 治ると してい げてい 念仏を 並 沢だけでまつっ びに ある。 る。 あ る。 げ わ た れ 田 二つの 場 沢以 T 願 毎. 1 月 掛 丸石 外は念仏 るの 旧 けをして治るとお 暦 0 が は + あ 薬 り 師 講 堂で、 1 日 は ح VI 薬師 X れ 果 の公民館 田 に触ると 1: 場 で念 沢 公

嶽 0 雷 Eさん 嶽 \$ 知 0 雷 n 渡 3 h 2 は T 雨 1 乞い た。 0 神 九 Ŧi. 0 年代 T 沂 郷 ま

愛鷹 には 、雨乞い Ш 参 0 2 をした。 八合目と たが、 長泉町 S 5 う高 つうはもっ や沼津の 15 あ と近い字富士 3 0 方 C からも来てい ZA どい 畑 干 0 ば 雷 0 3 0

<

は

日

照

りが

続

1

て農作

物

0

被害

が

心

配

され

ょ

で に

時



写真 3-87 嶽の雷さん

C

\$

は

シ

タン

から

たという言

5

伝え

から

あ

唱 富士 備 れることになっ え 丰 え 畑 に 唱 雷 0 分 雷さんは第二 れ えると、 神宮の幟を立てる。 カン を繰 れ た。 0 返す。 もう 方の な お 東名高 人々 方が 少し休り 嶽 が 速道 0 雨 雷 雷 晩中火を燃やしなが h 3 路 で 3 降 h から は h 3 通 0 何 せ 奥に る 度 立 た た 8 願 1 隠 8 唱 だ ま 移 え れ え 丰 転 IJ Ł な

必 1

ず う。

戸 嶽

カコ 0

3 雷

人ずつ

泊まり

が

1+ 0

参 0

石 で に参る。

嶽

0

雷さんは男で、

富士

畑 Ш

0

雷さん

は女と

さんへ行くときは、

葛

0

最 た。

寄

0

祠 が

あ

て

そこに

蓑 出 て、 笠

雨ござ、

御神 で Ŧī.

酒

になどを

移り 繁栄を 周 行 辺 地 粥の行事 わ 願 域 れ でも る 0 行 は 珍 わ 0 葛 Ш れ 粥 いい T で は 15 う行 た が 家 を新 事 市 が 行 築 域 で家 わ したとき れ 移り る。 粥 に カン 家 が 0 今 T 移

先達 配 る 1 を着てわらじ 0 ながら家の は、 移 0 が引き受け だ 粥 手 広 は た 柱 が 1 をは K 0 建 現 男 ることが多い。 11 前 衆 在 $\overline{\nabla}$ 1 0 粥 直 は 0 た先達が家の繁栄を願う歌 歌 うち をつ 会で を歌 け 両 1 え 親 T ン 仏器 ま る ボ 0) わ 揃 ガ に盛 から る 2 サ \$ 減 T 笠 0 1 0 を た小豆 で る た た 者 あ カン る。 を 8 が 3 年 歌 な 0



写真 3-88 家移り粥

あ

メデタイな

経という。 ながら歩く。このときの歌を家移り粥、 を茅の箸で柱一本一本につけ、家の神に差し出してか 人々に配る。 家移り粥の行事には火伏せの意味があると 他の男衆も先達のあとについて歌い または家移り

> と考えられていたのである。 であり、 雪 ह्य 歌は水を呼ぶまじないで歌詞に出てくる霜、 露などの言葉を唱えることで火をよける

ここのヤカタはよいヤカタ

四方八方 あメデタイな 八棟造り

霜柱 氷の桁に 雪の梁

幸いツク 雨 0 タレ (続く) Ł に 露のフキグ 幸いツク(続く) サ

鶴は千年 美村の大助 亀は万年 百六ツ百まで トウホウ菩薩は八千年

寿家請負で

1

ヤハイヤ(栄家繁家)の八棟造り

ヤウツリガユをすすろうや(『葛山の民俗』) 戌亥の方から十三本の柱へ梁をあげて 延命長者のヤウツリガユをしんぜろや いう。先達のつける笠や蓑は雨具で雨(水)をよぶもの



依京寺境内の閻魔大王 写真3-89

は 道祖神と庚申塔最寄の入口にある 0 カン 入 え カン \mathbb{H} 場 П れ に建てられ T 沢 八 各最寄の 1 八 る。 中 Ŧi. 里に一 (明治十 入 たといえる。 \Box れ ら道祖 に 基ずつ六基の 八)年に下条、 建てら カミ)が多い。 神 は れ 庚申 現 T 在 サ 塔に 北 る。 地 1 神社 村 カン \$ 3 カ 明 見て ミの 中 同じこと 村 細 も最 存 調 上 在

寄 が

景ケ島依京寺の境内に

は

閻魔大王像や奪衣婆像

P

年

が

12 城

葛

Ш に

は

庚申塔や道祖神(サイ

地蔵菩薩像など多くの

石像がある。

観音の大祭の

八月

る 仏

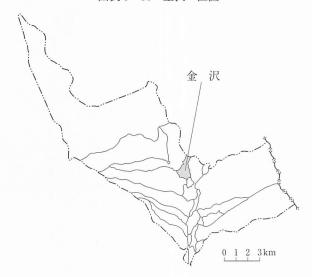
参考文献

|葛山の民俗』(調査報告書一) 裾野市史編さん室 九

九

群をひとめぐりし、 ように団子を三つく 七 日 は 地 獄 0) 釜が 本堂で和讃をあげる。 あく わえさせてから大祭参 日とさ れ 閻 魔 0 加 \Box 者 を が 封 じ 石

図表 3-86 金沢の位置



動車

企業の用

地

に

2

0 で

周 は

りを T

囲

れ

1

ながら、

落

てのまとまり

を持

つ

1

る

0 ま

が

金 T

沢で

範域を持たない

地区

あ

るが、

東名や県道、

大手自

間 谷

神

社

0

杜 築か

\$

同様

である。

市内の中ではそれほど広

0

奥に

れ

た金沢堤や堤の脇にまつられてい

る浅

1

るに

\$

カコ

カコ

わらず、

落着い

た景観を持

つ。

そ

れ

は

0 わ

地区である。

度

谷間

の集落の

県道富士・裾野線や東名高速道

路

が

間 中

近に迫って に入り込む れ

T

1

る。

真偽はともかく、

金沢はその名の通

9 沢 た

٤

第 節 地 理 的 概要

第一

金

沢

金沢堤と東

む 金沢という地 沢 が あ たの 名 でこ は 0 金 名が 0 まり 付 鉄分を含 1

(瀬名沢)を境に 位 東 は 置 御也 宿 西約 金沢は裾野市中 して葛山、 北 れは御殿場・ 南 南北約 心部より 市 は 同 西 じく は今里 九キロメ 北方に位置 萬 山 お と 上^ぁ ょ 0 広さ 25 ケザ 佐 田た 野の が JII あ 東

接し てい る

ス 3 ギ 地 な 地 そ 形 り 利 用 ど土 0 Ł 起 間 伏 丰 15 K 0 狭 南 全 まれ 琙 植 富 12 が富一 枝 林 h だ 状に 地 た 浅い 地 士 台 延 形 Щ 東南 状 C 谷 75 た馬 あ P 0 亚 る。 台 麓 垍 状 0 0 背 末 地 低 0 は 平 0 端 丘 水 陵 坦 ような に は な 砂 雜 傾 木 斜 低 礫と火 丘 林 地 東 P カン 陵

右 0

に

現

れ

る。

カン

し金

沢の

集落の

中

心

県道

を

通 路 1:

T 手

1

るだけでは

まっ

たく見えな

10

道 は

カコ

3

東方向

をくぐるとまも

なく上

ケ田、

そしてすぐに

金

沢

から ガ

道

路

1

街

地 0

カン

ら上

1

溜 0 陵 Ш と台台 湧 灰 8 き 洲 15 水 覆 から 地 あ 15 が わ 5 挟 あ n る。 ま T 湧 お れ た字上が り き水と 0 上 開 共 川かわ 墾 JII に 及び 3 に 浅い n は 横さ て畑と 古く 谷 山岩 下北 間 カコ な 15 3 0 広 谷 金 0 が 沢 T 頭 る 堤 に 1 る。 水 ٤ は 小 1 丘 量 3 0

食 金 用 流点で峡谷をなし 水源と 沢 JII 3 12 たなっ 合流 15 佐 てい して 野 て III 葛 Ш と合 中里なかざと 水 る。 田 金 流 地 沢 先で台 灌 す 0 る。 水 集 落 佐 || | | | | | た は 野 あ 川 坦 の余り 2 面 は れ を ح 深く浸 3 水 0 0 は 流 合

る。

を

L

٤

東 側 近 は 東名高速 地 X 0 道路と 北 側 は な 1 0 \exists タ自 T い る。 動 車 ま 研 た 究 所 西 側 用 0 地 台 Ł な 状 地 り

路

に挟

まれ

た台

状

地

0

裾

部

に

形

成

3

n

T

る。

な

構築物

から

あ

る。

県道

カコ

3

0

西

0

入

口

に

は

公民

4

は 住 部 宅 地 0 谷に として開 拓 発 県 され 道 富 T 士 . い 裾 る 野 線

か斤 れ陵 た 小 集落 0 T 1 き、 東名 高速道 を市

あ

0

て

集落 家 と入ると、 す 々 は 0 奥に 東 側 その には、 進 すぐに む 谷 間 東名 0 金 道 中 高 沢 は に 谷 速 堤 固 道 間 から ま 路 目 0 と下 T が 0 建 通 前 0 0 15 0 てい てい 開 T 1 1+ < てく る。 る。 さら る。 金 沢 2 に 0

次に K 0 0 立 は 集 不落は 金 地 沢 丘. す る 堤 陵 お 地 お 0 0 末端 域 西 よそ三つ で 側 あ に に る。 位 あ 0 る 置 地 地 ま す た 域 る 域 地 15 集 蔵 分 そ 落 堂 L か 0 T 0 れ 集落 境 周 T 辺 1 に は の幹 る。 そ あ n 線 る ま ぞ 沿 地 域 1

金 そ 重要 掘

調

査

が

実

施

れ

さらに

としと ン

から 1

九

八

兀

和

潰

跡

E

確

認

3

れ

た。

は

土

+ 発

九

年

東名高

速道 3

路

福野

1

タ

チ

工

ン

ジ

0 留

路

線 Ŧi.

3 と言える。 0 n 南 た空 端 に 蕳 庚 申 0 塚 中 に れ 金沢とい 3 信仰 う集落が形成 対象物 などに 3 t れ 0 T 7 X 切 る

東名を挟

んで東側に愛宕神社、

同じく東名西側、

集落

敷と決定したため、

翌八五(昭和六十)年、

口

目

0

発

第 歴 史概

1 中 111 以 前

九

Ŧi.

一六(昭和三十

一)年

に

金沢

東

石 れ

石

構 富な上川温 断 す る 道 路 遺 が豊 跡 I 事 で、 側 0 縄 海 文時 抜二 代の 一六九以 ± 一器片 0 上川 が 発見 丘 陵 3 南 れ 部 を

速道 ま た 路 0 九六 路 線 Ŧi. 内 に 丽 な 和 0 四 上十 たため、 年に は 口 六七 Ŀ 川 留 丘 和 陵が東名 四 十二)年、 高

> 土層 ートンチメ 掘調 が 出 + 中 0) 查 L カン 火 が 3 Ш 実施さ 基 約 灰 盤 四 0 万 口 れ 点に 黄 砂 た。 ·礫層 福 及 土 層を掘り Si が 0 縄文時 堆 結 積 果 り込ん L 代 表土下 そ 0 で住居 土器片 0 下 12 . O 厚 址 と石 黒 褐 3 など 色 六

類 腐

遺 構 が検出され

完形土 した。 鏃 址 県下でも る 遺 住 構 器 は 石 居 が 匙 のほ 址 縄 な あ 文時 類 り カコ 六軒、 例 で 石 か磨製と打製石斧、 代早 \$ 錘 縄文時 から な 玦 礫器、 状 土 期 代早期、 坑 カコ 石 ら中 器 七 は 装身具 期 石 __ 前 \coprod 前 一点も 石 を立 0 期 半 玦 \square ま 状 で 中 あ T 石器 多量 た遺 り、 期 0 \$ 0 そ などが 土 構 0 0 磨 7 0 思 数 石 نے 量 出 لح 集 わ

沢 代 大森 に 0 2 葛山かずらや ちなんだ名前となっ れ . 以後、 葛山 性き 忠れただ 系図によると(『市 古代末まで遺跡の資料 =一男景が 忠だ てい 0 子 性が る。 史 景が な は 金沢殿 お はなく不明である。 付 録系図 惟 忠 E 0 集)、 長男は い 金 初

沢 御宿、

|男景忠は上

田

を姓としていることから、

0

氏 た形 は初 跡 期 が 0 みら 段階で、 れ る。 中 n 世 3 後半 0 地 域 までは葛山 勢力を拡大し 氏一 族

T 葛山

0

領 1

III 降 で 氏 と支配 葛 あ Ш 0 氏 たと考えら が 0 移り変わり近世 後退と入 れ n るが、 替 わ をむむ 0 T Ŧi. かえる。 六九 後北条、 (永禄 十二) 武 田 年 以 徳

2 近 111

瀬世 川を介して深良村と、 近世 の金沢村 今 挟まれ 里 村 北 0 東部 は富士山麓大野原に面 るように に 位置する。 御 宿 村 上 東は黄 ケ して ´田村

5

る

窮乏の は 年 (延宝八)年 以降 支配 旗 本 ため、 松平 草幕領 は 家の支配で幕末に に 降 領知 戻ってい 六 小 三二(寛 の葛山 田 原 藩領となり、 る。 永 金沢 九年 一六九八(元禄十 で至る。 ・上ケ田 以 降 旗本松平 幕 六八三(天和三) 領 村 の半 一年 氏 一分は 六 0 一以降 家政 八 0 そ

あ

る。

駿河郡葛山 誅求に苦しんだ。 村検地水 張」 一六七二(寛文十二) が ある。 年

号)。 るが、 七反余 の 三 宗京都 士 と金沢村の両村で引水する溜井 六六人(男三六·女三○)、 駿 三六(天保七)年には家数二 山 村 九石 村高 石で圧倒的 東郡 浅 坊による富士 伏免御 ح 金沢村内に檀家は 間 万福寺末万念寺(一まんまんじょうまんまんじ 余 は 0 金沢村反別並 ほ で 除 八石余に 天保郷 正 0 か 地 に 保郷帳六 祈 畑 から 浅間 念 峰 勝 帳 あ 0 銘細書差上 修 5 ちであ た 一一一石余である。 神社 賄 行 1 ない。 石余、 0 富士 L 八七五 馬一 をす 後、 七 る。 神明社 畑方は 郡 軒 る一 ヶ帳 また、 元禄郷帳 八 から 山手役米は 村山山 內 疋。 月 明治 ・愛宕神社などが 0 」『市史』 反別 八日より二夜三 八三六(天保 |村(富 村 下畑二 八年に廃寺 あ 軒潰 内に る。 田 . 田士宮・ 天明高 な 兀 方 れ = 一反余 は 反別 町 市 葛 は 余 七)年 村 が 人 Ŧi. 帳 0 黄 Щ . Щ 別 日 富 檗 村 八 九 八 あ 町

一六月

駿

州

域

0

改定が

なされ

た。

その

ため、

黄瀬

川

を境に

市

域

七一

(昭和四十

六)年に市

制

が施行

3

れ

現在

0 裾

野

市

は戸

長公選制を廃され、

戸長の官選と戸長役場管轄

東西

に二分され、

金沢は

御

宿村

ほ

カコ

()か

村

0)

X は 区

り 六(文政九)年には、 日野の 村 七 内 。 一 五. Î 九名が罷免を願 徳 五年、 三八年来当村に居 組 頭 源 い 七郎 出 T 1 の私欲、 住してい る。 また一 勝 手 た近江 八二 に

3 近 現代 玉

出

身

0

利

兵

衛

から

帰

玉

[を願

1

出

T

1

る。

行政区 一の変遷

大区

Ŧ.

0)

小

区

٤

編入され、

八七

四

明

治

七

年

0

大

尚 成

近世 年 の大区小区 の金沢村 制 は の導 入によっ 八七二(明治 T 第 五

制 に X 第一 小区 \$ 大区三小区に編入された。 制 八七八 0 再 編 に (明治十一)年 より、 市域 0 の水窪以外の村々ととも 郡 区 そしてこの大区 町 村 編 制 法 に 小区 ょ つ

カコ T 廃 れ ることに 止 3 れ 再 な び近世以来の る。 L カン L 金沢村に 八 八 四四 民選の (明治十 戸 七 長 年 が に 置

に なっ た。 よ

域

に

組み入れられ、

戸長役場は御宿村に置

かれること

翌八九年に須山 0 0 八八八 行 政村 が誕生 (明治二 村 しく . + 富品の 一)年、 金 沢 村 は . 市制 深れなる 他 0 町 村 村 0 制 小い か村ととも 泉村 0 公 布 1 15 より、 12 ò

富

兀

は

富岡村と 出 村 に属すことになっ 町 村組合を設けて、 た。 財 須山 産規模の小 村 富岡 さい 村 組 須山 合村 を結 村

年に した。 村 町 出 村組合を解 身者 組 合村役場は が 務 8 消 た。 富岡 そ 富 0 村に 岡 後 .村と須山村 置 カン 1 れ 九 九 は 組 (明治三十二) 独立した行 合 村長 も富

政村となっ た。

+ Ш 併 村と富岡 L 戦 後 年に T 裾 野 は深良村 村が裾野 九 町 五二(昭 が 誕 が、 生 町 L 和二十 に た。 合併 九 七)年 さら Ŧ. して裾野 七 昭 に 15 小 和三十二) 泉村と 町となり、 九 Ŧī. 六 泉ず 年 ic 丽 村 は が 和 九 須 合

図表 3-87 金沢の字



図表3-88 金沢の字一覧

大久保(オオクボ)	中道(ナカミチ)
大棚(オオダナ)	西久保(ニシクボ)
上川(カミカワ)	又ノ倉(マタノクラ)
田久保(タクボ)	横山上(ヨコヤマウエ)
手城山(テシロヤマ)	横山下(ヨコヤマシタ)

戸数と人口

査」によれば、家持二○戸、人口一一

八七五(明治八)年の「小区表編立調

に

関する諸表」では、二七戸、一四六人である(『市

治二十一)年頃の「御宿村ほか一〇か村、自地区造成七人(男六〇人、女五七人)となっている。一八八八(明

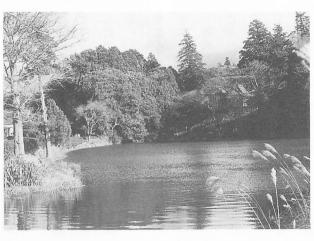


写真 3-90 金沢堤

告」)。 史 が四二七二人、一九二七 九三七(昭和十二)年が六一七六人となっている。 五二戸、 四 - 三四二号)。また、一九二五(大正十四) ちなみに富岡村の人口 四〇〇人である「大正十四年度富岡村事務 (昭和二)年が五二五五人、 は 九一 七(大正六)年 年 ic 報 は

世帯、 加となっている。 比べると世帯数では約六倍、 八九四人である。 九七五(昭和五十)年の国勢調 六一三人である。 また一九九五年には、 これ 人口 は 査によると、一 では約 八七五年の 二四四 Ŧi. 五世 倍 統 0 計 增 几

三反五畝九歩と、 反一四步、 町 た字上川田 行李製造 四反九畝一四歩、 林四二 1に溜池(案」では、 一八 八八六 水田は少なく耕地 町六反八畝二七歩、 (金沢堤)が 畑一七町三反四 (明治十 田 町 あ 九年 九反] り 0 0 周 畝 畝 多くは Ш 囲 林 一七歩、 地 歩、 お 原野二八町 誌 よそ 畑で 竹林 取 調 宅 あ 地 五. 草

八七

Ŧi.

(明治八)年の

「小区表編立調査」の

職分表

農業に従事するも

のは六五人となっ

ま

沢さ

た前 では、

述

0

地誌

取 調

草

案

で

は、

物

産

15

大小 てい

麦 る。

•

蕎

宿

〇間

で水深は深いところで一丈余り、

金沢の用

水とし

て利 用され

平 炭 農業 玉 蜀 麦 ま の産出 ・玉蜀黍 均 炭 黍 れ 七 黍 焼 1= の産出 主ト は キヲ業ト 『駿東郡富岡 頭は 年 俵 間 シテ玉蜀黍ヲ栽培セリ」と書 額が多く、 四 ・炭・材木等をあげている。 を産出 年間二五〇〇俵と下和田 三〇〇俵、)年頃 シー から須山 ケ年約 村誌 L やや てい 四 I I I I I 千俵 ・時期は下るが大正初期に る。 に 村 は より竹行李製造 余の戸 また同 ヲ沼津三 本 村 書に 数 に 島 とくに炭と玉 で 次いで多く、 カン 林業ト は れ 二売 戸 てい あたり が IJ 伝 八 る。 タリ ・シテ わ 九 編

0

金沢では

一か月八百個、

年間八千個を製造し、

I

葛

三と富岡村中で最も多く盛んに行われていた。

校 八七二(明治五)年に学制 が 頒 布 3 これ、

科の 当初 不要になった本校の 運営維持を各村に任せることとなった。 翌年には上ケ田 南小学校と改名した。 餘舎を設立する。 表者の寄付金で賄うこととなっていたが、 一八八二(明治十五)年に Ш みの分校を設置して各村に学資金を返賦し、 の湯山半七郎家の所有地を借用し、ゆやまはんしちろう . 学 分校 3 定輪寺・大畑 の予算を上回 0 分校 上ケ は千福 は上ケ田 ・金沢 田 さらに一八七六(明治九)年に り莫大な不足金 が行餘舎の定輪寺の分校を設置する。 南 心息 0 児童 この 北 · 葛山 御宿 は 両 行餘舎は校舎を新 袖の初等科教室は売却され 経費のうち、 は に 設置 本校 · 千 葛山 3 福にそれぞれ初等科 から れ 残っ 通うことに ・千福とともに行 費用も各村 建設場 金沢 その後、 た。 新築費 その 0 築 分校 は 児童は 所 L 初 ため 角は は 0 嶽 代 0 御

八八六(明治十九)年、 県の布達を受けて県内の 学

てその代金で不足分を賄うことが考案され

することになっ 小学校を廃して、

た。

ため 年

分校

の生 の四

徒

は、 年

本校であ

に

嶽南尋常小学校

カン

0

分教

場と

小学校 る嶽南

より

\$

北

に

位置 残

して

1 間

る金沢と葛山

では子ども

その

小学

校

り二 その

通うことに

な

そこで、

年 0

開かい 0 X 0 分校とし、 困 昇舎そして須山 が 大幅 難 なき考慮 に 統合され 今里 心して、 学校 0 子ども 須 ることになり、 が嶽南学校に と下 たち 和 \$ 田 下 0 学校 今里舎と下 統合され 和 田 を嶽南 0 分校 た。 に 小学校 和も 通 通 田だ 学 0 わ

九〇八 嶽 嶽 15 を学区とした下 る 延長されたことを受けて、 が、 南 南 小学校 小学 その 明明 区 労治四 後 0 カン 下 3 7 一八九二(明治二十 分離 和田尋常小学校が設立され 和 一)年、 田 分校はそのまま存続することに L T 尋常小学校の修 須 Ш 翌 村立尋常 五)年に下 九〇 九年下 小学校 業年 和 T 限 田 和 を設 と今 を六 る。 田 一尋常 立 年 单 な

良

小

富

出

須

山

0) 0

各行政村

が

誕

生

L

須 に

Щ

は

八八九(明治二十二)年

市

制

町村制

0

施

行

より、

中 央へ 移転するよう要求した。 L カコ し費 用 0 問 題

尋

村

0 通学

に不便を感じて、

下

和田と今里ととも

15

本校

を

あ

務部 東郡 より 常小学校に高等科を併置することとなり、 には一九二八(昭和三)年に するように て北 行 れ 单 り と田た は 前 九〇〇(明 長 2 たことだが、 部 カコ 出場沢お ら本校 嶽 0 指 南 移 南 九二〇(大正九)年に、 転 部 示さ 小 0 治三 学校 を御 住 地 は 実現 X れ 民が協力し 十三 との その 0 た。 宿 しな 0 0 年 宮原 そ 間 後一九二五(大正十四)年に 通学に不便を感じてい 高等科 15 カン に 0 小 に移 て中 ょ 再 た つ 学校 り 25 め 今 が併 対 転 里 里 令 15 立 本校 御 L 分校を設 置 が が 金沢、 され 改 生じた。 中 0 ·里分校 嶽南 IE 0 位 若干 た。 3 置 た 置 蒽 小学校 を れ ح を廃 地

たっ

0 n

ح

中

が

嶽 南 移 長 地 尋常高等小学 転することで合 方課 事 務 官 校 が 調 意 停に 移 から 転改 成 立 築さ L れ 宿内 九二 九 昭 北 儿 よ

4

駿

後 1 く度 カン 0 制 度的変更、 名称変更が あ

沢

現在の裾野

市立富岡第一小学校となった(第二一章御宿

第 三節 地域社会と生活

農業の変化 農業センサス」によると、 昭和三十五)年の 総戸数は Ŧi. 一九六〇 三戸、

家数は

Ŧi.

戸とほとんどが農業に従事していた。

L

カン

長各一

名

協議員五名、

書記一名、氏子総代三名、

会

農

t

0

て次第に組分けをしてい

2

た経

緯

が

うか

が

わ

n

る。

る。 い L 後には花き るにも 作物も麦類 九 カン 九〇年には総戸 類 かわらず、 から 圧 倒的 雑穀や 農家数は四二戸とやや減って に増えてい いも類が多かったが、三〇年 数 一七〇戸 る。 を三倍近く増えて おそらく芝生の 1

区の役職村内区分と (寄)に 分 カン れていた。 金沢は現在 が、それ以前は上と下の二つの これ _ 二 の らの最 組に区分され 寄 は 現 在 モ T 0 \exists IJ 3

栽培と無関係

C は

ない

だろう。

~八組までにあたり、

新たに増えたのは九~一二組

ま

近世 後であることか でである。 1 t から明治初期に キも公民館下の 地区内には、 5 金沢の内部は戸 かけての戸数は グランドー 道祖神 か所で行われてい が 数が増えたことに 基まつられ、 お おむね二〇 サイ 戸前 る。

また戦前、 区の役職には、 分家は本家と同じ組に入ってい 顧問 二名、 相談役一名、区長・ たとい 副 う。 X

育部 土地改良議員・防災指導員・交通指導員・老人会長 計監査二名(うち一名は農業委員を兼務)、 長 · 部農会長 · 子供会長 · 勇志会長 自警団 • 婦人会長 長 体

財産区長各一名、 共有地 近世 に 各組 は 薪竹 組 長一名(計一二名)などがある。 木は 葛山 0 0 カン ね 沢 (愛き

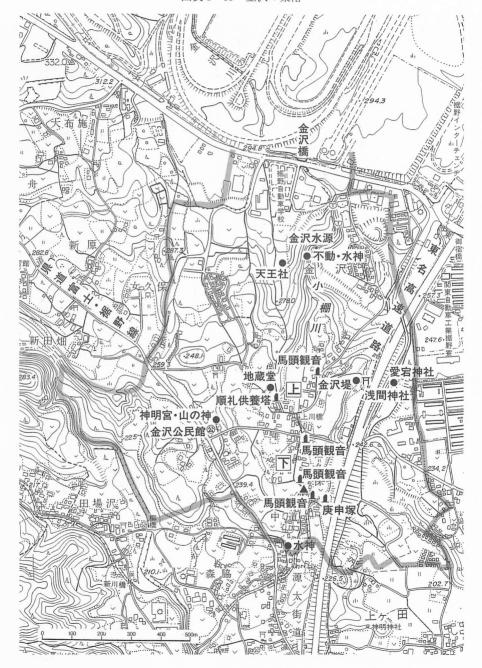
会になっていた。 山)とい また同じく、 うところが、 茅野 御 宿 芝野 上 ケ は 田 大 ٤ 野原 0 入

この 入会村組は七〇か村で、 そのうち野元(入会林野

(富士山麓)の入会で、

秣刈敷苗草などを刈ってい

た。



場 0 市 所 在 村 は 宿 印光 野の 深 山寺 • 板な 須 妻ま <u>山</u> . 神が場 下 和 . 駒ま 門と 0 今 神き 里 山やま 金 以 沢 Ŀ. 0 御 殿

草利 0 い 入 会地 ず カン 村 まで n \$ で は あっ 官 が 入会地 有 た。 地 八 七 に であっ そのうち、 編 四 入され、 明 治 たとい 七 年 金沢は小 入会権を持 の官民 う。 L 有 あら カン X 0 L 村 分 Ĺ X 15 ح カン ょ 3 は れ 使用 3 道 0 海 T 0

年 字 珥 0 須釜 に 間 Ш に そ 入一 金 元 沢 0 れ 区 ぞ 葛 四 0 れ Ш 町 共 と御宿 歩余に 0 有 権 財 限 · -産 を つい 明 は 浅 確 4 て、 田 に 神 する契約 0 金沢の入会三大字と 社 八九三(明治二十 で あ る。 が交わされ な お 六 た 金

開 料

墾などが

なされ

た。

た

愛鷹

Ш

0 取

うち一

八 た

八

を払っ

て官林を拝借

L ま

肥

草の

刈り

9

や薪

0

採

取

敷

拾

凭

間

.

馬

S

2

六

間

之土手

=

御

巫

明

治

四

年

に官民

有

区

分で官

有

地

に

編入され

葛

Ш

n てい などは る。 2 旧 0 戸 ほ 0 共 か 有 上 財 ケ 産 田 で 地 籍 財 産 0 田龙 宧 久保にも植 に よ 0 て管理 林 3 地

カン

3

九月三

十 2

0

間

魚釣り

を許 長

口

入漁

料をと

0

T

る。

0 H

堤 まで

の管

理

は

X

が

が

Ŧi.

反

歩

ほ

どあ

る。

沢

公民

館と

2

0

敷

地

運

動

場、

共

同

墓

地

地

蔵堂、

天

灌漑 金沢 用 堤 2 水 保七)年 金沢 堤 0 0 築造 明 細 に 書上 0 5 帳 T に は、 次 0 ような記 八三六(天

が あ る。

配 之節 是 1 ゟ溜 百 六拾年 井 御 普請出 以 前 延宝六午年 来申 候 野 土 手 村 彦太夫 長 四 拾 様 間 御

支

てい とし うに を奉 り 湧 堤 水 0 水 に 2 使 の堤 る T な 納することに 灌 量 は 植 用 漑 湧 5 が 堤に えた藻 料 用 減 水 0 は 水 堤 地 水 0 点が は を 0 てし 掛 神社 コ から 工 ほ カン なっ ま 9 1 增 E カン は を え に カン 網 0 0 放 てい 祭典の 飲料用 葛 て、 た 所 0 流 養 Щ あ して、 七 殖業者 た。 深 村 0 月 と当金 時 た 水としても 5 0 市 K ところ が 五. 河 15 0 貸 Ш 水 反につき一 関 道 Ŧi. 敷 0 東大震災 は を利 T 利 であ H 0 用してきた。 トメルト 0 掃 水 除 た 用 る。 升 ほ 神祭 が、 す 0 C IIX る 0 E 時 金 よ あ 2 餌 に 沢

述

浅間

神社

沢

に

は

な

神

が

ま

n

T

明

2

神

明

1 金

る。

0

は お

金 \$

沢

堤

0 社

東

F. 社

陵

0 0

末 3

端

誌

3 は 金 L 水 沢 T n 配 は、 現 ま る。 水 在 7 に まず 2 不 0 0 動 0 Ŧī. 字字 5 P 13 カュ T 新 水 カン 村 細 神 に 堰紫 から カン が カン カン < 1/5 ま 3 カン 記 0 棚だな 御 る 載 3 宿 箱 3 n \mathbf{H} 根 久保 H れ T 湖 T 1 ケ 水 る 15 な 深 金 L る。 良 沢 から 葛 用 灌 水 あ Ш 水 源 る。 漑 から 千 用 を 3 1/1 あ 福 水 す 棚 げ ٤ .

前

H

0

阴

細

書

Ł

に

は

7

0

ほ

カュ

に

\$

灌

渡

水

7

悪

が、

2

水

路

11

棚

1

呼

0

に

原

カン

3

悪

水 0

から

流

n を

h

1

<

る

た 3

8

悪

水 11

堀 棚

を

村

中 は

に 大

通 野

L

に 大 込 \$ 流 野 み 泥 1/ 末 原 棚 は が 灌 III 葛 流 0 演習 れ 溉 C Ш は 込 用 to 場 水 な 7 ٤ 落 カン 15 戦 3 L から 5 だ 車 T T ٤ から 0 金 1 15 入 利 沢 る う。 2 用 JII 市 T 15 は 荒 史 金 不 は 沢 H 大 n 野 は た 能 1 富 t= で 原 Ŧi. 士: め あ 0 泥 る。 Ш (号)。 麓 大 水 2 TS I から 0 末 n 流 現 0 端 度 は 在 n

九

月

+

六

日

C

あ

る。

現

在

祭

0

は

浅

間

神

社

が

+

月

+

Ŧi.

る に ٤ あ 言 0 て え 砂 礫 ± 壤 0 流 0 被 害 を 5 まだ に 被 0 T 1

7

記

載

3

れ

T

1

る。

神

汁

明

細

調

に

は 3

鍵

取 碑

0

勝

又

3

で、

神

明

宮

KE

0

1

T

は

次

0

よ

な

が

あ

る

重

花はなさく あ 浅 間 る。 神 耶也 社 姫の 神 命 社 公民 明 創 細 館 建 0 は 北 に 七 よ D れ Ŧi. は ば 七 0 丘 宝 浅 陵 曆 0 七 神 末 年 社 端 几 0 祭 月 神 + 神 明 宮 几 は

で 方、 六 八三(天 神 八 朔 七 宮 Ŧi. 和 は 明 祭神 治 年 八 から 年 天 1 15 昭 七 大神 村 Ŧi. 社 年 に 7 列 に 豊 受 P せ は 3 大 神 0 n 村 た で 社 創 に あ 列 る 建 せ は

F

H

木る

祭 ば VI 3 n 日 合 は 神 祀 1= 明 3 から 浅 宮 れ 間 は t= 神 ٤ 九 社 七 あ る。 几 から Ŧi. 九 Ŧi. 大 月 ま 宝宝 IE 九 た 暦 日 Ŧi. 年 駿 神 年 東 + 15 明 郡 _ 宮 創 月 富 建 から 出 Ŧī. 六 3 \exists 村 月 n に 誌 + た 浅 に 六 H あ 神 よ Ł る。 社 れ

H 神 明 宮 が Ŧī. 月 Ŧī. \exists K 行 0 T 15 る

宮宮 郎 カン 3 0) 业 祖 社 先 カン 遷 3 祀 0 言 た 5 伝 ٤ あ えとし る。 て上 ま 1= ケ 駿 東 村 郡 0 村 社 村 神

に は 真 田 兵 部 1 守 此 地 = 来 IJ シ 際 真 田 家 鎮



浅間神社 写真 3-91



写真 3-92 神明宮

あ

る

が、 V

詳

細

は

不

明 えたも

で

あ

る。

家

0 た

伝承として、

神明領

2

きさつを伝

0 に

C な 又

おそらく鍵取をして

5

る

勝

失して伝わらないとして

下 七 真 IJ ノノ為 田 兵部守 と書 IJ メ創立 シヲ長田喜左エ カン セ れ 遺趾 ン T 1 頼朝の富士裾野の巻狩当 る。 とし 元 門寄附セラレ 勝又重 この て、 金沢 真 次郎 田 兵 0 氏 部 南 テ現今処ニ安置 守 方 因 に は、 念 尺 緑 丸 同 書 石 柿 を に

積

んだ墳墓が

あ

り、

時

に

はす

た。

天王社は、

もと大野原の入会地にまつられて

い

た

と九 とも 水 地 神 蔵堂、 月の に祭りを行っ 水源の不 中 庚 旬 申 塚 動と水神・天王社は、 天王 てい 道 祖 社 るが、 神 などが は 明宮境内 Ŧi. 月 か 五. つては愛宕神 あ 日 る。 0 に Ш 現 愛宕神 祭りを行っ 0 神 在 Ŧi. 大久保 社 月 社 から Ŧi. T 日 堤 月 に 0 0

その 神

東

側

0 丘

陵の天王社、

神

金

沢水源の不 愛宕神社、

動と水神

カン

金 神

沢堤

0 0

水

社と寺・

堂の

明

ほ ٤

か

神

浅間

神社 宮

でに

居

所

から

あ

0

た

が現今

は

転 丽 和十 年 15 現在地 字 上川 大久保 大岩岩だな 0 境 12

\$

0

だ

が、

軍

用

地として接収され

たため、

力。

四

移

Ш 0 神 は 現在神明宮に二社 まつら れ 7 1 るが、

以

移



写真 3-93 水神の祭り

社 社 前 T 三(昭和三十 は 0 0 1 した。 神明宮と浅間神社それぞ た。 Ш 0 0 神 神 を東 社 は 0) 年に東名高速道路の敷設にとも 0 内 社 宮と 殿 0 神 裏 呼 明 に 25 宮 まつら 分 0 1+ れ Щ 別 T 0 ń に 神 1 T を西 た 社ずつまつられ 15 た 0 う。 宮 から 浅 な 浅 九 つ 間 間 T 神 神

15 石造物 東申塚 九六六(昭和四十 観音堂が 3 地 れ 蔵堂に まつら あり、 月二十 は 庚 れ T 申 順 三日 礼供 青年俱楽部として利用 塚 1 一)年に たは、 た仏像は ic 養塔 祭り 字 旧公民館を建設する P 田 地蔵堂 久保 をして 地 蔵 0 丘 馬 陵上、 遷した。 る。 頭 観音 L T カン 東名 など に た 高 あ が 中 が 谏 た 道 ま

七 基 で 基 あ は 馬 道 0 0 石 たとい 祖 頭 神 造 観 物 音 わ ま から 建 基 れ 立 T 3 1 3 順 れ る。 礼供 れ 庚 T 養塔三 申 15 基 る。 塚 0 0 庚 基 直 申塔の内、 F 0 0 丘 庚 陵近 申 道 塔一 は 甲 基 州 の 三 街 0 迁 計 道

道

路

0

西

側

に

あ

る。

0

塚に

は

不

動



北斗七星が彫られた 写真 3-94 庚申塔

深良

0

千

福

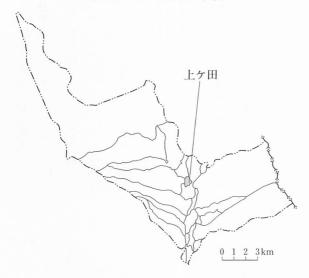
年 1 5 斗 七 カン 七星、 と呼 \$ が、 \$ (寛文七)年銘 のである。 1 ば 街 れ 道 それに手を合わせ な れ る 0 際 庚 0 に築 すでに金沢では庚申講は 申 \$ 年 か 0 に れ は 盛 た庚 んであることと関わ E た二匹 申 面 塚 に 日 は 0 猿 月と梵字、 富 から 行わ 彫られ 士 登 0 Ш n た珍 卍 が から T 御 あ 1 北 る 縁 な

万年寺 治八)年に廃寺となったとある。 沢 に (万念寺とも記す)という寺 は 寺 が な が、 『駿東郡 浄土宗 が 富岡 あ り 村 で 誌 八七 横道 に ょ 五. 0 れ 内 明 ば

> 地 考えられるが、 そらく、 年 蔵 番 から 0 興禅寺、 建 遺尊で六月二十三日に これが現地蔵堂にまつられるように つのの 御 詠歌 2 である。 現在は堂内ではなくその参道に二 15 \$ の普明寺の檀家となっている。 詠 わ な n てい お まつ るとい 金沢 0 は今里 てい るとあ 一の浄土な 地 なっ 蔵尊は たと 基 院に 0 万 お

第二〇章 上ヶ 田

図表 3-90 上ケ田の位置



第 節 地 理的概要

テ車 る上ケ田 水田が広が 馬ニ便ナリ 上ケザ 田圃 田 地 帯 は山がちな富岡地区 面盤石ヲ布クカ如ク実ニ上 という景観を持つ。 の中 平 坦 -でも水 ケ シ

ノ名ニ

適シタリト云フベシ」(「地誌取調草案」)とあ

るよ

田

黄瀬川と御宿

の山

に制約され

ながらも山

裾

15

湧

き出 あ る。 位 南北約五八〇次の広さの飛 た水を用水に さらに北約二〇〇だのところに、 置 上ケ田 東西六一 は裾野市中心部から北の方向に位置 して水田を拓い トメー 南北約 地が た地区である。 あ るが、 一些の広さが 東西約一二〇 現在、

山や に接し てい る。

となっ

てい

地籍図で確認できるだけである。

こは関東自動車工業株式会社の社宅地と東名高速道路

北

東

及

び南

は御宿地

区に囲

ま れ

北と西

は金沢と葛

久保保 地と れ 出 傾 0 丘 3 あ 続 7 L 斜 カ で 地地 なっ JII 地 利形 T 口 < T と土 る。 が 池 ٤ 低丘陵で、 用 15 ウ 西 てい る。 西 1 浅く浸食し 方 たなっ 0 堰紫 低 る。 用 向 北 が てい 0 丘 水 カン せ 側 まっ 久保: 陵 そ 12 ともに は 2 て低 御宿 よる て緩 たとい 0 0 裾部 JII ほ T 新田 地 雜 お 12 水 P カュ を形 30 は湿 沿 木 \mathbb{H} カン は り 地 に 黄 林 0 0 帯 とス 台 T 成 この辺り 傾 西 田 瀬 集落 とそ で、 ٤ 斜 Ш 状 ギ な 0 地 L 南 形 形 が • 0 を 大部 末端 部 成 南 T Ł 南 北 向 水 は 5 L 1 側 源 湧 丰 た は 15 カン 分 0 とす き水 急 形 が 河 0 金 岸 T 植 北 御 沢 斜 成 流 る 段 3 が 宿 林 0 カン 面

育園 南端 集 向 カン と続 西 カン 3 落 3 15 地 集落 道 折 X 辻 に に れ 0 て上 保育園裏に は 主 は 0 中 要 ケ田 な道 旧 八 心 戸 七 は と呼 地 が 六(明治 は 分 X 前え ノの 集会所 共 ば カン 田た 同 れ れ 九年 墓 る家 と呼 る。 地 お とくに が よ 0 ば 々 道 が n あ W 祖 る り 市 並 神 付 立 U 北 現 近 富 カン から 2 建 在 岡 3 ち 保 0 南

念寺

うう寺

から あ

0

集 0

落 T 1 0 5 東 る。

> が ٤ 流

れ

は

待合い

(字待谷田)と

3 側 場 15

所 は

が 黄 は

る。

X

で 整 ٤ III 戸 岸

理

を

L

て造成

を行

\$

海

15 そ

\$ 0

が 15

集まり、

道

祖神もまつられてい

る。 あ 瀬

また上



写真 3-95 上ケ田全景 (左側に神明宮の森)

上

ケ

田

0

くに ケ 田 まつら 0 氏 神 れ は てい 神 明宮であるが、 集落 0 西 端 葛山 「境近

手で

,城山という金沢

飛

ル地があっ

る。

そこに

は 小

つて高

さ約二五片

0

頂

部

0 0

平ら

な

小丘

から

あ

り

而

を カコ

ま た

0

つ

滅してし

まっ

踏

査

した沼館で

る

9

明まき 木 0 と伝える(『駿東 念寺は、 家 浄念寺は、 勝又家は葛山 (曹洞宗)、 々 0 今まざと 墓 から 葛山 0 あ 浄土院(杉 郡 る 本家は今里 0 富 仙年寺末の浄土宗の寺であ が、 仙年寺、 岡 村 の中興開山文譽上人の 家 誌 15 よって 土: 0 ま 浄 屋・八木家は千福 た 土院(浄土宗)とな 檀那 共 口 寺 墓 から 地 違 生 K 0 う。 は た。 誕 の普 X 0 浄 柏 内 地

てい

る

第

節

歴史概要

は う。 T あっ 一 - 八五号)。 葛 九三七 たが、 Ш に ある葛山 土取 大森 (昭和十二)年、 工事 葛山 城 に 0 出 よ 城 ここを て消 C あろうとしてい

殿 は上 に 1 あ L 族 5 葛 領主となっ Ŧi. 2 な の支配 山氏一 郎 伊豆佐野·土倉領 たと考えられ 田 ñ 殿 だ人 金屋宮 兄性れ 録系 たとも 々 原領主 重け から る。 义 は お 集)、 推 御 り 測 など、 主 葛山 宿 殿 でき 葛 系図によると(『市史』 平 氏系図には、 ع れ Ш 3 Ш あ 氏 は法橋、 族に る 0 0 地 カコ 祖 域 は 5 惟き 平 を 忠 開 0 Ш ح の三 0 発 周 律り 族 辺 師 ほ 0 L 一男かげ 7 0 カコ 所 地 中 金 領 付 名 里 沢 で

徳川 と支配 六 世 紀 0 0 変遷 後半、 から あ 葛

1 中

金沢手城 沿山跡

上

ケ

田

の原始

古代までは、

遺

跡

P

後半まで

領

域

7

あっ

たと考えら

集落 カン ら葛 資料 Ш が の字 な 5 丁源太海道 0 で 明ら カコ 出 でない。 る中 程

に

Щ れ

氏 る 中

0

転

退後、 資料

後北条、

武 で

田

が、 世

が

なく不 は葛山

明 氏

あ 族の

る。